

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第 78 集

笹塚古墳

平成 24 年 3 月

宇都宮市教育委員会

序

笹塚古墳は古墳時代の中期に造られた全長約 100m の市内最大の前方後円墳です。昭和 32 年に墳丘部分が県指定史跡となりましたが、周りの周濠部分は未指定のままです。

そこで、本教育委員会では、古墳の範囲と内容を把握するために、平成 18 年より 3 回に渡り、確認調査を実施いたしました。その結果、三段築成で、埴輪と葺石を有し、さらに二重の周濠をもつ畿内型の古墳であることが判明しました。

この時代は、「倭の五王」の時代と呼ばれ、強力な王権のもとに国家が形成された時期で、笹塚古墳の被葬者もその一翼を担っていたものと思われま

す。本報告書は調査の成果をまとめたものであり、本県の古墳時代の歴史を解明する上で、参考となれば幸いです。

最後になりましたが、本調査及び報告書の作成にあたり、ご尽力・ご協力を賜りました地権者並びに地域の皆様方、及び栃木県教育委員会等の関係諸機関の方々には厚く御礼申し上げます。

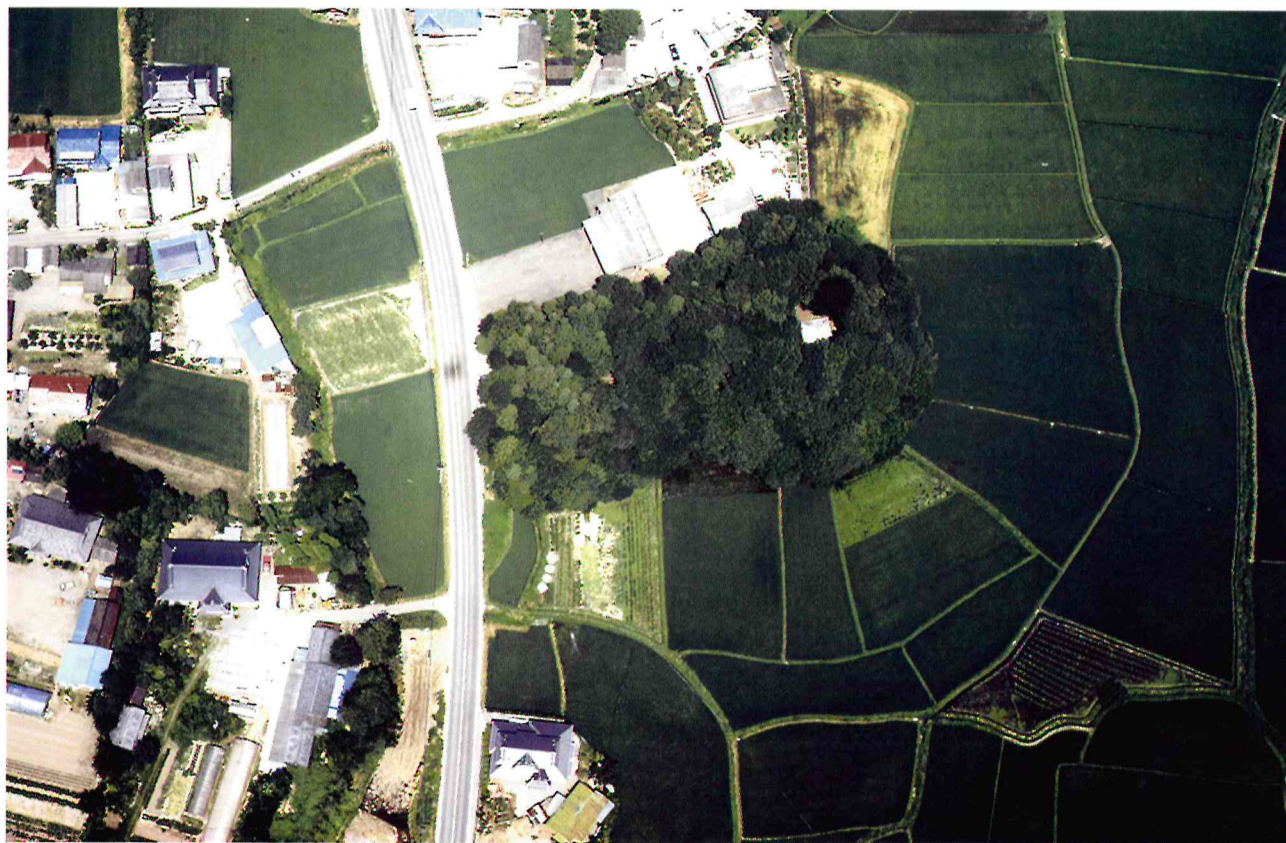
平成 24 年 3 月 30 日

宇都宮市教育委員会

教育長 伊藤 文雄



笹塚古墳と鶴舞塚古墳



笹塚古墳全景

目 次

I はじめに

1 調査の経過	1
2 遺跡の環境	7

II 調査概要

1 遺構	14
(1) 第I次調査	
(2) 第II次調査	
(3) 第III次調査	
2 遺物	46
(1) 埴輪	
(2) その他の出土遺物	

III おわりに

68

挿 図 目 次

第1図 グリッド図	2	第13図 T-7 (南側) 平・断面図	22
第2図 笹塚古墳トレンチ配置図	3・4	第14図 T-8 平・断面図	23
第3図 周辺遺跡分布図	11	第15図 T-9 平・断面図	24
第4図 東谷古墳群分布図	13	第16図 T-10 (東側) 平・断面図	25
第5図 T-1 平面図	14	第17図 T-10 (西側) 平・断面図	26
第6図 T-2 平・断面図	15	第18図 T-11 平・断面図	27
第7図 T-3 平・断面図	16	第19図 T-12 平・断面図	28
第8図 T-4 平・断面図	17	第20図 T-13・14 平面図	29
第9図 T-5 (北側) 平・断面図	18	第21図 T-13・14 断面図	30
第10図 T-5 (南側) 平・断面図	19	第22図 T-15 (北側) 平・断面図	31
第11図 T-6 平・断面図	20	第23図 T-15 (南側) 平・断面図	32
第12図 T-7 (北側) 平・断面図	21	第24図 T-16 平・断面図	33

第25図	T-17平・断面図	34
第26図	T-18平・断面図	36
第27図	T-19平・断面図	37
第28図	T-20平・断面図	38
第29図	T-21平・断面図	39
第30図	T-22平・断面図	40
第31図	T-23平・断面図	41
第32図	T-24平・断面図	42
第33図	T-25・26平・断面図	43
第34図	T-27平・断面図	44
第35図	T-28平・断面図	45
第36図	出土埴輪実測図(1)	50
第37図	出土埴輪実測図(2)	51
第38図	出土埴輪実測図(3)	52
第39図	出土埴輪実測図(4)	53
第40図	出土埴輪実測図(5)	54
第41図	出土埴輪実測図(6)	55
第42図	出土埴輪実測図(7)	56
第43図	出土埴輪実測図(8)	57
第44図	出土埴輪実測図(9)	58
第45図	出土埴輪実測図(10)	59
第46図	出土埴輪実測図(11)	60
第47図	出土埴輪実測図(12)	61
第48図	出土埴輪実測図(13)	62
第49図	出土埴輪実測図(14)	63
第50図	出土埴輪実測図(15)	64
第51図	出土埴輪実測図(16)	65
第52図	出土埴輪実測図(17)	66
第53図	出土埴輪実測図(18)	67
第54図	その他の出土遺物	67
第55図	笹塚古墳推定復元図	73・74

第6表	銀杏葉線刻埴輪出土古墳一覧表	72
第7表	笹塚古墳と塚山古墳埴輪比較表	72

図 版 目 次

PL 1	① T-1 葺石確認状況	② T-2 葺石確認状況	③ T-4 断面確認状況
PL 2	① T-5 断面確認状況	② T-5 遺物出土状況	
PL 3	① T-8 埴輪出土状況	② T-9 葺石確認状況	③ T-10 埴輪確認状況
PL 4	① T-11 遺構確認状況	② T-13 断面確認状況	
PL 5	① T-15 外濠確認状況	② T-19 葺石確認状況	
PL 6	① T-19 埴輪出土状況	② T-21 内濠確認状況	③ T-22 内濠確認状況
PL 7	① T-23 内濠確認状況	② T-24 外濠確認状況	
PL 8	① T-27 遺構確認状況	② T-28 集石遺構確認状況	
PL 9	① 埴輪 1～4		
PL10	① 埴輪 5～10		
PL11	① 埴輪 11～16		
PL12	① 埴輪 17～23		
PL13	① 埴輪 24～30		
PL14	① 埴輪 31～35		
PL15	① 埴輪 36～41		
PL16	① 埴輪 42～48		
PL17	① 埴輪 49～84		
PL18	① 埴輪 85～88	② その他の土器	

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	12
第2表	東谷古墳群一覧表	13
第3表	埴輪観察表(1)	47
第4表	埴輪観察表(2)	48
第5表	埴輪観察表(3)	49

例 言

1 本報告書は、栃木県宇都宮市東谷町 414 他に所在する笹塚古墳に関する発掘調査報告書である。

2 笹塚古墳の調査は、遺跡の範囲確認に伴う調査で、平成18年度～平成20年度にかけて国庫補助事業として実施したものである。

3 調査期間は次のとおりである。

第Ⅰ次調査 平成18年10月24日～平成19年1月30日

第Ⅱ次調査 平成19年10月22日～平成19年12月28日

第Ⅲ次調査 平成20年11月2日～平成21年1月30日

4 調査面積は次のとおりである。

第Ⅰ次調査 約200㎡

第Ⅱ次調査 約200㎡

第Ⅲ次調査 約100㎡

5 本墳の発掘調査での測量、写真撮影等は今平利幸がこれにあたった。

6 遺構・遺物の整理、実測などは、上野とも子、齊藤しのぶ、君島朱美、澤村有紀子、川津淳子、阿久津とよ子、大野節子、鈴木道子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、今平利幸、上野とも子、齊藤しのぶがこれにあたった。

7 本書の執筆は今平がこれにあたった。

8 本墳出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。

9 発掘調査の関係者は次のとおりである。

[調査主体]

(第Ⅰ次調査)

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 塙 静夫

〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄

教育次長 渡辺孝夫

調査担当 文化課長 渡辺 卓

文化課長補佐 篠原 豊

文化財保護係長 梁木 誠

文化財保護係 大塚雅之・富川努・神野安伸・増山孝之

・今平利幸・須田浩太郎・前原義之・井上俊邦・黒須寛

(第Ⅱ次調査)

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 塙 静夫

〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄

教育次長 高井 徹

調査担当 文化課長 篠崎 茂

文化課長補佐 篠原 豊
文化財保護係長 大塚雅之
文化財保護係 富川努・神野安伸・増山孝之・今平利幸
・須田浩太郎・前原義之・井上俊邦・黒須寛
・笥芳子

(第Ⅲ次調査)

[指導助言]

宇都宮市文化財保護審議委員会委員 竹澤 謙

〃 橋本澄朗

宇都宮市教育委員会 教育長 伊藤文雄

教育次長 高井 徹

調査担当 文化課長 檜原貞亮

文化課長補佐 篠原 豊

文化財保護係長 大塚雅之

文化財保護係 神野安伸・今平利幸・須田浩太郎・前原義之

・井上俊邦・黒須寛・鈴木浩史・笥芳子

[調査補助員] 入江晴江、入江文子、入江つや子、入江タカ子、入江通子、入江タネ子、
篠原信子、佐藤江美子、堀中国代、松浦悦子、小林哲男、高嶋美代子、高嶋キヨノ、橋本
フヂ、新井みや子、益子モト子、中尾忠治

10 発掘調査の実施並びに本書の作成にあたっては、栃木県教育委員会の指導を受けるとともに次の諸機関及び諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝を表したい。(順不同、敬称略)(財)とちぎ生涯学習文化財団、宇都宮市農業共同組合、感應寺、篠原薫、篠原義昌、福田アサ、福田和夫、靄蒔光一、福田茂、福田かほる、福田昭二、福田光男、福田茂夫、鈴木芳和、福田正義、福田敏彦、福田トミ、藤岡良雄、小島豪市郎、広瀬和雄、内山敏行、秋元陽光、賀来孝代、米澤雅美、太田博之、大澤伸啓、市橋一郎、篠原祐一、森嶋秀一、加部二生、山口耕一、木村友則

凡 例

1. 挿図の縮尺は、古墳などの遺構が 1/50 とし、遺物は 1/3 もしくは 1/4 で示した。また、遺物実測図番号は遺構平・断面図の番号及び図版の遺物番号と一致する。





2. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。

3. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。

ローム粒…LR ロームブロック…LB 今市パミス…IP 七本桜パミス…SP 榛名二ツ岳
火山灰…FA 炭化物…C

4. 遺構においては次の略号を使用した。

溝…SD 土坑…SK

5. 土層断面図において  は黒色地山、 はローム層、 は粘土層、 は砂・礫層を示す。

I はじめに

1 調査の経過

笹塚古墳は昭和32年に栃木県指定史跡に指定されたが、その際の指定範囲は墳丘部分のみで、県史の編纂に伴い作成された墳丘測量図は航空測量によるもので、50cmコンターのものであった。

平成になり本古墳の周辺の東谷町から中島町にかけては、住宅都市整備公団（現在のUR都市機構）による大規模な商業施設等の整備が行われ、本古墳の近くを北関東自動車道がとおる等、周辺開発が活発な動きを見せている。

そこで、今回の調査では、25cmコンターで墳丘等を描き出し、さらに未指定である笹塚古墳の周濠部分に試掘溝（トレンチ）を入れて確認し、古墳の範囲を確定するための確認調査を平成18年～平成21年度にかけて3回実施した。なお、調査に当たっては国・県の補助を得て実施した。

第Ⅰ次調査は、平成18年11月1日に開始し、平成19年1月23日までの期間で実施した。墳丘及び周濠部分に計7本のトレンチを設定し、葺石や埴輪の有無、周濠の立ち上がり部分の確認などを行った。調査の結果、三段築成の古墳で、後円部第三段斜面に葺石が葺かれ、墳頂部及び第二段平坦面で円筒埴輪及び朝顔形埴輪が置かれていたことが判明した。また、周濠底近くからFAもしくはFPと思われる火山灰、中層付近で浅間B軽石層が確認できた。さらに、今まで想定していなかった二重周濠であることが確認できた。尚、本報告では、従来使用している「周溝」よりも、その広さや様相から「周濠」を使用する。

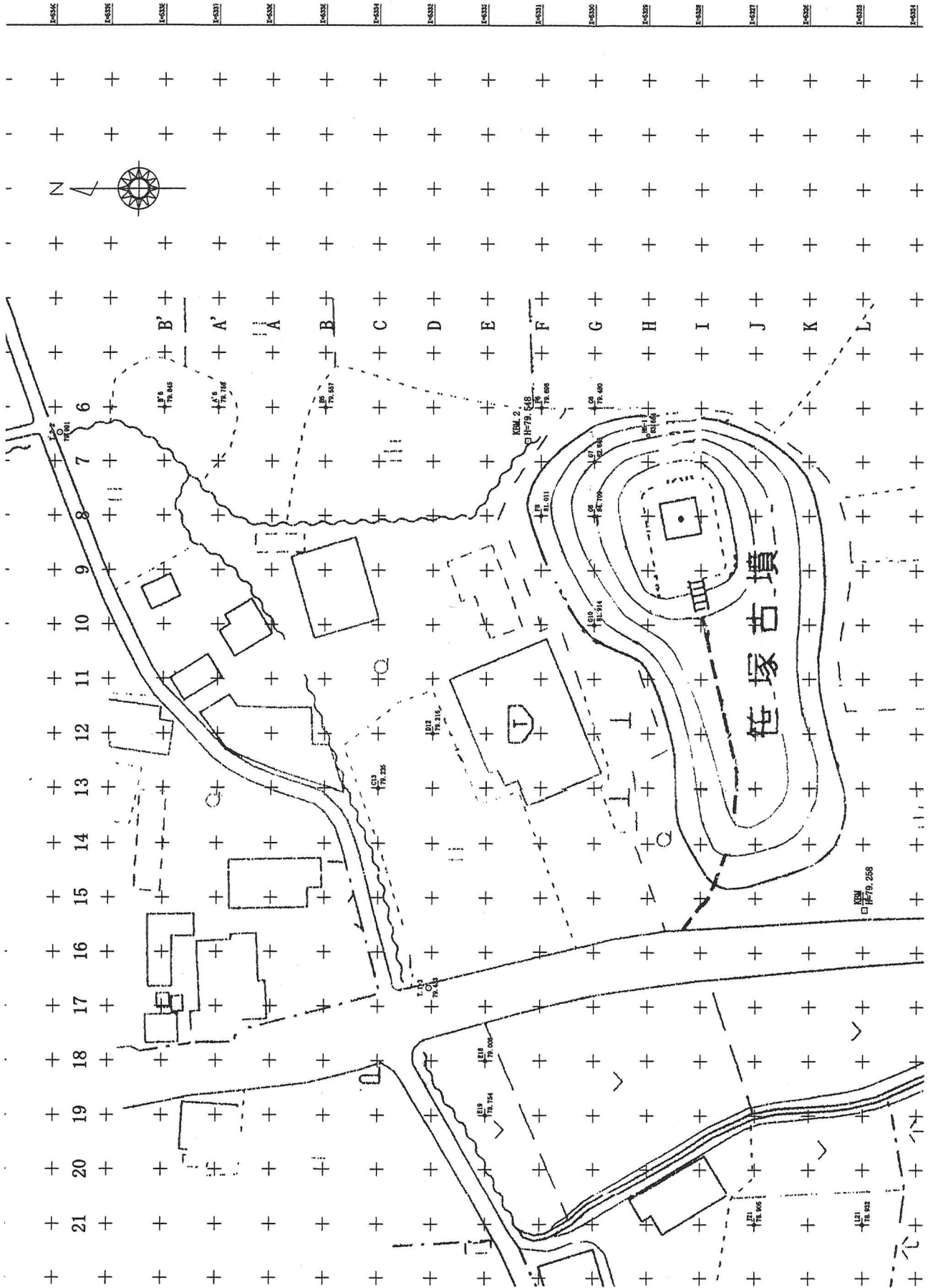
第Ⅱ次調査は、平成19年10月22日に開始し、平成19年12月28日までの期間で実施した。墳丘及び周濠部分に計10本のトレンチを設定し、前方部における墳丘の状況と周濠調査を実施した。調査の結果、前方部も三段に築かれ、葺石をもつことがわかり、前方部・後円部とも葺石をもち、三段築成であることがわかった。なお、葺石は平坦部には葺かれていないこともわかった。また、前方部第二段平坦面において、埴輪の樹立状態を確認した。二重周濠についても前方部側も二重に周濠が廻っていることが確認できた。さらに、隣接する鶴舞塚との関係を把握するために、トレンチを2本設定し調査を行った。その結果、笹塚古墳の外濠が鶴舞塚古墳の周濠により途切れている状況が確認できた。

第Ⅲ次調査は、平成20年11月2日に開始し、平成21年1月30日までの期間で実施した。墳丘及び周濠部分に計11本のトレンチを設定し、古墳の北側周濠部分の調査を実施した。調査の結果、後円部側の二段平坦面の端部より埴輪がまとまって出土していることから、埴輪の樹立位置は、平坦面の端部であったと想定される。また、前方部外濠の外側に10～20cmの盛土と小石を敷いている状況が確認でき、外堤の存在が確認できた。この外堤部を含めた総長は210mを越え、県内最大級の墓域をもつ古墳であることが判明した。

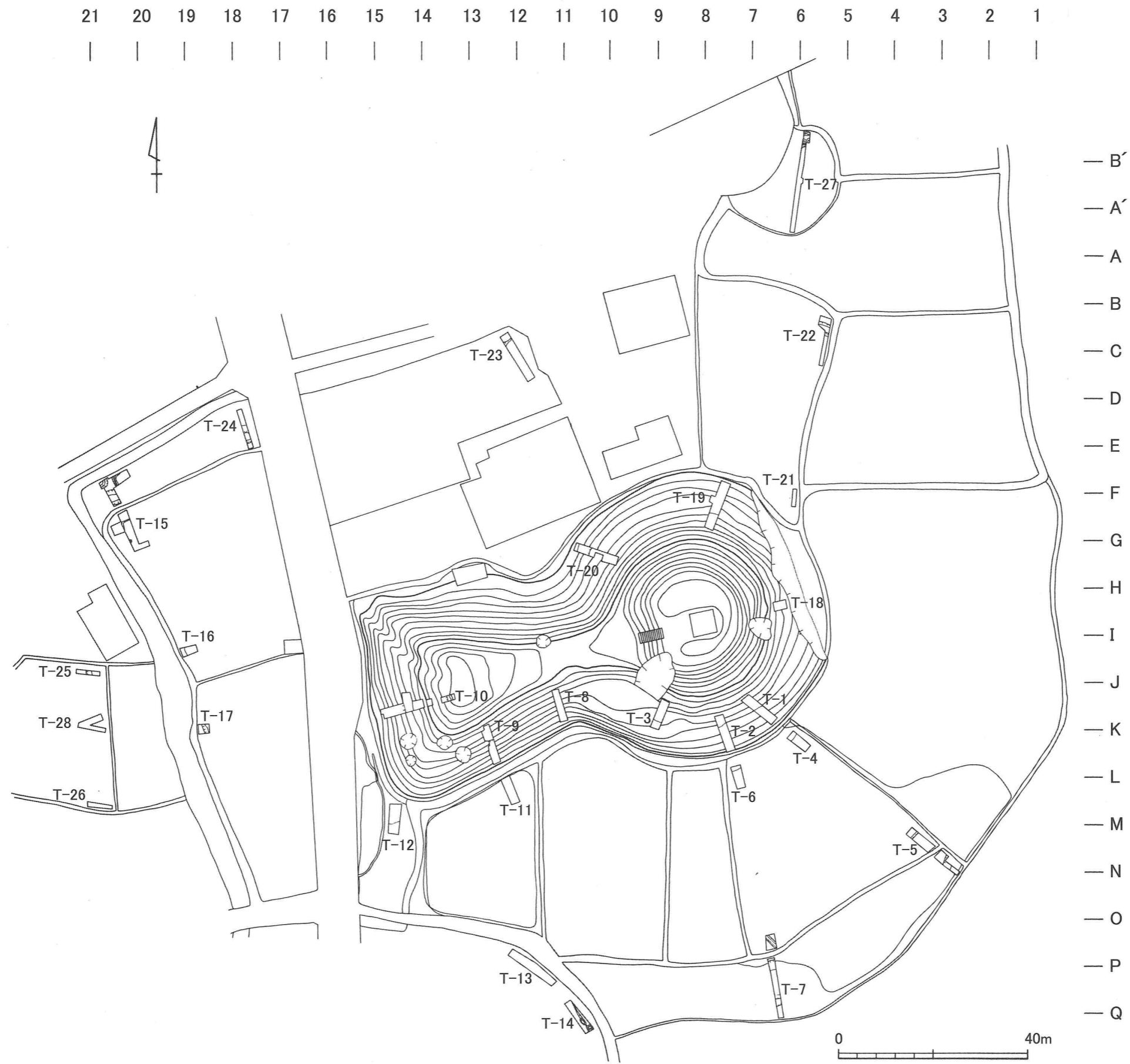
【調査日誌抄】

（第Ⅰ次調査）

- 11月1日 プレハブ等の設置。
- 11月2日～11月30日 測量に先立つ下草刈り。
- 11月21日・22日 測量杭の打設。
- 11月24日～12月20日 墳丘測量。
- 12月1日 T-1を設定し、掘り下げ。



第1図 グリッド図



第2図 笹塚古墳トレンチ配置図

- 12月4日 T-1で葦石及び埴輪が転落した状態で確認。上層からは近世以降の土器片が出土。
- 12月5日 T-1で葦石が並んでいる状況を確認。T-2を設定し、掘り下げ。
- 12月7日 T-2の掘り下げ。葦石を確認、さらに埴輪がまとまって出土。
- 12月11日 T-3を設定し、掘り下げ。
- 12月12日 T-3で葦石を確認。上層からは近世以降の土器片が出土。
- 12月14日 T-1遺物出土状態図作成。
- 12月15日 T-1清掃後写真撮影。T-2遺物出土状態図作成。T-4～T-7のトレンチ設定。
- 12月19日 T-2・T-5清掃後遺物出土状態写真撮影。
- 12月20日・21日 T-4周濠部分を掘り下げ。
- 12月22日 T-5埴輪の取り上げ。
- 12月25日 T-1遺物の取り上げ。完掘写真撮影。T-2葦石状況測量後写真撮影。T-5の掘り下げ。
- 1月9日 T-2葦石状況図作成。T-5遺物出土状態図作成。T-7の掘り下げ。
- 1月10日 T-2完掘状況写真撮影。T-4遺物出土状態図作成。T-7掘り下げ。
- 1月11日 T-3遺構平面図作成。T-4掘り下げ、セクション図作成。T-7掘り下げ。
- 1月16日 T-3清掃後写真撮影。T-5掘り下げ後セクション図作成。
- 1月17日 T-5・T-6掘り下げ。T-7セクション図作成。
- 1月18日 T-3掘り下げ。葦石を確認。T-5掘り下げ後清掃、完掘写真撮影。T-6・7セクション写真撮影。T-7セクション図作成。
- 1月19日 T-3掘り下げ。T-5セクション図作成。T-6・T-7遺構平面図作成。プレハブ及びトイレの撤去
- 1月22日・23日 重機によりトレンチの埋め戻し。調査終了。

(第Ⅱ次調査)

- 10月22日 プレハブ等の設置。
- 10月23日～10月25日 測量に先立つ下草刈り。
- 10月24日 T-8～T-10のトレンチ設定。
- 10月25日～11月1日 T-8・T-9の掘り下げ。
- 11月2日 T-8清掃後写真撮影。
- 11月5日 T-8を2m拡張し掘り下げを行った結果葦石を確認。清掃後遺物出土状態写真撮影。
- 11月9日 T-9の遺構平面図作成。
- 11月13日 T-9の遺構平面図作成。その後清掃をし、遺物出土状況写真を撮影。T-10の掘り下げ。T-11・T-13・T-14を重機により掘り下げ。
- 11月14日 T-8の遺物出土状態図作成。T-10の掘り下げ。T-15・T-16を重機により掘り下げ。前方部周濠側の地形測量図を作成。
- 11月15日 T-10の掘り下げ。T-13・T-14の鶴舞塚周濠部分を掘り下げ。
- 11月16日 T-13、T-14の掘り下げ完了後、セクション写真撮影。その後セクション図作成。T-11の掘り下げ。
- 11月20日 掘り下げ。
- 11月21日 T-11・T-12の掘り下げ。セクション図作成、セクション写真撮影。
- 11月22日 T-12を西側に1mほど拡張し、掘り下げ。葦石が直角に曲がる状況が確認できたことから、この場所が前方部南西端であることが判明。

- 11月29日 T-11・T-12清掃後、完掘写真撮影。T-9 第三段斜面の葺石出しを行う。
- 11月30日 T-9 清掃後、葺石出土状況写真撮影。第三段斜面の葺石出土状況図作成。T-10の掘り下げ。
- 12月4日 T-9 第二段斜面の葺石出土状況図作成。T-12の遺構平面図作成。T-15の掘り下げ。二重周濠の外濠部分を確認。
- 12月5日 T-13・T-14の遺構平面図作成。T-15の中堤部分及び外濠の掘り下げ。周濠底は砂礫層であることがわかった。中堤部分から小砂利や埴輪片が出土。
- 12月6日 T-8遺構平面図作成。T-11遺構平面図作成。その後、埴輪を取り上げたところその下からさらに埴輪片が出土した。埴輪の出土状況のエレベーションを作成。T-15の掘り下げ。
- 12月7日 T-9セクション清掃後、写真撮影。西壁面のセクション図作成。
- 12月11日 T-10遺構平面図作成。T-11遺物平面図作成。T-17の周濠部分を掘り下げ。
- 12月12日 T-10の掘り下げ、埴輪の出土状況を図面に追加。清掃後、埴輪の出土状況写真を撮影。T-11を清掃後、完掘写真を撮影。T-16の遺構平面図・セクション図作成。T-17のセクション図作成。
- 12月14日 T-10の掘り下げ、平坦部及び斜面部分より埴輪片が多量に出土。T-16の遺構平面図作成。T-17のセクション清掃後写真撮影。
- 12月17日 T-8セクション清掃後セクション写真撮影。T-10の清掃後、埴輪出土状態の写真撮影。T-15の遺構平面図作成。
- 12月18日 T-10の掘り下げ。エレベーション図も作成。図化した埴輪を取り上げる。T-15の遺構平面図作成。
- 12月19日 T-10の墳頂部分の遺構平面図及びセクション図を作成。T-15のセクション図を作成。
- 12月20日 T-10の新たに出土した埴輪出土状態図・エレベーション図を作成。T-8の埴輪出土状況のエレベーション図作成。
- 12月21日 T-10の葺石状況図を作成。清掃後、埴輪樹立状態写真の撮影。T-15の遺構平面図を追加。
- 12月26日・27日 プレハブを撤去。
- (第Ⅲ次調査) 重機によりトレンチの埋め戻し。調査終了。
- 11月18日 プレハブ等の設置。
- 11月19日 測量に先立つ下草刈り。
- 11月20日 T-18・T-19のトレンチ設定。表土剥ぎ。
- 11月25日 T-18・T-19の掘り下げ。T-20～T-23のトレンチ設定。
- 11月27日 T-19の掘り下げ。T-24・T-15拵のトレンチ設定。
- 12月2日 T-19～T-22掘り下げ。
- 12月3日 T-19の清掃終了後写真撮影。T-23の掘り下げ。
- 12月5日 T-20の清掃終了後写真撮影。T-23・T-24の掘り下げ。
- 12月10日 T-22の掘り下げ、T-19遺物出土状態図作成。
- 12月11日 T-21・T-22の掘り下げ。T-19遺物出土状態図作成。
- 12月12日 T-19の掘り下げ。T-21・T-22清掃後写真撮影。
- 12月16日 T-21・T-27の掘り下げ。T-22セクション図及び遺構平面図作成。
- 12月17日 T-21・T-27の掘り下げ。
- 12月18日 T-21・T-27の掘り下げ。T-20遺構平面図作成。

- 12月19日 T-24の掘り下げ。T-18遺構平面図作成。T-23清掃後写真撮影。
- 12月24日 T-18・T-27の掘り下げ。T-27清掃後写真撮影。T-23遺構平面図・セクション図作成。
- 12月25日 T-18・T-20の掘り下げ。T-23・T-27セクション図作成。
- 1月6日 T-19・T-20の掘り下げ。T-18遺構平面図作成。
- 1月7日 T-19・T-20・T-24の掘り下げ。T-18セクション図作成。
- 1月8日 T-20・T-25・T-26の掘り下げ。T-24遺構平面図作成、清掃後写真撮影。
- 1月9日 T-25の掘り下げ。T-28のトレンチ設定。
- 1月13日 T-19遺物平面図作成。T-20の掘り下げ。T-25・T-28セクション図作成。
- 1月14日 T-20の掘り下げ。T-25・T-26遺構平面図作成。
- 1月15日 T-28の掘り下げ。T-19のセクション図作成。
- 1月16日 T-28遺構平面図作成。T-19セクション図作成。
- 1月19日 T-15拵の遺構平面図作成。T-19清掃後写真撮影。T-20遺構平面図作成。T-23埋め戻し。
- 1月20日 T-28のエレベーション図作成。T-15拵の遺構平面図作成。T-18・T-20・T-21・T-27埋め戻し。
- 1月21日 T-20セクション図作成。T-19・T-25・T-26埋め戻し。
- 1月22日 T-28の断ち割り。T-20埋め戻し。
- 1月27日 T-28の断ち割り後セクション図作成。
- 1月28日 T-28の清掃後写真撮影。埋め戻し。

2 遺跡の環境

笹塚古墳の所在する宇都宮市は、栃木県の中央部に位置し、関東平野の最奥部にあたる。笹塚古墳は宇都宮市街地の南南東へ約7km、上三川町の中心地からは北へ約5kmに位置する。

笹塚古墳は田川低地の標高約80mに立地する。本墳の西方約600mに田川が南流し、東方約100mに赤沢川が南流する。周辺は若干の民家が立ち並ぶが、ほとんどが水田である。水田のある低地は田川の旧河道部分とされる部分で、集落のある場所は微高地上に立地し、本墳もその微高地を利用して造墓されたものと考えられる。

次に本古墳の周辺約2km圏内の遺跡を中心に、歴史的環境について概略を述べる。

旧石器時代

田川右岸の神主台地上の上神主・茂原官衙遺跡(43)では、ハードローム層下位から暗色帯中位にかけての層位で珪質凝灰岩・珪質流紋岩の石核や剥片が出土している。田川左岸では、願成寺台地上の立野遺跡(19)では円形搔器や剥片が出土し、杉村遺跡(23)では水晶製尖頭器が発見されている。これより一段高い磯岡台地上では、尖頭器、スクレイパー等を含む石器群が6箇所確認されている。

縄文時代

早期は、杉村遺跡で撚糸文系と田戸下層式の土器がまとまって出土し、砂田遺跡(16)では落し穴が数基確認されている。

前期は、立野遺跡、杉村遺跡、磯岡遺跡(26)等で土器片が出土しているが、遺構は不明である。

中期は、立野遺跡で土坑数基、磯岡遺跡で竪穴住居跡1軒、磯岡北古墳群(25)で土坑1基が確認されているが、遺跡の規模は小規模である。

後・晩期は、立野遺跡で数基の土坑、西下谷田遺跡（41）で土坑が確認されているのみである。

弥生時代

前期末から中期初頭は、権現山遺跡（24）、百目鬼遺跡（31）で少量の土器片が出土している程度である。

中期後半は、磯岡遺跡で土坑2基、仏沼遺跡（56）で土坑2基、磯岡北古墳群では竪穴住居跡1軒と土坑2基が確認されているが、遺構・遺物とも極めて希薄である。神主台地上では、愛宕塚東遺跡（39）で後半の土器片が確認されている他、西下谷田遺跡で住居跡1軒と土坑1基が確認されている。

後期は、杉村遺跡で土坑1基、権現山遺跡で二軒屋式と樽式の土器片が出土している。中島笹塚古墳群（22）、百目鬼遺跡、東谷北浦遺跡（28）でも遺構は確認されていないが、一定数の土器片が出土している。神主台地上では、愛宕塚東遺跡で二軒屋式土器片が多数確認されている他、向原南遺跡（46）で4軒、上ノ原遺跡（47）で10軒、殿山遺跡（48）で20軒の竪穴住居跡が確認され、台地上にやや規模の大きな集落が形成されていることがわかる。後期になると、田川右岸の神主台地上の集落の規模が拡大していく様子が窺われる。

古墳時代の集落

前期の集落は、田川左岸では砂田姥沼遺跡（17）で竪穴住居跡が2軒、西刑部西原遺跡（18）で1軒、砂田東遺跡（15）で2軒が確認されている。これに対し、田川右岸では、大日塚古墳（38）周辺で7軒、西下谷田遺跡で16軒、上ノ原遺跡で6軒の竪穴住居跡が確認されている。これらの遺跡ではS字甕をはじめとする東海系土器や樽式・吉ヶ谷系土器など外来系の土器が比較的多く出土している。

中期になるとさらに集落数が増えてくる。特に笹塚古墳の北東側には大規模な集落がつくられる。

権現山遺跡は、笹塚古墳の北東へ約500mに位置し、願成寺台地上に立地する。古墳時代中期～終末期にかけての大規模な集落で、鍛冶遺構を含む206軒の竪穴住居跡（報告書では竪穴建物跡と表記）などが確認されている。この遺跡内では、笹塚古墳と密接な関係にあると考えられる豪族居館跡が確認されており注目される。北関東自動車道建設に先立ち行われた調査では、南北方向が約100mの堀跡とそれに並行する柵列、掘立柱建物跡などが見つかるとともに、近年、新潟大学考古学研究室での調査で南辺及び西辺の堀跡や大型の竪穴建物跡が見つかっている。

百目鬼遺跡は笹塚古墳の東側に位置し、笹塚古墳と同じ田川低地上に立地する。古墳時代中期～後期にかけての竪穴住居跡が53軒確認されている。

立野遺跡は、杉村遺跡の北、磯岡北古墳群や中島笹塚古墳群の西側に位置し、願成寺台地上に立地し、古墳時代中期～後期にかけての集落で、91軒の竪穴住居跡などが確認され、このうちの44軒が中期のものである。東側にはこの集落跡に併行する磯岡北古墳群や中島笹塚古墳群が所在する。また、この遺跡では一辺が14.5mと12mの大形の竪穴住居跡が確認されている。

杉村遺跡は、権現山遺跡と磯岡北古墳群の間に位置する。この遺跡は古墳時代中期～終末期にかけての集落で、鍛冶遺構を含む72棟の竪穴建物が確認されている。その多くは古墳時代中期後半の時期のもので、後期になると1～2軒程度が見られる程度になってしまう。第113号遺構は、遺跡の北東部に位置し、東西2.5m、南北3.65mの長方形の竪穴建物跡で、炉が5箇所確認され、その周辺からは羽口に転用したと考えられる高坏の脚部や鉄滓10点、砥石片4点、鉄製品1点などが出土している。このことから、この遺構は鍛冶遺構と考えられている。

砂田遺跡は、笹塚古墳の北北東へ約2kmのところのところに位置し、願成寺台地上に立地し、古墳時代中期～後期にかけての竪穴住居跡が36軒以上、掘立柱建物跡などが確認されている。遺跡内では、管玉・白玉・剣形の

未成品や製作時の剥片などが多数出土した石製模造品の工房跡と考えられる遺構が見つまっている。

一方、田川西岸の神主台地上でも殿山遺跡（竪穴住居跡447軒など）、向原遺跡（竪穴住居跡22軒・堀立柱建物跡10棟など）など大規模な中後期の集落跡が展開する。

古墳時代の古墳

前期古墳は、本古墳から西に約1.5kmのところ、茂原古墳群が所在する。大日塚古墳(38)は、この地域に初めて造られた古墳で、全長36mの前方後方墳である。昭和58年からの発掘調査により木棺直葬の主体部で、副葬品として素文鏡が出土している。これに続き、その南側に全長50mの愛宕塚古墳(40)が築かれる。舟形の木棺をもつ木棺直葬の主体部で、副葬品として仿製鏡、櫛、刀子、管玉、ガラス小玉などが出土している。その後、谷を挟んだ北側の台地上に全長約60mの権現山古墳(37)が造られる。

前期末から中期初頭にかけては、この茂原古墳群から約1km南に所在する全長54mの上神主浅間神社古墳(44)が造られる。この古墳は円墳で、この地域で初めての円形の形をした古墳である。また、この周辺では方墳が3基確認され、そのうちの神主38号墳は木棺直葬の主体部が確認されたほか、周溝内から斧と鎌の石製模造品が出土している。その後もこの一帯には中期から後期にかけての古墳が連続して造られ、前方後円墳2基のほか38基の円墳と5基の方墳からなる大規模な古墳群である。

中期になると本古墳をはじめとする東谷古墳群が形成される。双子塚古墳(27)は、本古墳の北側300mの位置に築かれた全長73mの前方後円墳で、明治時代の学校建設に伴い前方部が削平された。鶴舞塚古墳(30)は、笹塚古墳の南側に隣接し、墳径約53m、高さ約6m、外径で約88mの二段築成の円墳である。第一段平坦面の幅は4.8mと広い。大正年間に墳丘が一部削平され、さらにその後の宅地造成により墳丘は完全に削平された。昭和58年の調査では、墳頂部より副葬品と思われる鉄鎌と鉄先が出土している。松の塚古墳(32)は、笹塚古墳の南東約300mのところ、墳径約50m、高さ約6.7m、外径で約100mの三段築成の円墳である。北関東自動車道建設に伴い百目鬼遺跡S Z-80として調査され、周堀内より土師器高坏片1、鉄製品2点(刀子1・引手1)が出土している。また、周堀内からは火山灰(Hr-FA)が確認されている。この他に第2表に示すように、糠塚古墳、原古墳群、権現塚古墳群、車塚古墳群が築造される。

笹塚古墳の北東1.5kmのところにはほぼ同時期の磯岡北古墳群(25)が所在する。この古墳群では円墳9基、竪穴小石室1基、埴輪棺1基、土坑墓5基が確認されている。1号墳は、南北12.6m×東西13.2mの円墳で、周堀内よりTK208型式の須恵器(坏蓋・坏身・甗・樽形甗)が出土している。3号墳は、墳径21mの二段築成の円墳で、この古墳群内で最大の古墳である。主体部は木棺直葬で、鉄刀3振、鉄鎌18本、ガラス小玉69点、珠文鏡1面が出土している。9号墳の西側で1号埴輪棺が確認されている。2本の円筒埴輪を組合せ、別の2個体の破片を使って両小口や透孔などを塞いでいる。全長は87cmで、二条三段と三条四段の円筒埴輪を使用している。そのうちの三条四段の円筒埴輪は「銀杏葉文」線刻を有する。

この古墳群の北側に隣接して中島笹塚古墳群(22)が所在する。この古墳群も中期の所産で方墳2基、円墳14基が確認されている。2号墳は、南北21.2m×東西24.8mの二段築成の円墳である。埋葬施設は確認されていないが、墳丘覆土や周堀内より土師器・須恵器のほか、珠文鏡1面、鉄剣片2、棒状鉄製品1、板状鉄片2、玉類(管玉2・白玉2・ガラス小玉1・ガラス丸玉158・土製丸玉1)が出土している。10号墳は、墳径14mの円墳で、同じく埋葬施設は確認されていないが、墳丘覆土や周堀内より土師器・須恵器のほか、素文鏡1面、刀片などが出土している。

この中島笹塚古墳群の東側に隣接して琴平塚古墳群(20)が所在する。この古墳群は古墳時代後期の前方後円墳3基、円墳11基で構成され、東谷古墳群、磯岡北古墳群、中島笹塚古墳群に後続する古墳群である。

琴平塚1号墳は、全長52mの二段築成の前方後円墳で、三条四段の円筒埴輪と朝顔形埴輪が出土している。この古墳の周堀も規模は小さいが二重にめぐる。6号墳は、墳径17.4mの円墳で、三条四段の円筒埴輪と朝顔形埴輪のほか、形象埴輪（女子形・武人形・馬形）が出土している。

笹塚古墳の南南東へ約5kmには「銀杏葉文」線刻を有する埴輪を出土した八龍塚古墳（59）が所在する。この古墳は墳長約40mの帆立貝形の前方後円墳で、墳裾部で埴輪列が確認されている。埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪の2種類が見られ、円筒埴輪は二条三段のものと三条四段のものが出土している。

一方、田川西岸の宝木台地上でも、塚山古墳群（5）、牛塚古墳（12）、本村遺跡（1）や城南3丁目遺跡（4）など中期の古墳が築造される。

笹塚古墳の北西方約4kmのところに、塚山古墳を中心とする塚山古墳群が築かれる。塚山古墳は全長98mの前方後円墳で墳丘は三段に築かれ、後円部と前方部の一部に葺石を持つ。円筒埴輪・朝顔形埴輪・土師器・須恵器が出土している。これに後続して全長63.1mの帆立貝形前方後円墳である塚山西古墳、全長58mの帆立貝形前方後円墳である塚山南古墳が順次築造される。その周辺に小円墳群が築かれている。

本村2号墳は、笹塚古墳の北北東へ約6kmに位置し、田川西岸の台地上に立地する。この古墳は直径約24mの円墳である。埋葬施設は箱式石棺で、副葬品は銅鏡、弓、直刀、鉄鏃などがあるほか、周堀内からは多数の埴輪片が出土している。埴輪は、二条三段の円筒埴輪、朝顔形埴輪、形象埴輪（人物・馬形）が見られ、「銀杏葉文」線刻を有する埴輪も出土している。また、周堀内及び周辺から埴輪棺が9基確認され、中でも馬形埴輪と円筒埴輪を組み合わせた埴輪棺は注目される。

城南3丁目1号墳は、笹塚古墳の北西へ約4kmに位置し、田川西岸の台地上に立地する。この古墳は東西12.9m、南北11.7mの東西にやや長い円墳で、埋葬施設は2基確認されている。1号主体部は両小口に粘土を使用したもので、副葬品は鎌1、鉄鏃7が出土している。2号主体部も1号主体部と同様に両小口に粘土を使用したもので、副葬品は銅鏡1面、鹿角装刀子1口、直刀1口が出土している。このほかに周堀内から土師器甕1、壺1、坏3が出土している。

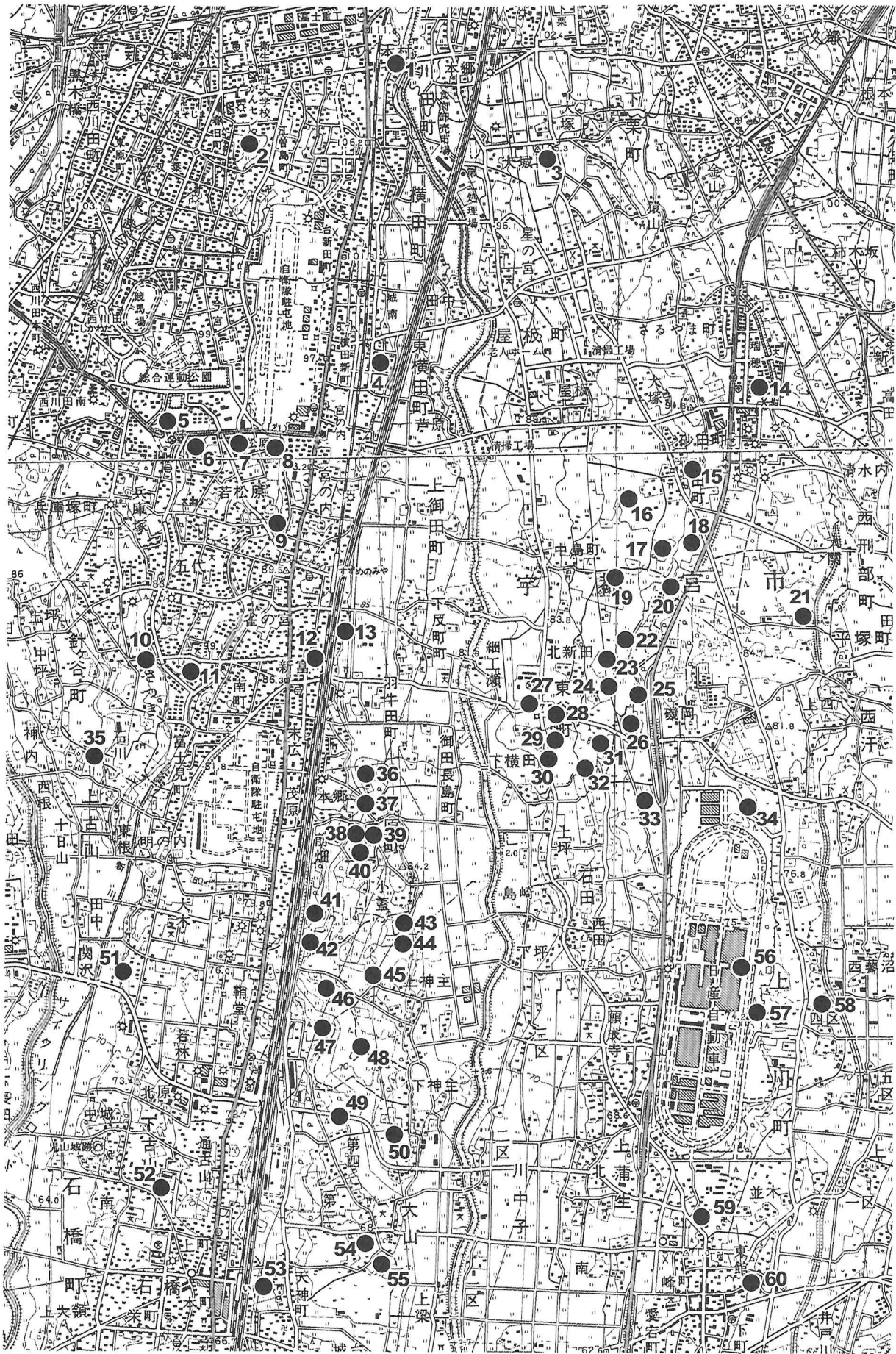
牛塚古墳は、笹塚古墳の北西へ約3kmに位置し、田川西岸の台地上に立地する。この古墳は文政7年、明治10年、昭和44年に調査が行われ、現在この場所は墳丘が削平され墓地となっている。墳長は約56mで、前方部の短い帆立貝形の前方後円墳である。この古墳からは、画文帯神獸鏡1面、変形獸形鏡1面、五鈴五獸鏡1面、四鈴鏡3面、鈴杏葉3点、環鈴1点、轡、短甲片、鉄鏃3点、鉄斧、直刀柄、耳環2点、勾玉2個、管玉6個、丸玉4個、ガラス小玉1個、鈴釧1点、土器、円筒埴輪が出土している。

飛鳥時代以降

奈良・平安時代になると、この周辺の遺跡は衰退する。権現山遺跡で奈良時代の竪穴住居跡が1軒、杉村遺跡で奈良・平安時代の竪穴住居跡が1軒、立野遺跡で奈良・平安時代の竪穴住居跡が1軒、磯岡遺跡で平安時代の竪穴住居跡2軒・掘立柱建物跡19棟で、古墳時代に比べると集落規模は縮小する。これらの遺跡群よりもさらに北側の西刑部西原遺跡（18）や瑞穂野工業団地内遺跡（14）に集落の中心が移るようである。

尚、笹塚古墳の南側から東側にかけて東山道がとおっており、当時の人々の目印としてこの古墳が使用されていた可能性がある。

一方、田川西岸の神主台地上では、西下谷田遺跡や上神主茂原官衙遺跡（43）で、「評衙」や「郡衙」の遺跡が見つかり、殿山遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居跡が162軒確認されていることから、再びこの地域の中心が田川西岸に移ったことがわかる。



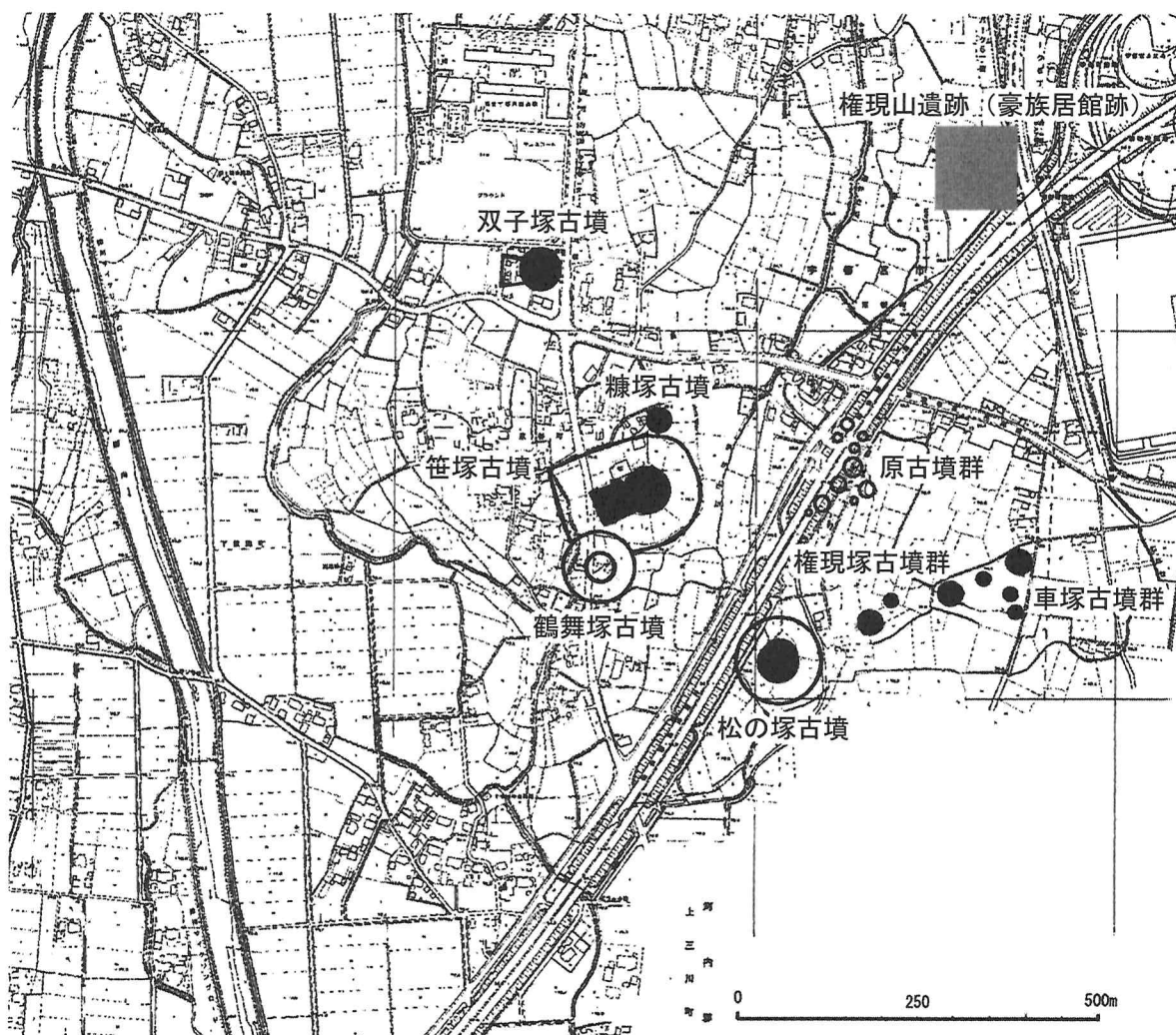
第3図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

No.	遺跡名	所在地	時代と種別	概要
1	本村遺跡	宇都宮市川田町	古墳時代中期～後期の古墳群	直径約24mの円墳等
2	雷電山遺跡	宇都宮市江曾島町	古墳中期の古墳と集落跡	古墳時代中期の竪穴住居跡8軒
3	下栗大塚古墳	宇都宮市下栗町	古墳時代の古墳	直径43.5mの円墳
4	城南3丁目遺跡	宇都宮市城南3丁目	古墳時代中期の古墳	直径約12mの円墳
5	塚山古墳群	宇都宮市西川田町	古墳時代中期の古墳群	前方後円墳3基・円墳5基・埴輪棺10基
6	二軒屋遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生後期の集落跡	二軒屋式土器の標式遺跡
7	若松原遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生	弥生土器
8	一向寺別院付近遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生	弥生土器
9	溜西遺跡	宇都宮市雀宮町	古墳前期集落跡	古式土師器
10	二子塚北遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生後期	弥生土器
11	天狗原遺跡	宇都宮市雀宮町	弥生・古墳前期集落跡	古墳前期の竪穴住居跡4軒
12	牛塚古墳	宇都宮市新富町	古墳時代中期の古墳	墳長約56mの前方後円墳
13	牛塚東遺跡	宇都宮市雀宮町	古墳前期の古墳	古墳前期の方墳2基
14	瑞穂野工業団地内遺跡	宇都宮市瑞穂	弥生時代の集落跡	弥生後期の竪穴住居跡2軒
15	砂田東遺跡	宇都宮市砂田町	古墳前期の集落跡	古墳前期の竪穴住居跡2軒
16	砂田遺跡	宇都宮市砂田町	古墳時代中期～後期の集落跡	竪穴住居跡36軒以上
17	砂田姥沼遺跡	宇都宮市砂田町	古墳時代の集落跡	
18	西刑部西原遺跡	宇都宮市西刑部町	古墳時代後期～平安時代の集落跡	
19	立野遺跡	宇都宮市東谷町他	古墳時代中期～後期の集落跡	竪穴住居跡91軒
20	琴平塚古墳群	上三川町大字西汗	古墳時代後期の古墳群	前方後円墳3基・円墳11基
21	西刑部古屋原遺跡	宇都宮市西刑部町	古墳時代の古墳と集落跡	古墳前期の方墳2基、竪穴住居跡1軒
22	中島笹塚古墳群	宇都宮市砂田町	古墳時代中期の古墳群	方墳2基・円墳14基
23	杉村遺跡	宇都宮市東谷町	弥生・古墳時代の集落跡	古墳時代以降の竪穴住居跡72軒等
24	権現山遺跡	宇都宮市東谷町	古墳時代の集落跡	竪穴住居跡206軒
25	磯岡北古墳群	宇都宮市砂田町	古墳時代中期の古墳群	円墳9基・竪穴小石室1基・埴輪棺1基等
26	磯岡遺跡	上三川町磯岡	弥生	弥生中期後半の土坑2基
27	双子塚古墳	宇都宮市東谷町	古墳時代の古墳	墳長73mの前方後円墳
28	東谷北浦遺跡	宇都宮市東谷町	古墳時代の古墳と集落跡	
29	笹塚古墳	宇都宮市東谷町	古墳時代の古墳	墳長105mの前方後円墳
30	鶴舞塚古墳	宇都宮市東谷町	古墳時代の古墳	直径53mの円墳
31	百目鬼遺跡	宇都宮市東谷町	古墳時代中期～後期の集落跡	竪穴住居跡53軒
32	松の塚古墳	宇都宮市東谷町	古墳時代の古墳	直径約50mの円墳
33	磯岡B遺跡	上三川町磯岡	弥生	弥生土器
34	西赤堀狐塚古墳	上三川町西汗	古墳時代の古墳	墳長39mの前方後円墳・横穴式石室
35	岡田山遺跡	宇都宮市針ヶ谷町	弥生・古墳前期集落跡	
36	権現山北遺跡	宇都宮市茂原町	古墳時代の集落跡	
37	権現山古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長約60mの前方後方墳
38	大日塚古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長36mの前方後方墳
39	愛宕塚東遺跡	宇都宮市茂原町	弥生～古墳前期の集落跡	弥生土器・古式土師器
40	愛宕塚古墳	宇都宮市茂原町	古墳前期の古墳	全長約50mの前方後方墳
41	西下谷田遺跡	宇都宮市茂原町	弥生・古墳前期集落跡	古墳時代前期の竪穴住居跡12軒等
42	北原東遺跡	宇都宮市茂原町	古墳前期の墓域	古墳前期の方墳1基
43	上神主茂原官衙遺跡	宇都宮市茂原他	奈良時代の官衙跡	
44	上神主浅間神社古墳群	上三川町上神主	古墳前期末～後期の古墳群	
45	後志部遺跡	上三川町上神主	弥生	弥生後期の土器
46	向原南遺跡	上三川町上神主	弥生の集落跡	弥生後期竪穴住居跡4軒
47	上ノ原遺跡	上三川町上神主	弥生・古墳前期集落跡	古墳前期の竪穴住居跡6軒等
48	殿山遺跡	上三川町上神主	弥生～平安時代の集落跡	弥生後期の竪穴住居跡21軒
49	大山遺跡	上三川町大字大山	弥生の集落跡	弥生後期の竪穴住居跡1軒
50	薄市遺跡	上三川町下神主	弥生	弥生中期後半・後期の土器
51	文殊山古墳群	下野市上古山	古墳時代前期の古墳群	方墳群
52	横塚古墳	下野市上古山	古墳時代後期の古墳	前方後円墳・横穴式石室
53	多功遺跡	上三川町多功	奈良時代の官衙跡	
54	瓢箪塚古墳	上三川町大山	古墳時代の古墳	墳長43mの前方後円墳
55	木田遺跡	上三川町多功	弥生	弥生土器
56	仏沼遺跡	上三川町西蓼沼	弥生	弥生中期の土坑
57	上郷愛宕塚古墳	上三川町上三川	古墳時代後期の円墳	直径40mの円墳
58	上郷瓢箪塚古墳	上三川町上郷	古墳時代の古墳	墳長68mの前方後円墳
59	八龍塚古墳	上三川町上蒲生	古墳時代の古墳	墳長40mの前方後円墳
60	大町遺跡	上三川町上蒲生	弥生	弥生土器

第1表 周辺遺跡一覧表

No.	古墳名	墳形	規模(m)	埋葬施設	出土遺物	備考
1	笹塚古墳	前方後円墳	105			
2	双子塚古墳	前方後円墳	73			
3	鶴舞塚古墳	円墳	53			
4	松の塚古墳	円墳				百目鬼遺跡SZ-80として一部周溝調査を実施。
5	糠塚古墳	円墳				
6	原古墳群					原古墳群2基 + 権現山遺跡B区調査で新たに確認された8基
	SZ-003	円墳	7.8		須恵器9点	TK-23 型式の須恵器
	SZ-004	円墳	21		埴輪・土師器・須恵器	TK-23 ～ 47 型式の須恵器
	SZ-005	円墳	18			
	SZ-054	円墳	13.6 ～ 14.1		土師器・石製模造品・鉄製品	
	SZ-055	円墳	8.1		土師器	
	SZ-058	円墳	10.3		土師器・石製模造品	
	SZ-062	円墳			土師器・須恵器	TK-23 型式の須恵器
	SZ-065	円墳	10	箱式石棺	土師器・管玉・ガラス小玉	
	SZ-067	円墳			埴輪	
	SZ-068	円墳	8.1		土師器	
7	車塚古墳群					円墳5基
	車塚古墳	円墳	35			
8	権現塚古墳群					円墳2基
	権現塚古墳	円墳	30			

第2表 東谷古墳群一覧表



第4図 東谷古墳群分布図

II. 調査概要

3次にわたる調査の結果、笹塚古墳の概要を確認することができた。以下、調査次第の確認状況について記す。

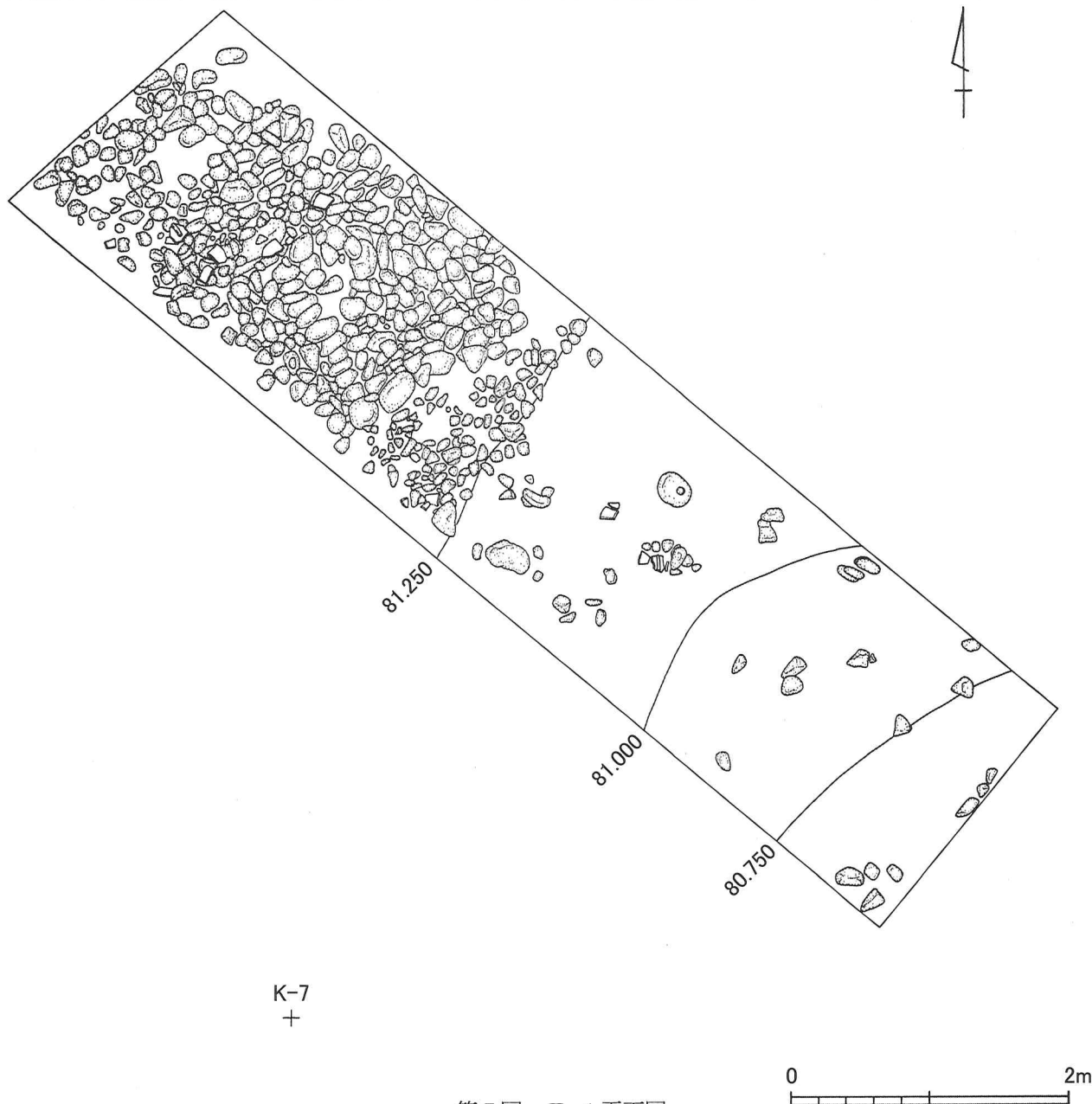
1. 遺構

(1) 第I次調査

第I次調査では7本のトレンチを設定し後円部南側の周濠と墳丘部分の確認を行った。

T-1 (第5図)

後円部南東側の墳丘段築状況を確認するために幅2m×長さ8mのトレンチをJ-7杭付近に設定した。表土下約30cmのところ第三段斜面の葺石が確認できた。葺石は最下段にやや大きめの河原石を据え、その上に拳大の河原石を縦の目がとおるように並べて葺かれている。第二段平坦面は標高81.25m、幅約3mと幅広く、埴輪片が集中してみられることから、平坦部に埴輪が樹立されていたと考えられる。



第5図 T-1平面図

T-2 (第6図)

後円部南側の墳丘段築状況を確認するために幅2m×長さ8mのトレンチをK-8杭付近に設定した。表土下50~60cmのところ第三段斜面の葺石が確認できた。葺石は最下段にやや大きめの河原石を据え、その上に拳大の河原石を縦の目がとおるように並べて葺かれている状態の部分を確認することができた。第三段斜面の葺石の角度は30~35度である。第二段平坦面は標高81.25m、幅3mで、葺石端部付近で埴輪片が集中する地点が見られた。この破片を接合した結果、朝顔形埴輪であることがわかった(第36図1)。この埴輪は下半部分が欠損していることから、墳頂部に据えられていたものが転落した可能性もある。



第6図 T-2平・断面図

T-3 (第7図)

括れ部南側の墳丘段築状況を確認するために幅2m×長さ6.5mのトレンチをK-9杭付近に設定した。このトレンチを設定した部分は括れ部付近に位置し、現況で50cmほどT-2のレベルより高く、北側の第三段墳丘部分には大きな盗掘穴が掘られている。表土下1mのところ第三段斜面の葺石が確認できたのは、この盗掘の際に掻き出された土がこの付近まで及んでいたことに起因する。トレンチの第1層では陶磁器やガラスビンかけなど近現代の遺物が多量に出土していることもこのことを裏付ける。葺石は最下段にやや大きめの河原石を横向きに据え、その上に拳大の河原石を縦の目がとおるように並べて葺かれている。第三段斜面の葺石の角度は25~30度となる。第二段平坦面は標高81.5mである。

T-4 (第8図)

T-1の延長上で周濠から墳丘部にかけての第一段斜面の立ち上りを確認するためにK-6付近に設定



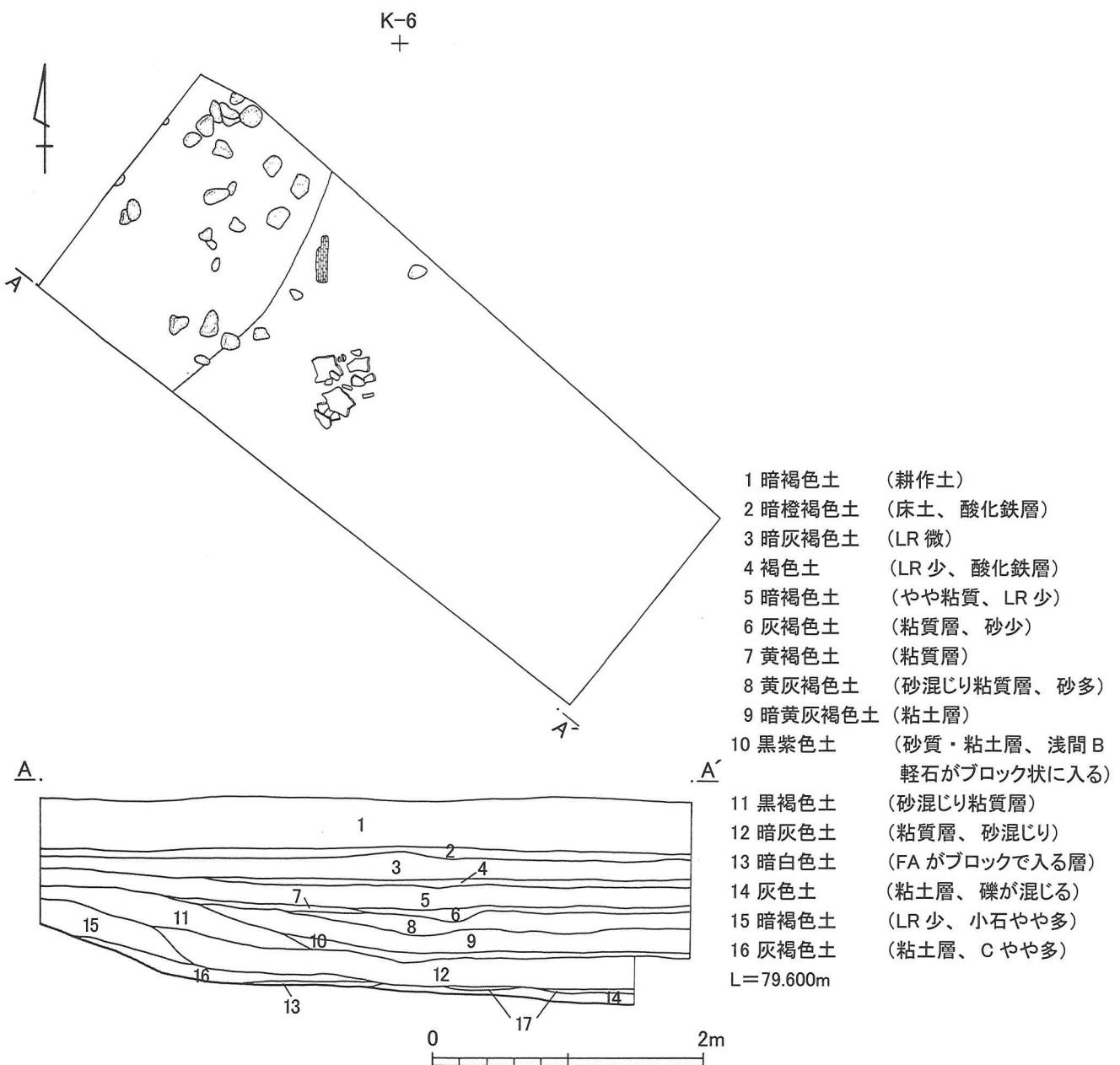
第7図 T-3平・断面図

した。表土下 1.4~1.5m のところで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層で、標高は 78.0m である。周濠底から 10 cm のレベルで F A 層 (13 層) が確認できた。16 層は炭化物を多く含む層である。10 層は浅間 B 軽石層で、周濠底から 30 cm 上で確認されている。全体的に粘性の強い土層で構成され、2 層と 4 層に酸化鉄の沈殿層が見られた。2 層は現代の水田面下層であり、4 層はそれよりも古い時期の水田面下層となる。

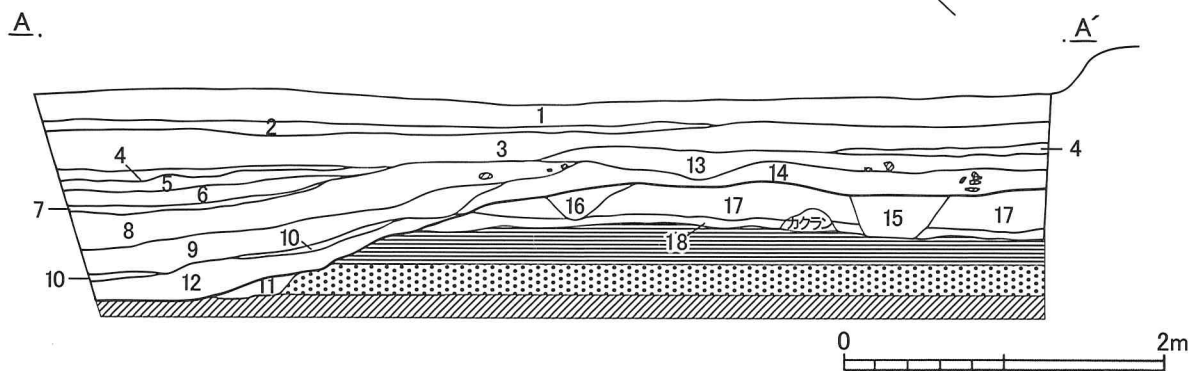
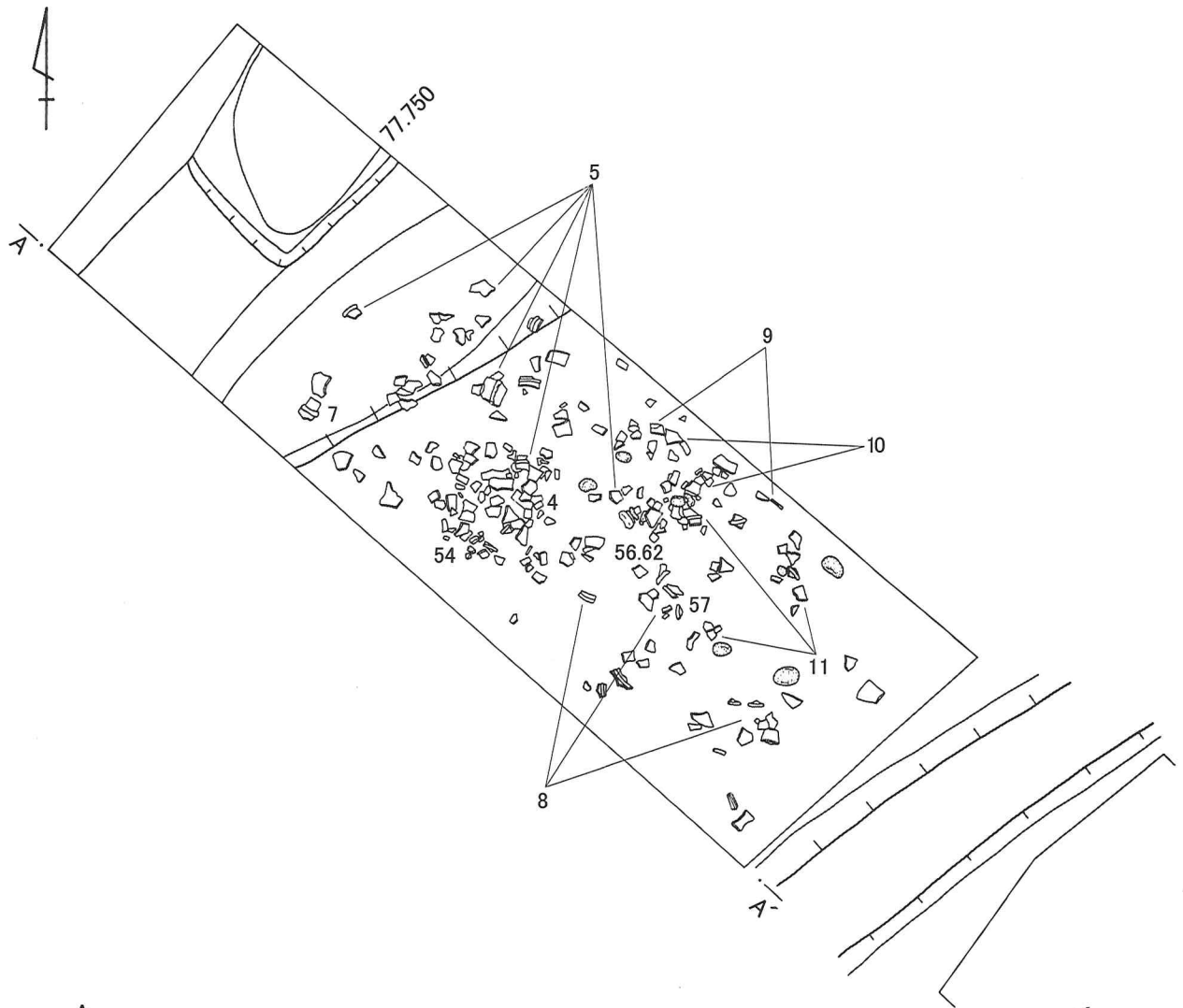
第一段斜面の傾斜角は 20 度と比較的緩い傾斜で立ち上がる。墳端部の周辺からは墳丘から転落したと思われる拳大の葺石や埴輪片が出土した。

T-5 (第 9・10 図)

T-1 と T-4 の延長上で周濠外側の立ち上がりを確認するために設置した。表土下 1.3m のところで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層である。このトレンチで内濠外側の立ち上がりと外濠の立ち上がりを確認した。内濠と外濠の間の中堤部分の幅は、上幅 7 m、下幅 11.3 m、上面の標高は 78.7 m である。外濠の上幅は約 4 m、深さ約 1 m、周濠底の標高は 77.5 m である。内濠底の標高が 77.9 m であることから外濠の方

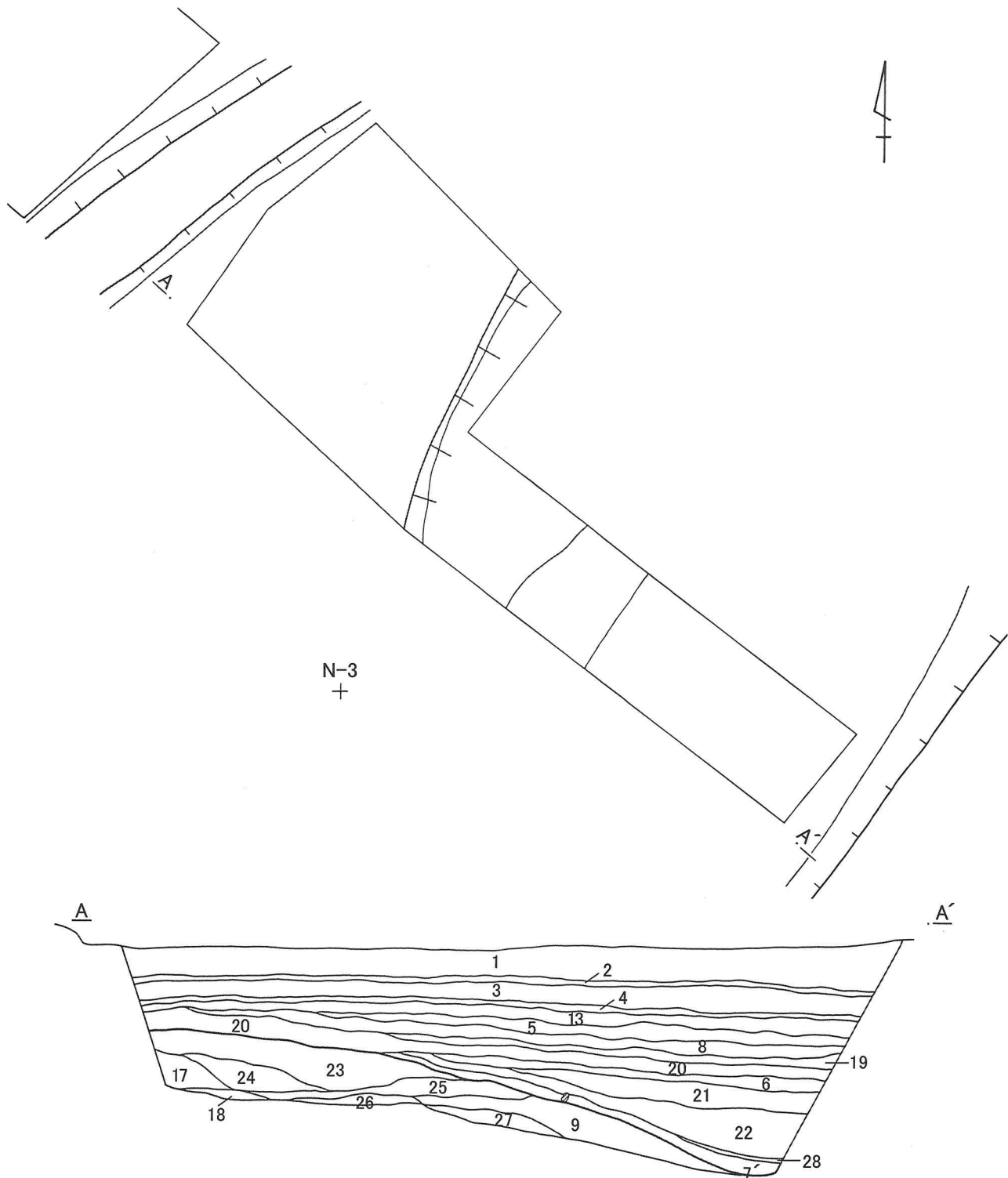


第 8 図 T-4 平・断面図



- | | |
|------------------------------------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 (耕作土) | 10 灰白色土 (FA がブロックで入る層) |
| 2 暗橙褐色土 (床土、酸化鉄層) | 11 灰色土 (粘土層、礫が混じる) |
| 3 暗灰褐色土 (LR 微) | 12 暗灰褐色土 (LR やや多、砂粒・粘土ブロック少、C少、粘質) |
| 4 褐色土 (LR 少、酸化鉄層) | 13 暗褐色土 (LR 微、小石・埴輪を含む) |
| 5 黄灰褐色土 (砂混じり粘質層、砂多) | 14 灰褐色土 (粘質、埴輪を多く含む、鉄分がやや多く入る) |
| 6 暗黄灰褐色土 (粘土層) | 15 黒褐色土 (LR 少、小LB 少) |
| 7 黒紫色土 (砂質・粘土層、浅間B
軽石がブロック状に入る) | 16 暗黄褐色土 (LR やや多、鉄分がやや多く入る) |
| 8 黒褐色土 (砂混じり粘質層) | 17 黒褐色土 |
| 9 暗灰色土 (粘質層、砂混じり) | 18 ローム漸移層 |
| | L=79.500m |

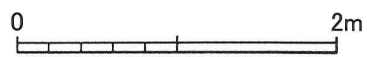
第9図 T-5 (北側) 平・断面図



N-3
+

A

A'



- | | |
|-------------------------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土 (耕作土) | 19 灰色土 (粘土層) |
| 2 暗橙褐色土 (床土、酸化鉄層) | 20 灰褐色土 (粘質、埴輪を多く含む、鉄分がやや多く入る) |
| 3 暗灰褐色土 (LR 微) | 21 黄灰色土 (LR 少、酸化鉄分が斑点状に入る) |
| 4 褐色土 (LR 少、酸化鉄層) | 22 暗灰色土 (LR 少、酸化鉄分が斑点状に入る) |
| 5 黄灰褐色土 (砂混じり粘質層、砂多) | 23 暗褐色土 (粘土粒やや多、C、浅間Bブロック) |
| 6 暗黄灰褐色土 (粘土層) | 24 黒褐色土 (ローム粒少、浅間Bブロック少) |
| 7 黒褐色土 (粘土・浅間Bブロックやや多) | 25 暗橙褐色土 (LR・小LB やや多) |
| 8 黒褐色土 (砂混じり粘質層) | 26 黒褐色土 (LR 少・小LB 少) |
| 9 暗灰色土 (粘質層、砂混じり) | 27 黄褐色土 (LR 多、LB やや多) |
| 13 暗褐色土 (LR 微、小石・埴輪を含む) | 28 FA 層 |
| 17 黒褐色土 | |
| 18 ローム漸移層 | |

L=79.500m

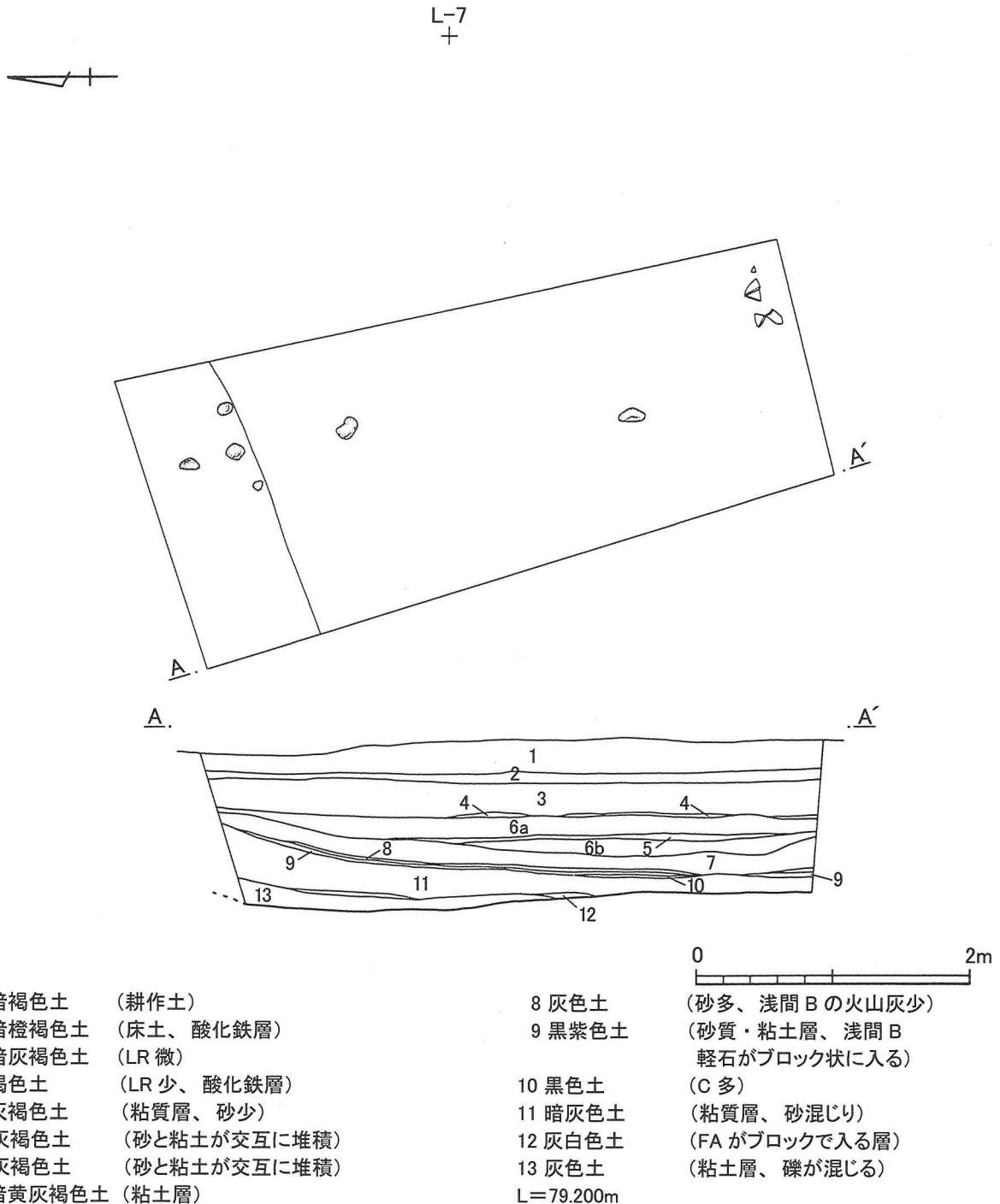
第10図 T-5 (南側) 平・断面図

が40cmほど深く掘られている。なお、T-4との関係から内濠の幅は約34mと推定される。中堤部分では多数の円筒埴輪が集中して出土しており、この部分に集中して円筒埴輪が樹立されていた可能性がある。

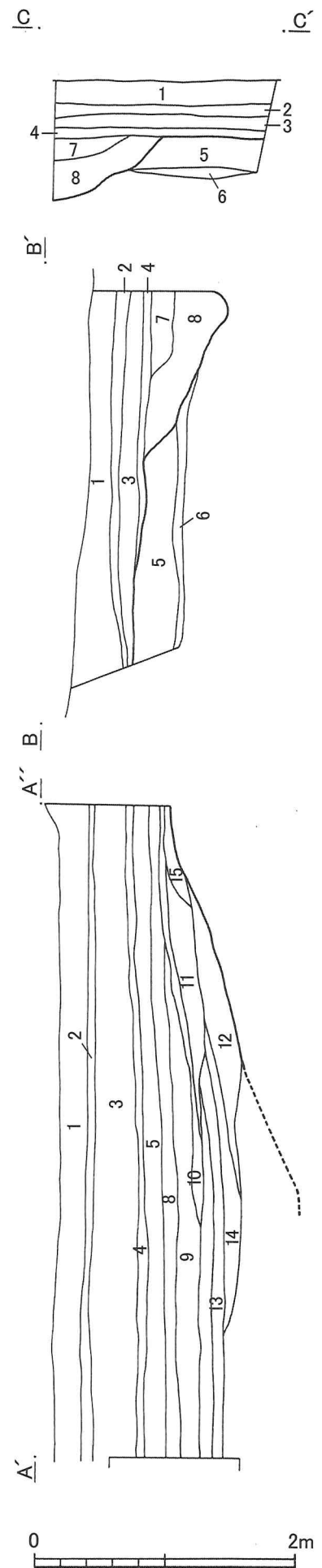
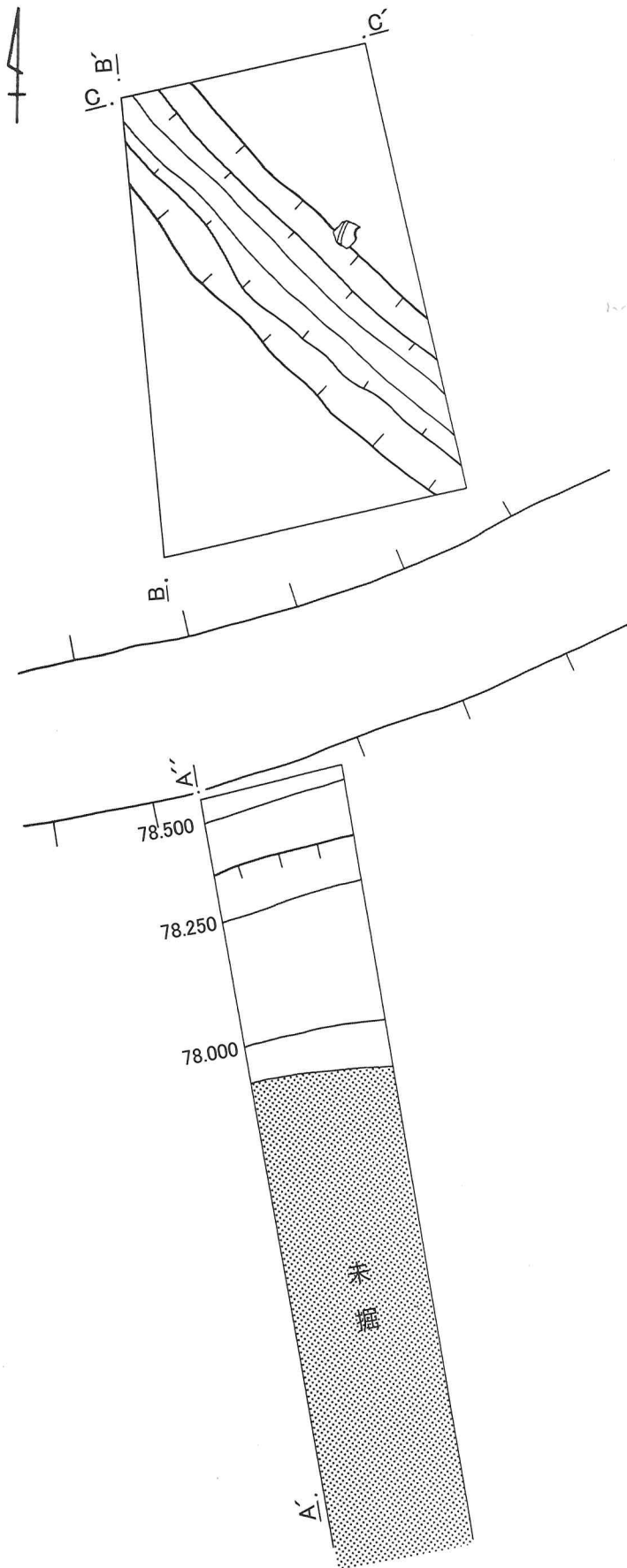
内濠及び外濠で周濠底から10cmのレベルでF A層（10層）が確認できたが、7層の浅間B軽石層は内濠で周濠底から50cm上で層状に見られたが、外濠では明瞭に確認できなかった。外濠の覆土を見ると褐色系粘質層がF A層（10層）直上で5層見られ、その上に黒色系粘質層（8層）が入る。この層は内濠でも見られ、その上に再び褐色系粘質層（5・6層）が入る。この段階で内濠及び外濠がほぼ水平に埋まり、2層及び4層に酸化鉄の沈殿層が見られることから、その段階から水田面として利用されるようになったと考えられる。

T-6（第11図）

T-2の延長上で周濠から墳丘部にかけての第一段斜面の立ち上がりを確認するためにL-7杭付近に設



第11図 T-6 平・断面図



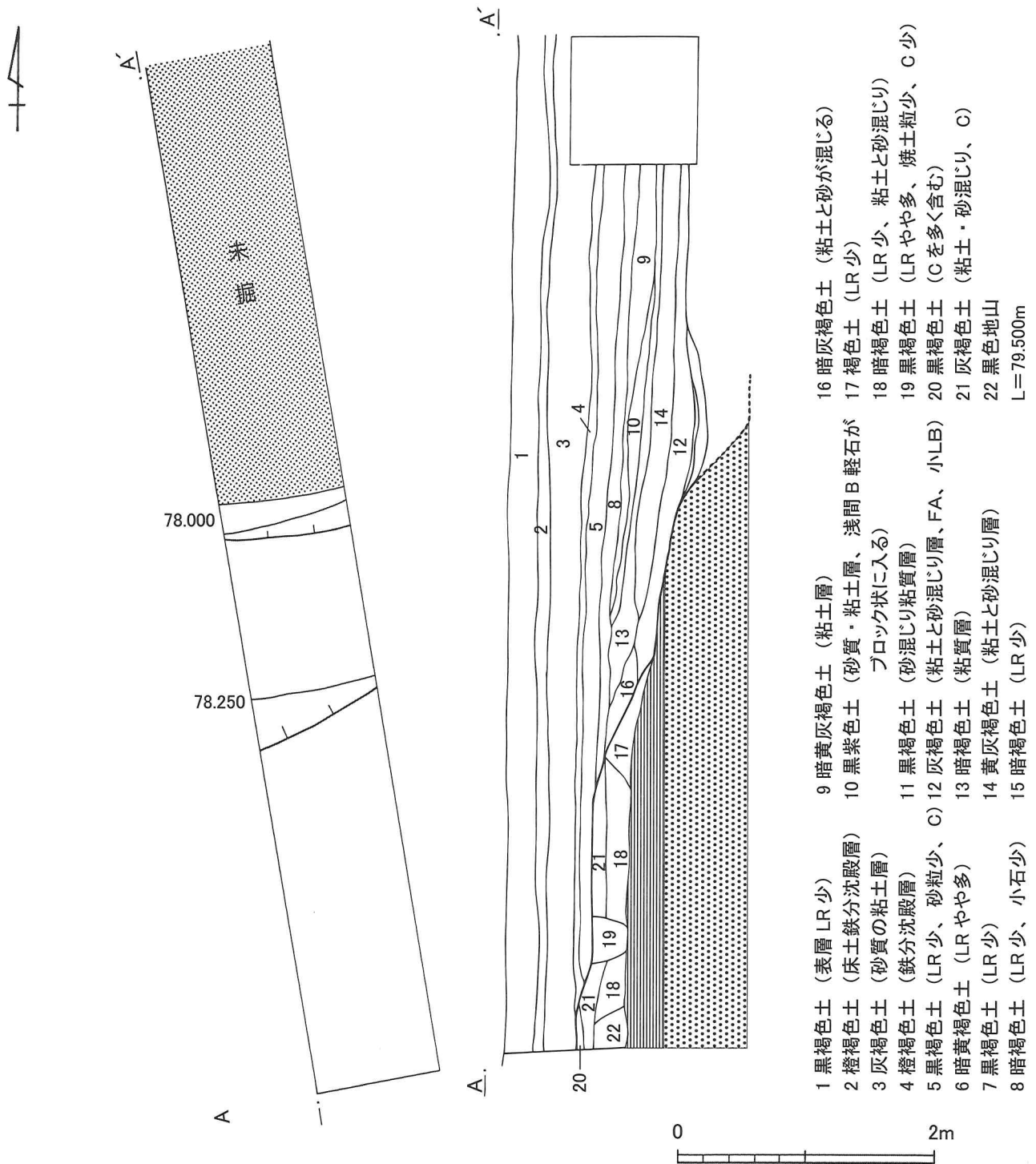
土層説明はT-7 (南側) に同じ
L=79.500m

第12図 T-7 (北側) 平・断面図

定した。表土下1.1mのところ周濠底が確認できた。周濠底は標高78.0mで砂礫層である。周濠底から10cmのレベルでFA層(12層)を確認、9層の浅間B軽石層は周濠底から30cm上で確認した。なお、浅間B軽石層直下の10層は黒色の炭化層で、火山灰の影響によるものであるのか注目される。その上の褐色系粘質層(6a・6b層)は砂層と粘土層が層状に堆積しており、その時期内濠の中を水が流れていた可能性がある。上層は他のトレンチ同様、酸化鉄の沈殿層(2層・4層)が見られた。

T-7 (第12・13図)

T-2とT-6の延長上で周濠外側の立ち上がりを確認するためにP-7杭付近に設置した。内濠外側立ち上がり部分はトレンチ内で見つけることができず、さらに内側で立ち上がると考えられる。中堤部及び外



第13図 T-7 (南側) 平・断面図

濠にかけては確認できた。なお、中堤上に幅 0.9m、深さ 0.9mの溝状遺構が確認できたが、方向が周濠と直交するような形で掘られており、後世の時期のものと判断される。中堤部の標高は 78.8mで、埴輪の出土は少ない。外濠の上幅は 10m、下幅は推定で 5m、深さ 1.8m、周濠底の標高は 77.5mである。なお、T-6との関係から内濠の幅は約 34mと推定される。

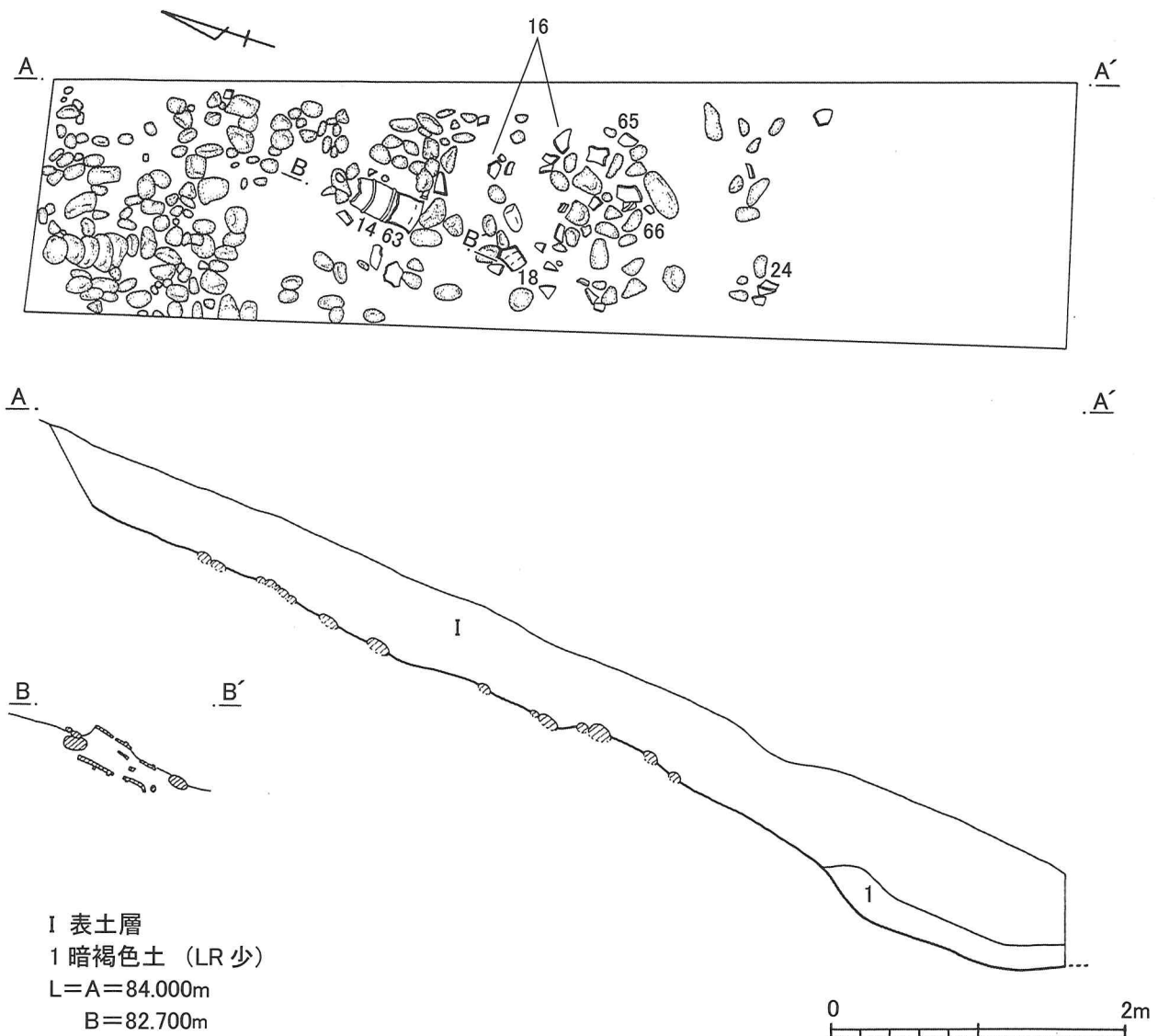
保存目的の調査であることから、このトレンチは周濠を全掘せず、濠の深さはピンポールを刺して確認した。外濠の覆土状況は、T-5と同様に中層に 4層の褐色系粘質層が入り、上層に酸化鉄の沈殿層（2層・4層）が見られた。

(2) 第Ⅱ次調査

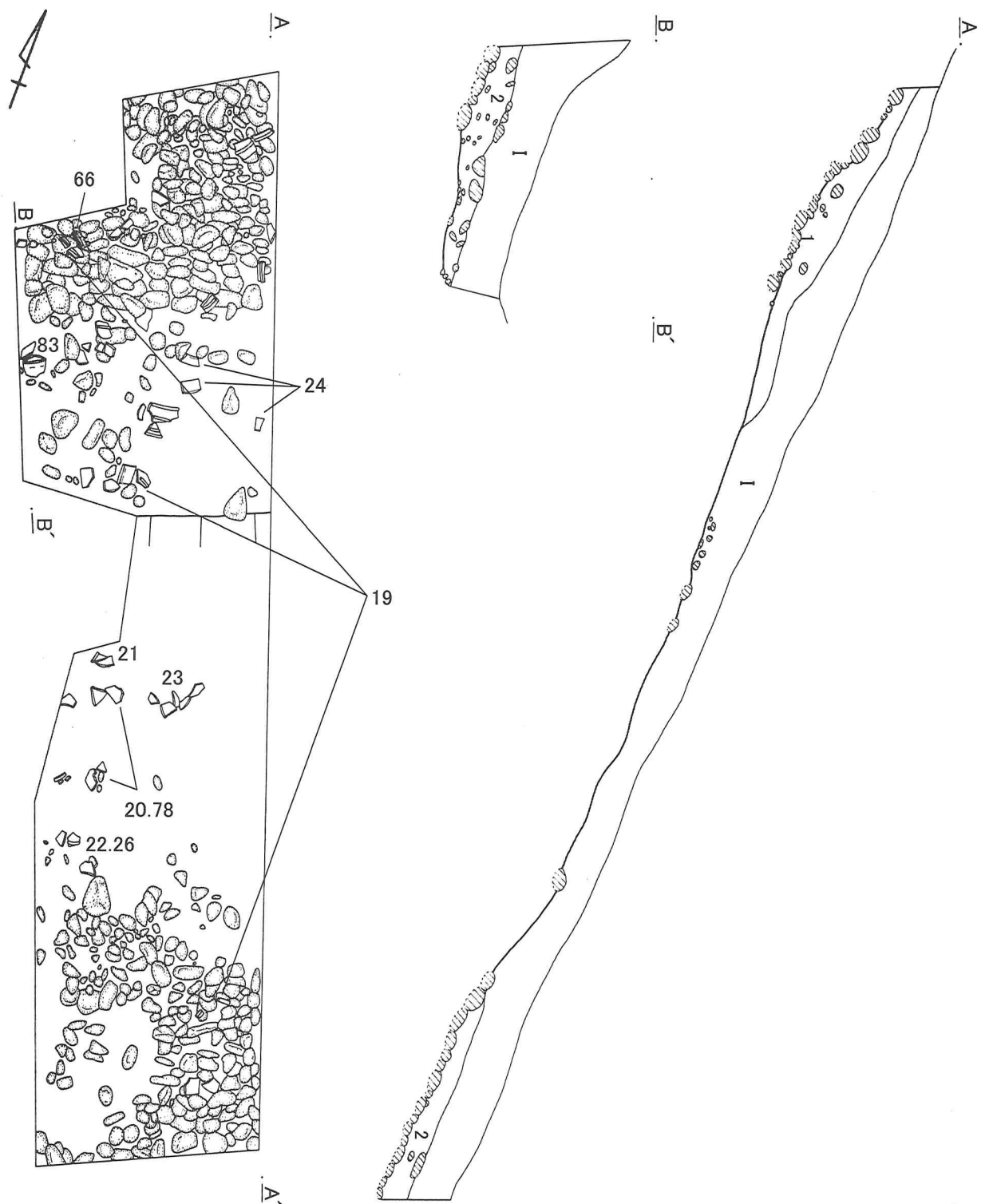
第Ⅱ次調査では 10本のトレンチを設定し前方部南側の周濠と墳丘部分及び隣接する鶴舞塚古墳と前後関係を確認するために行った。

T-8 (第14図)

括れ部南側のJ-11杭南側に長さ 7m×幅 1.8mのトレンチを設定した。表土下 40cmのところで第三段斜面の葺石が確認できた。第三段斜面の葺石の角度は 30度である。第二段平坦面は幅 0.8mと後円部側に比べ



第14図 T-8 平・断面図



I 表土層
 1 明褐色土 (LR 少)
 2 暗褐色土 (LR 少)
 3 灰白色土 (粘土主体層)
 L=84.000m

第15図 T-9平・断面図

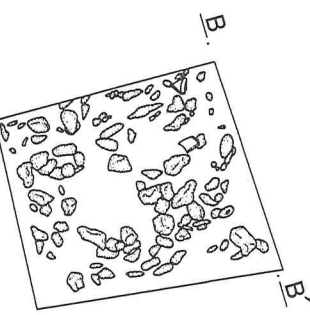
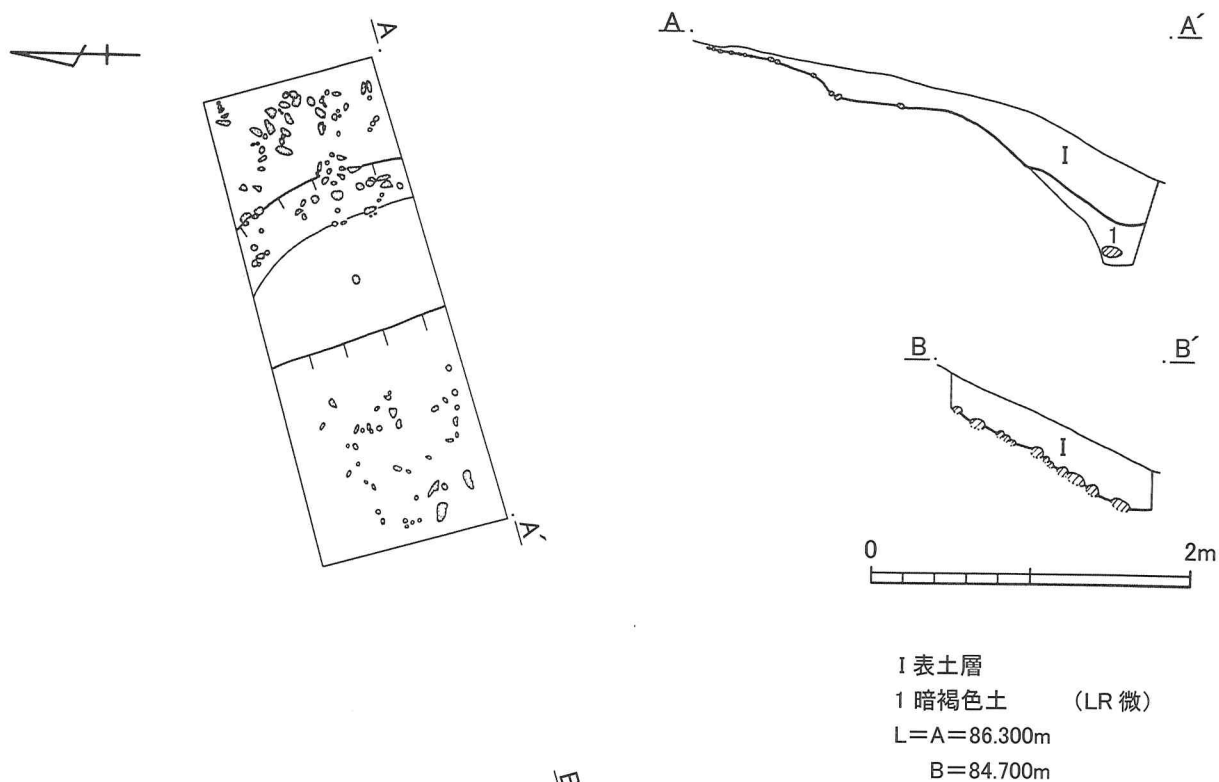
て狭い。第二段平坦面の標高は82mである。また、第二段平坦面と想定される部分ではほぼ完形の円筒埴輪が転倒した状態で出土した。

T-9 (第15図)

前方部南側のK-13杭付近に長さ8.3m×幅1.8mのトレンチを設定し、調査時はT-9 Aと呼称した。表土下30~60cmのところ第三段斜面の葦石が確認できた。葦石は最下段にやや大きめの河原石を据え、その上に拳大の河原石を縦の目がとおるように並べて葦かされている。第三段斜面の葦石の角度は30度である。第二段平坦面は幅1.5mとT-8よりやや幅広くなる。埴輪片が集中してみられることから、平坦部に埴輪が樹立されていた可能性がある。第二段平坦面の標高は82.5mである。第二段斜面の上段は葦石が崩れてほとんど残っていなかったが、下段においては葦石の状況が確認できた。第二段斜面の葦石の角度は25度である。

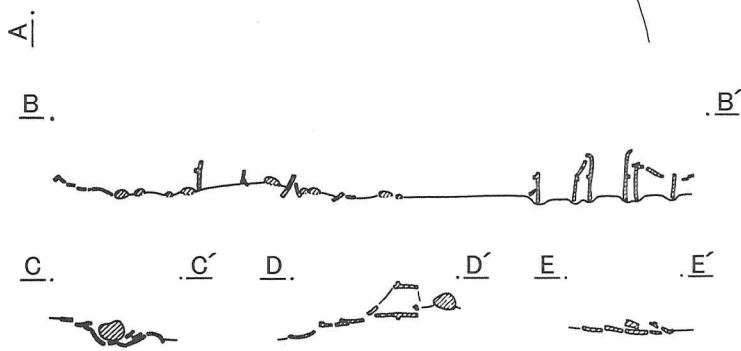
T-10 (第16・17図)

前方部西側の見かけ上の主軸ライン上にトレンチを設定し、調査時はT-9 Bと呼称した。表土下60cmの

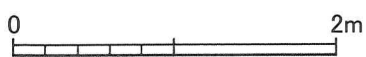


T-10 (西側)

第16図 T-10 (東側) 平・断面図



I 表土層
 1 暗褐色土 (LR 微)
 2 暗黄褐色土 (LR 多)
 L=A=85.100m
 B ~ E=83.500m

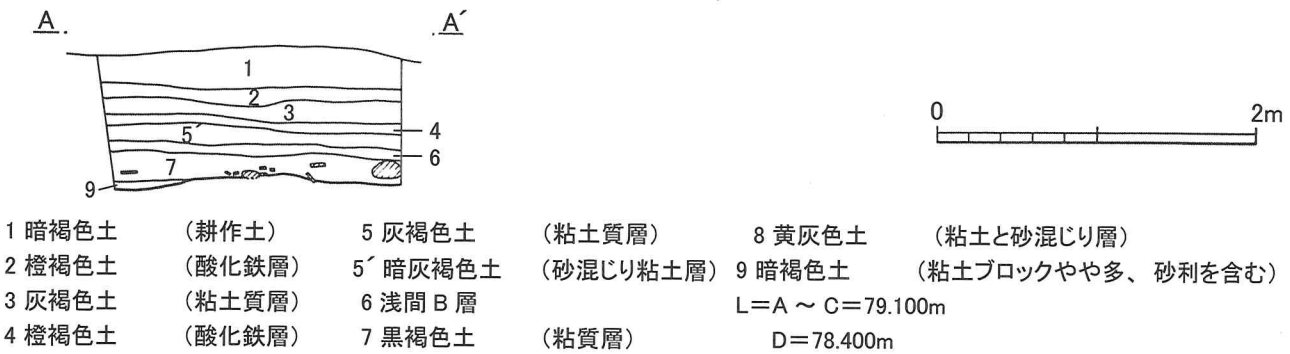
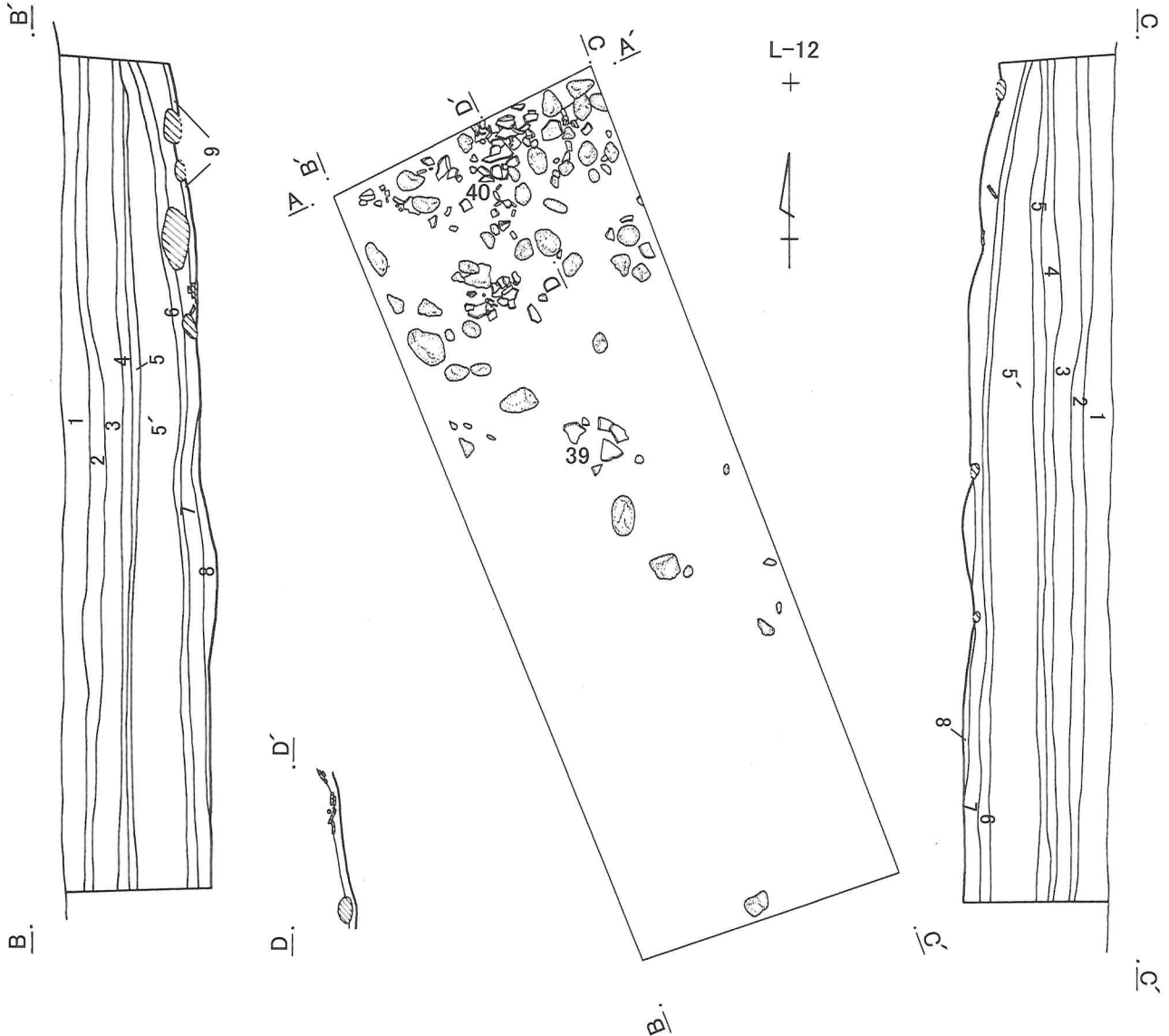


第17图 T-10 (西側) 平・断面図

ところで第三段斜面の葺石が確認でき、第三段斜面の葺石の角度は下段が20度、中段以上は30度である。第二段平坦面は幅1.5mで平坦部から第二段斜面への落ち際に円筒埴輪が樹立した状態で確認できた。また、細かな砂利が多く確認できたことから平坦部には砂利が敷かれていた可能性がある。第二段平坦面の標高は83.0mである。第二段斜面の葺石の角度は30度である。墳頂部の標高は86.2mである。出土した埴輪の中には朝顔形埴輪が何点か含まれる。

T-11 (第18図)

このトレンチはT-9の延長上で周濠から墳丘部にかけての第一段斜面の立ち上がりを確認するためにL



第18図 T-11 平・断面図

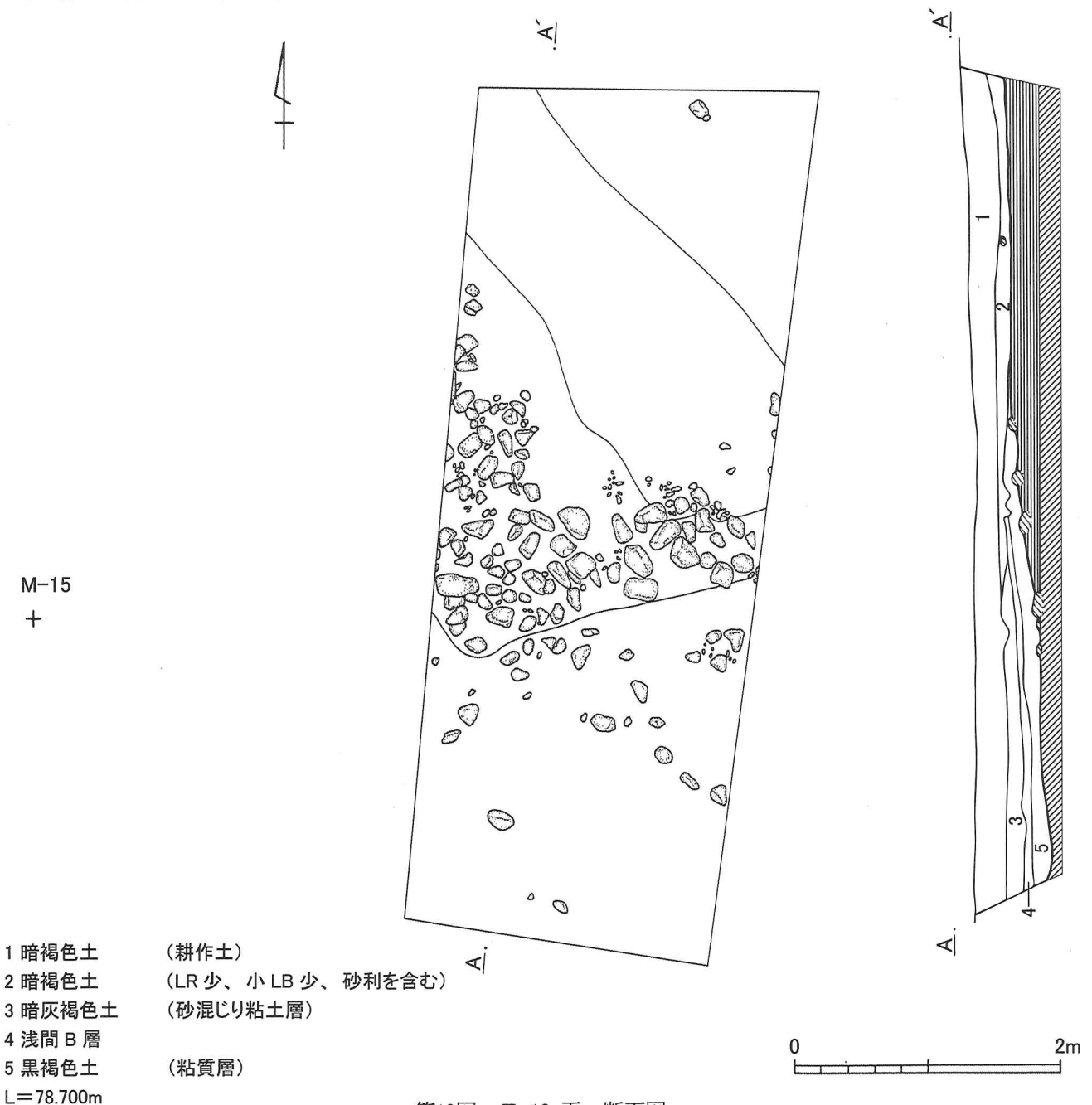
-12 杭付近に長さ 5.5m×幅 2m のトレンチを設置した。表土下 1.1m のところで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層で標高 77.9m である。周濠底付近からは、細かく破碎した埴輪片や葺石が転落したと思われる拳大の河原石が確認された。復元の結果、円筒埴輪のほか朝顔形埴輪も出土している。

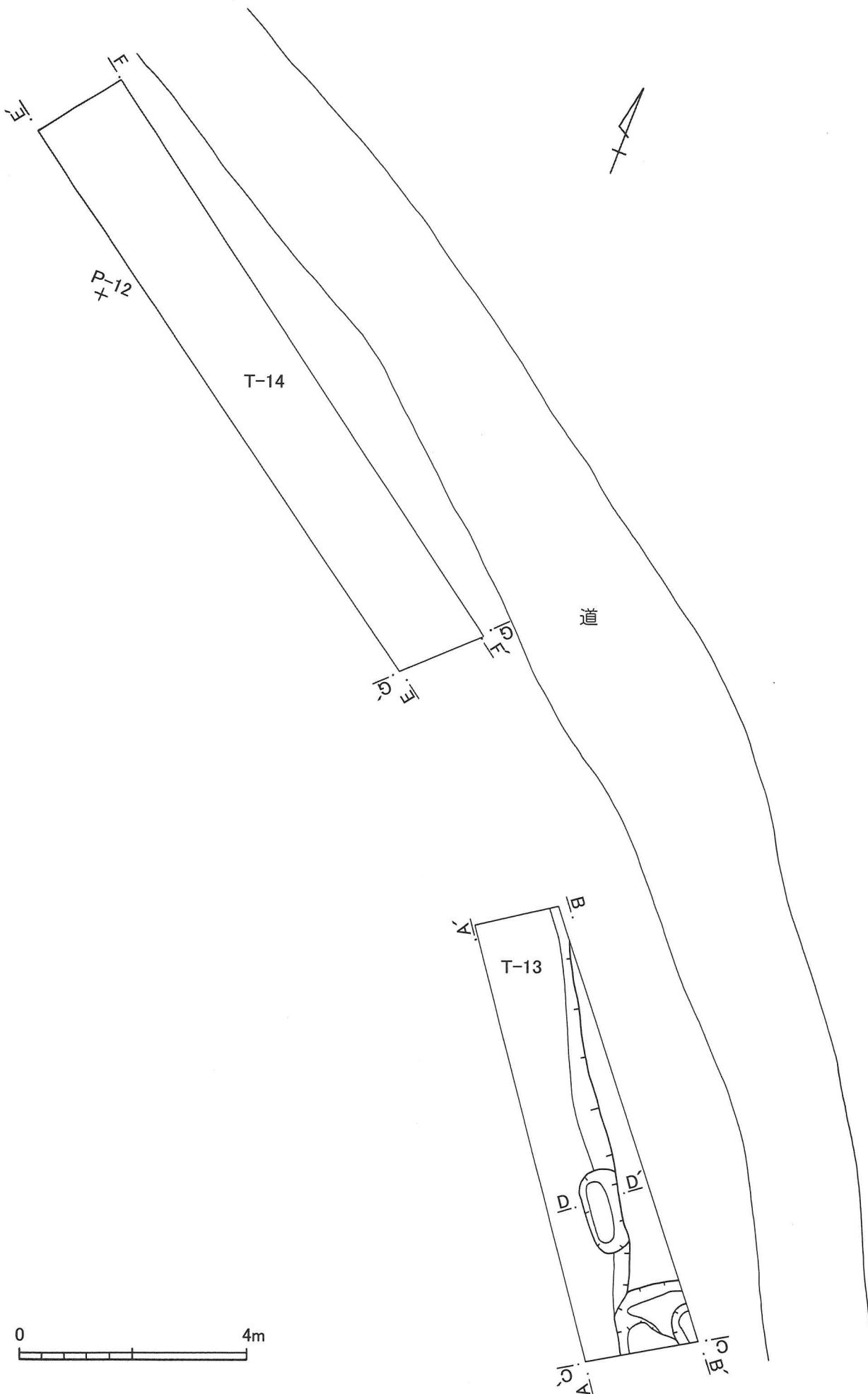
T-12 (第 19 図)

このトレンチは前方部南西コーナー一部周濠から墳丘部にかけての第一段斜面の立ち上がりを確認するために M-15 杭付近に長さ 6m×幅 2.5m のトレンチを設置した。表土下 50cm、標高で 78.0m のところで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層である。葺石がほぼ直角に配列される。20cm ほどの立ち上がりが見られるが、その上は耕作層により削平されている。

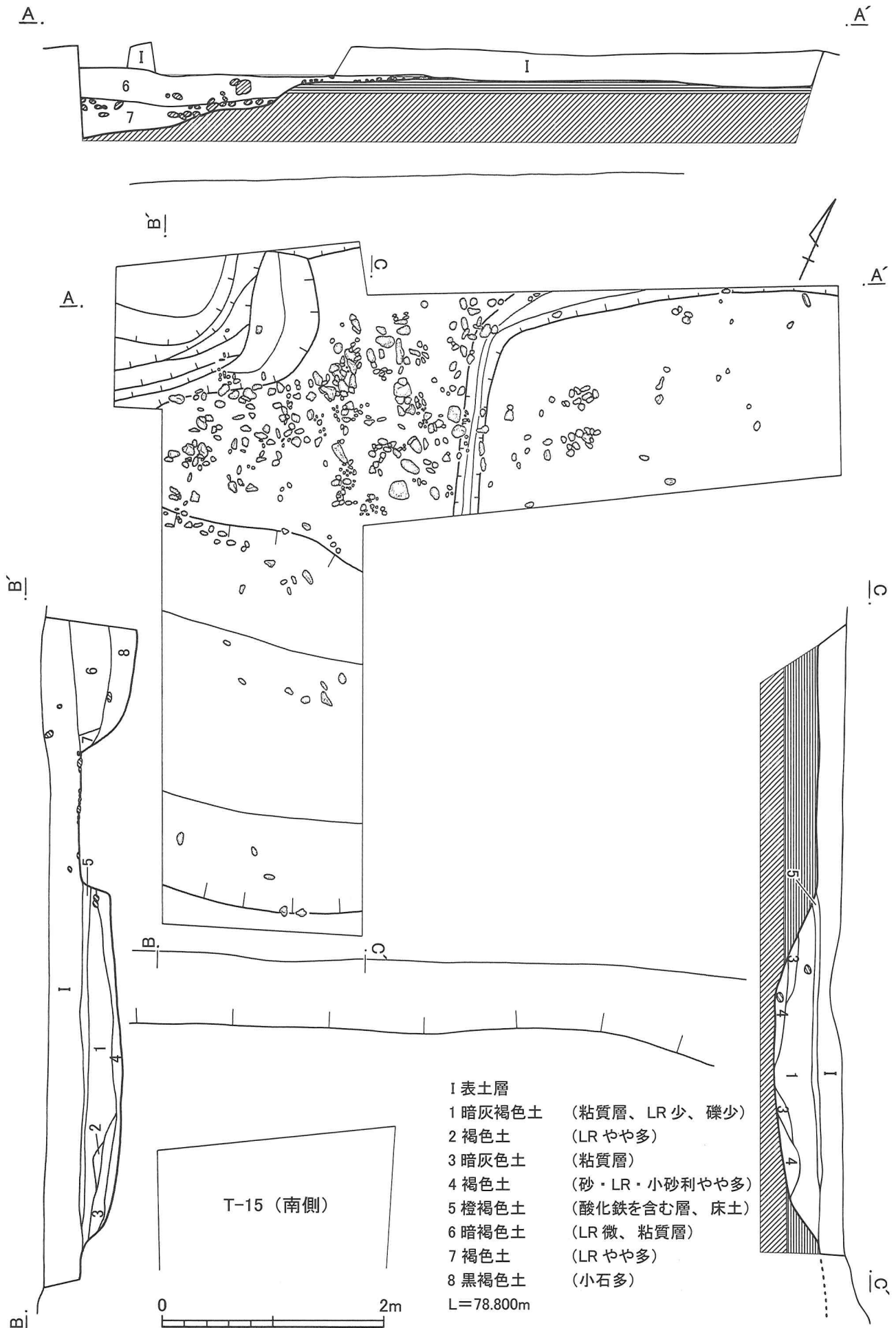
T-13 (第 20・21 図)

このトレンチは鶴舞塚古墳と笹塚古墳の切りあい関係を確認するために設定した。表土下 1.1m のところで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層で、A-A' ライン (鶴舞塚側) は標高 78.0m で、B-B' ライン (笹塚側)





第20図 T-13・14 平面図



第22図 T-15 (北側) 平・断面図

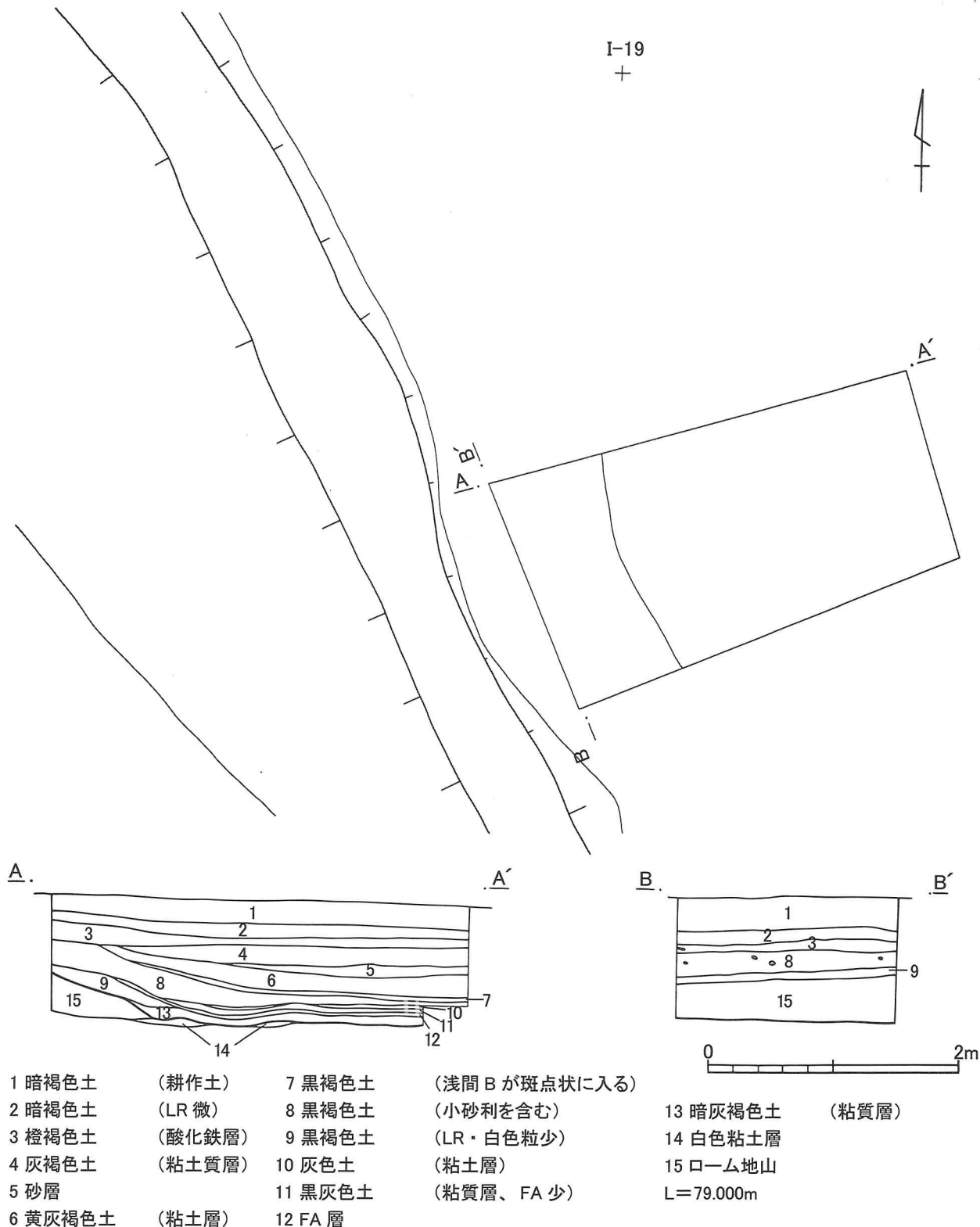


- 1 表土層
 - 5 橙褐色土 (酸化鉄を含む層、床土)
 - 9 暗灰褐色土 (粘質層、LR少)
 - 10 黒褐色土 (LR少、小LB少)
 - 11 暗褐色土 (LRやや多)
 - 12 黄褐色土 (LR多、LB)
 - 13 灰褐色土 (砂・小石・LR少)
 - 14 黒褐色土 (砂少、小砂利多、埴輪片を含む)
- L=79.000m

第23図 T-15 (南側) 平・断面図

は標高 78.2m である。昭和 58 年の鶴舞塚古墳のトレンチ調査の跡が今回再確認されたが、その直交する形で掘られたトレンチでも鶴舞塚古墳に向かって周濠が深くなる状況が確認されている。因みに鶴舞塚古墳の周濠の一番深い部分の標高は 77.5m である。埴輪の出土は見られない。

覆土状況を見ると、上層の酸化鉄の沈殿層（2層・4層）は笹塚古墳の覆土状況と共通することから、周濠がほぼ埋まって以降は、水田面として利用されていたことがわかる。4層下に褐色系粘質層（5・6層）が入り、その下の7層は黒色系粘質層である。6層と7層の間に浅間B軽石が点的に見られる。



第24図 T-16 平・断面図

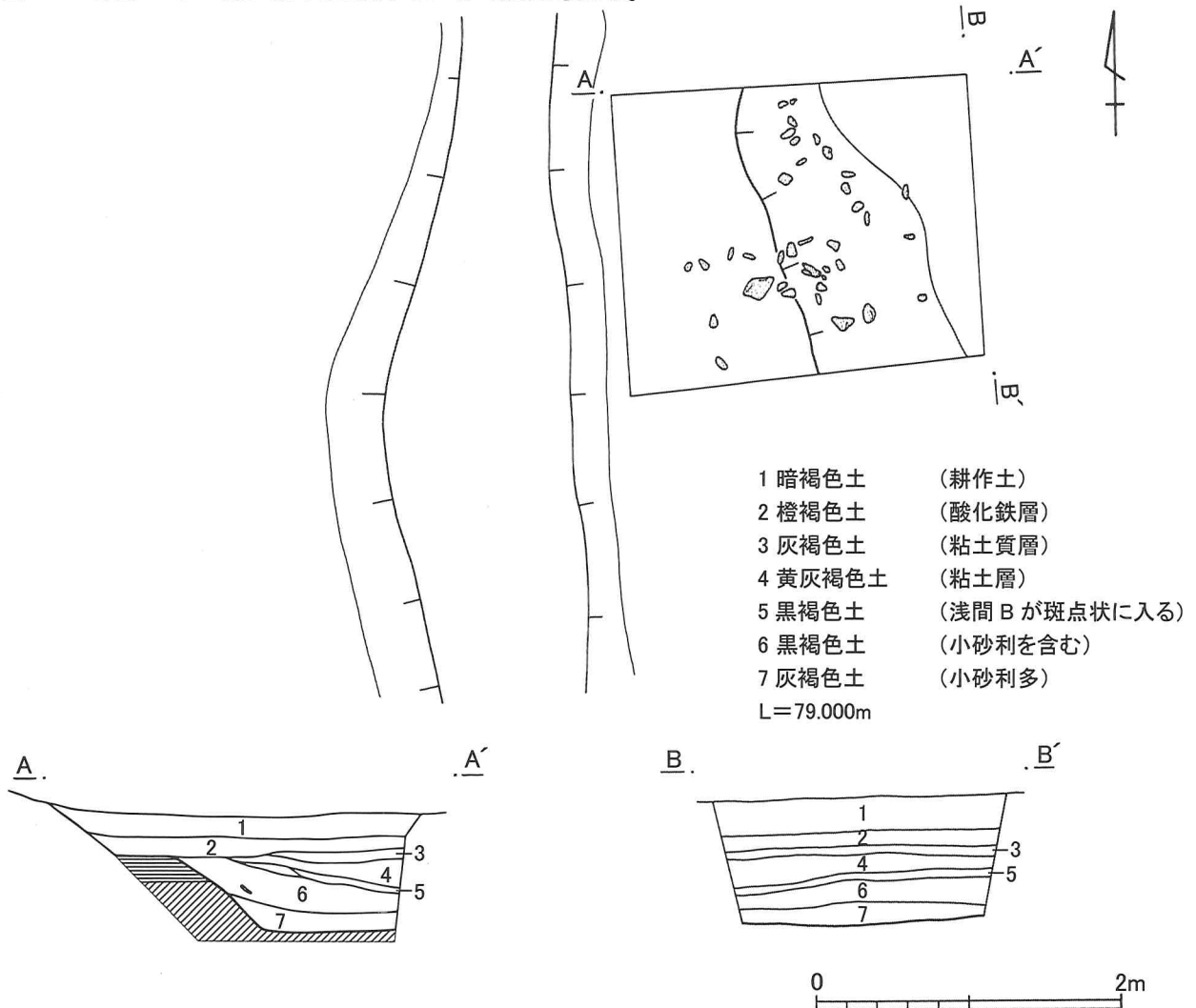
T-14 (第20・21図)

このトレンチはT-13と同様、鶴舞塚古墳と笹塚古墳の切りあい関係を確認するために設定した。表土下1.1mのところまで周濠底を確認できた。周濠底は砂礫層で、E-E'ライン(鶴舞塚側)は標高78.0mで、F-F'ライン(笹塚側)は標高78.1mである。T-13同様鶴舞塚側が深くなっている。埴輪の出土は見られない。

覆土状況を見ると、T-13同様、上層の酸化鉄の沈殿層(2層・4層)が見られる。4層下の褐色系粘質層(5・6層)、その下の7層は黒色系粘質層も同様であるが、7層下にFA層(19層)が点的に見られる。周濠底からの高さは10cmである。

T-15 (第22・23図)

このトレンチは中堤北西コーナー部を確認するためにG-20杭付近に設定した。このトレンチは第三次調査で北側を東西方向に拡張した。表土下30cmのところまで中堤上面を確認し、70cmのところまで外濠の周濠底を確認した。周濠底は砂礫層で、標高77.9mである。外濠の幅は3.4m、深さが40cmと他の外濠確認箇所と比べると狭く浅い。このトレンチの東側に設定した第三次調査T-24の外濠周濠幅が7m以上であることを考えるとこの部分のみ狭くしている可能性も考えられる。尚、その北側の一段高い面の標高は78.3mで、ローム層上に砂利や小石が敷かれた状況で確認された。さらにトレンチの北西隅で深さ60cmの土坑が確認された。その北側は現在の水路となっており調査ができなかったが、外濠の外側立ち上がりや現在の水路付近と考え、この部分のみ二段に掘り込まれている可能性もある。



中堤部分の標高は78.5mで、ローム層上に砂利や小石が敷かれた状況で確認されたほか、埴輪も破片の状態であるが比較的多く出土している。

T-16 (第24図)

このトレンチは前方部内濠外側立ち上がりを確認するために設定した。表土下1mのところで周濠底が確認できた。周濠底は白色粘土層で、標高は77.9mである。周濠の立ち上がりは35度で、ローム地山を削り込んでいる。すぐ西側には水路がとおっており中堤の規模等は不明である。周濠底付近からは、埴輪片が少量出土している。

周濠底より10cmほど上でFA層(12層)が確認されている。また、覆土中層に砂層(5層)が見られることから、一時期水が流れていたと考えられる。

T-17 (第25図)

このトレンチは前方部内濠外側立ち上がりを確認するために設定した。表土下0.8mのところで周濠底が確認できた。周濠底は砂利混じりの粘土層で、標高は78.0mである。周濠の立ち上がりは40度で、ローム地山及び砂利混じりの粘土層を削り込んでいる。すぐ西側には水路がとおっており中堤の幅は不明であるが、2層の下のローム層上の標高が78.5mとT-15の中堤上面標高と一致することから、この面が中堤上面と考えられる。周濠底付近からは、埴輪片が少量出土している。

(3) 第Ⅲ次調査

第Ⅲ次調査では11本のトレンチを設定し、古墳の北半分の周濠と墳丘部分及び北側に隣接する糠塚古墳及び前方部西側の外濠の確認を行った。

T-18 (第26図)

このトレンチは後円部の東側の葺石及び段築の状況を確認するためにH-6付近に設置した。表土下70cmのところで第三段斜面の葺石が確認できた。葺石は疎らで崩落している状況が確認できた。第三段斜面の葺石の角度は30度である。

T-19 (第27図)

このトレンチは後円部北西側の葺石及び段築の状況を確認するためにF-8杭付近に設定した。表土下40cmのところで第三段斜面の葺石が確認できた。第二段平坦面にも第三段斜面の葺石の転石と思われる川原石が散在する。第三段斜面の葺石の角度は25度である。第二段平坦面は標高81.1m、幅は2.5mで、端部に埴輪片が集中して出土していることから、この部分に埴輪が樹立されていたと考えられる。第二段斜面の葺石の角度は30度で、斜面の幅は約2.5m、高さは約1.6mである。第一段平坦面の標高は79.5mで、黒色地山を少し掘り込んで造られている。

T-20 (第28図)

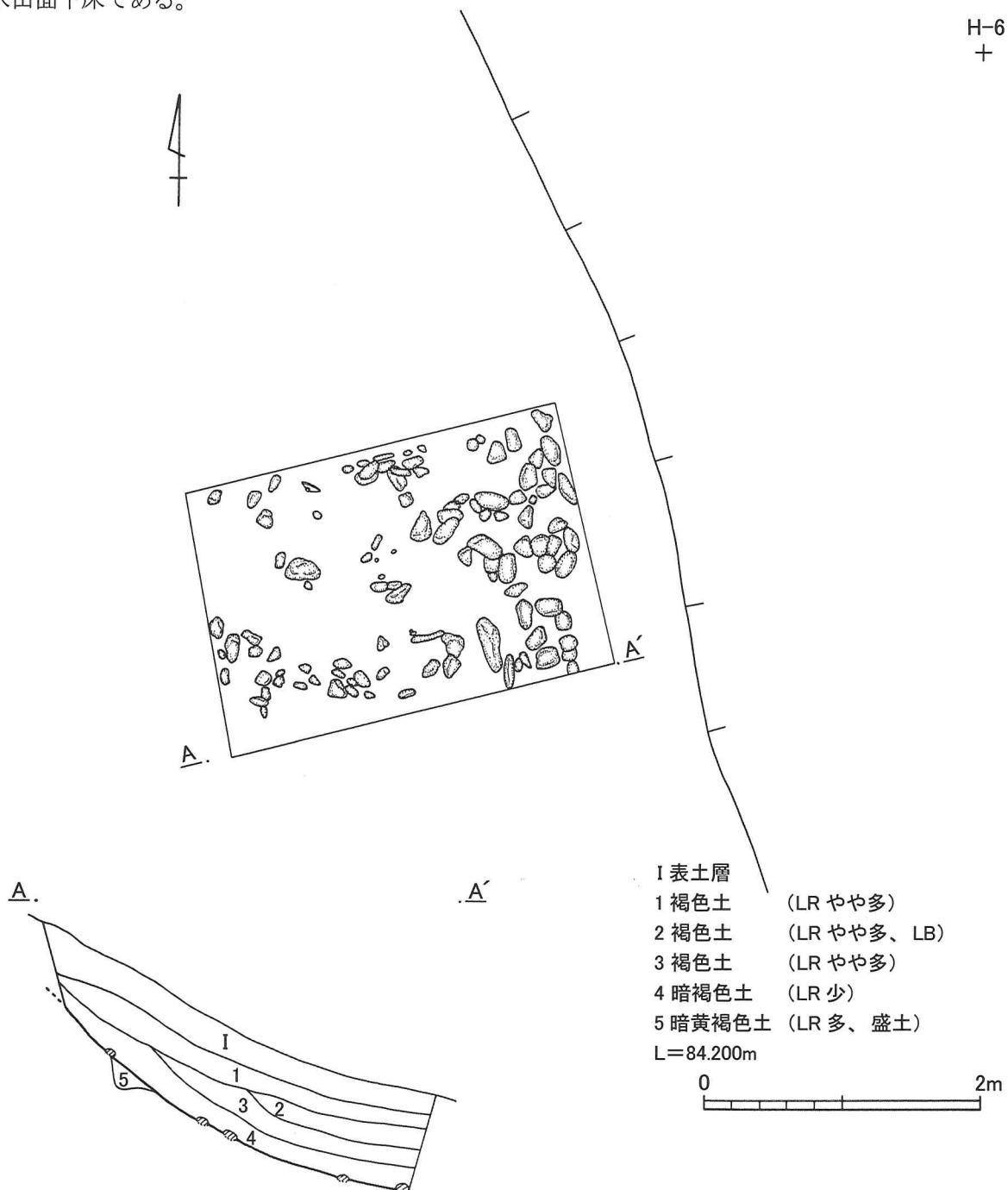
このトレンチは後円部北側の葺石及び段築の状況を確認するためにG-10杭付近に設定した。表土下50cmのところで第三段斜面の葺石が確認できた。第二段平坦面では粘土が硬く締まり小砂利が敷かれているような状況が見られた。第三段斜面の葺石の角度は25度である。第二段平坦面は標高81m、幅は2.8mで、端部に埴輪片が集中して出土していることから、この部分に埴輪が樹立されていたと考えられる。第二段斜面の葺石の角度は27度で、斜面の幅は約3m、高さは約1.5mである。第一段平坦面の標高は79.4mで、黒色地山を少し掘り込んで造られている。よって、二段目以上は盛土により造られている状況が確認できた。

T-21 (第29図)

このトレンチは後円部内濠内側の立ち上がりを確認するために幅 0.85m×長さ3.55mのトレンチをF-6杭付近に設定した。表土下1.65mのところまで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層である。内濠底面の標高は77.85mである。周濠底からの立ち上がりは粘土層でその角度は約15度と緩く河原石が葺かれている。Iの層が厚いのはこの付近が残土置き場となっていることによる。

T-22 (第30図)

このトレンチは後円部内濠外側の立ち上がりを確認するために幅0.8~2.5m×長さ10mのトレンチをC-6杭付近に設定した。表土下1.4mのところまで周濠底が確認できた。周濠底は砂礫層である。中堤上面の標高は78.8m、内濠底面の標高は78.0mである。内濠外側周濠の立ち上がりは30度で、付近からは、埴輪片が少量出土している。濠底から75cm上の層で浅間B軽石層が確認された。また、1層は酸化鉄の沈殿層で水田面下床である。

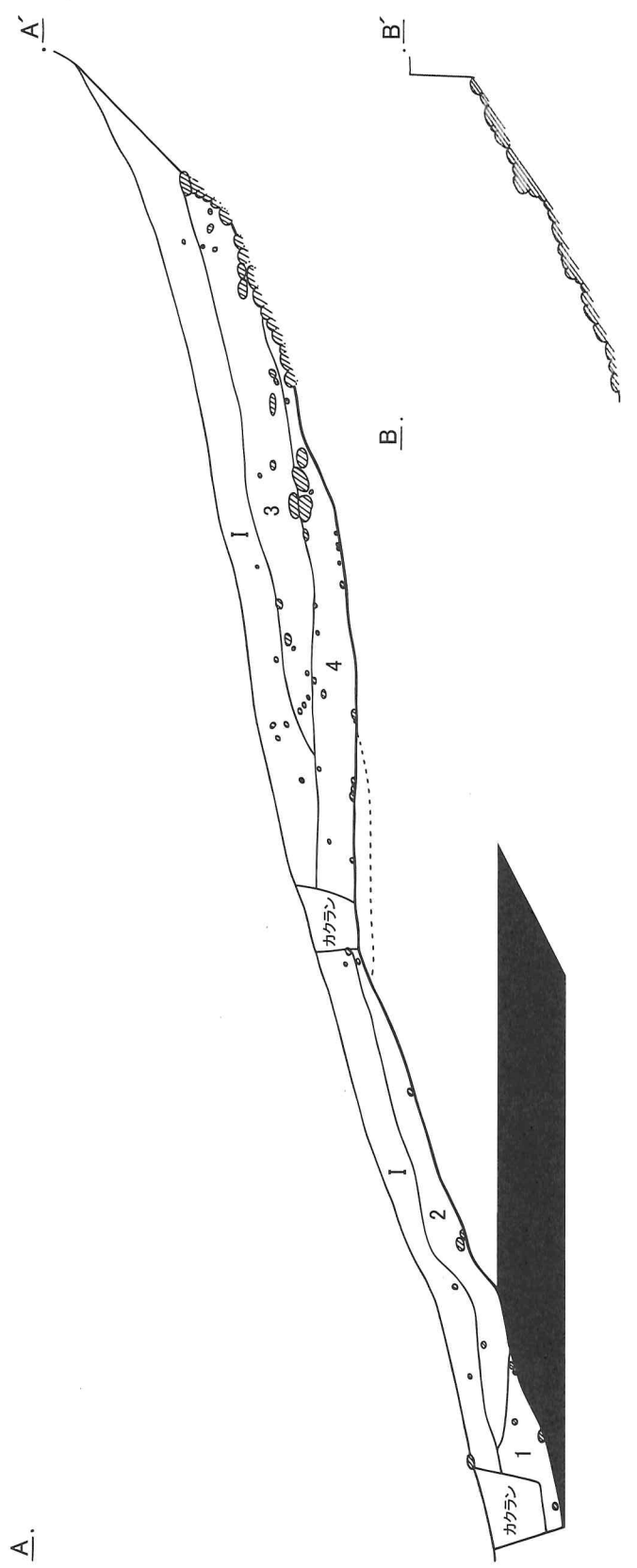
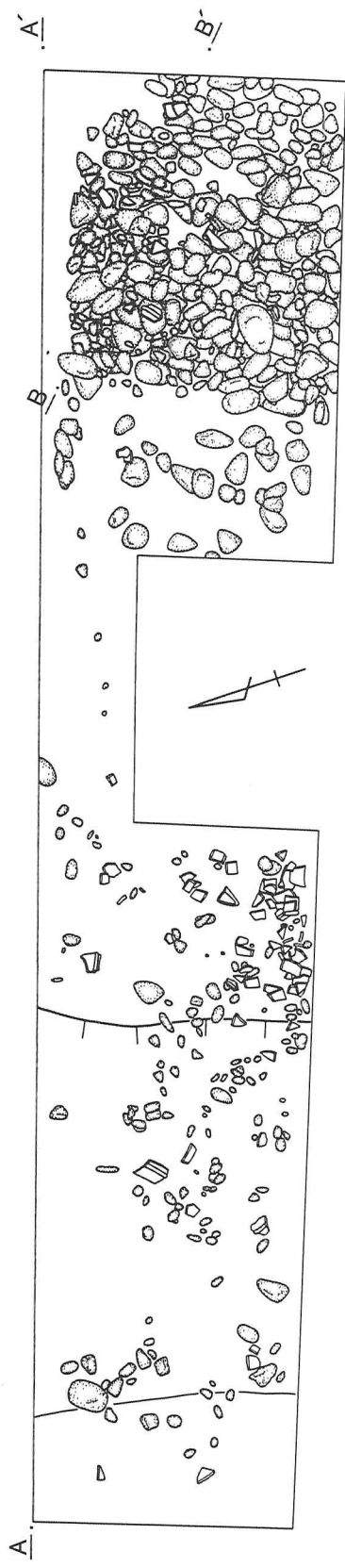


第26図 T-18 平・断面図



- | | | | |
|--------|---------------|---------|----------------------|
| I 表土層 | | 4 褐色土 | (LR 少) |
| 1 暗褐色土 | (LR 少) | 5 暗黄褐色土 | (LR やや多、小 LB やや多、盛土) |
| 2 黒褐色土 | (LR 少) | 6 暗褐色土 | (LR 少、埴輪・葺石を含む) |
| 3 褐色土 | (LR 少、小砂利を含む) | 7 褐色土 | (LR やや多) |
| | | | L=83.300m |

第27図 T-19 平・断面図



- I 表土層
 - 1 暗褐色土 (LR 微、小石を含む)
 - 2 褐色土 (LR やや多、小石を含む)
 - 3 黒褐色土 (LR 少、小石やや多)
 - 4 暗褐色土 (LR 少、小石少)
- L=82.900m

第28図 T-20 平・断面図

T-23 (第31図)

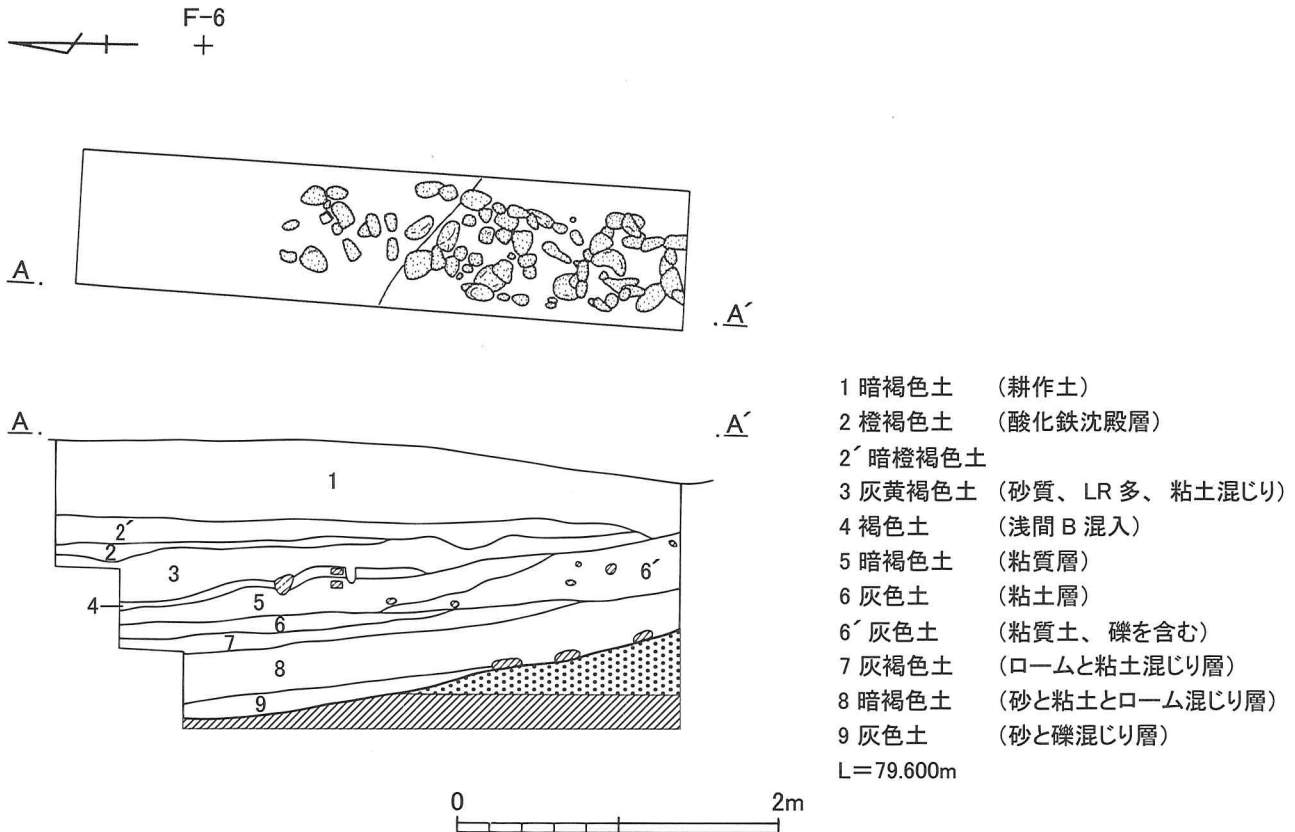
このトレンチは後円部内濠外側の立ち上がりを確認するために幅2m×長さ11mのトレンチをG-12杭付近に設定した。表土下0.9~1.1mの深さで周濠底が確認できた。周濠底はローム層から深いところでは砂礫層に達している。中堤上端の標高は78.8m、内濠底面の標高は78.2~78.0mである。8層にF Aと思われる火山灰の堆積層が見られ、6・7層は粘性の強い粘性土、その上の5層は浅間Bの火山灰層と考えられ、4層に再び粘性土が入り3層は砂層と粘性土が層状をなすことから、この時期濠内を水が流れていた可能性が指摘できる。2層は酸化鉄を含むことから水田面と考えられる。遺物は中堤から転落したと思われる埴輪片が少量確認されている。

T-24 (第32図)

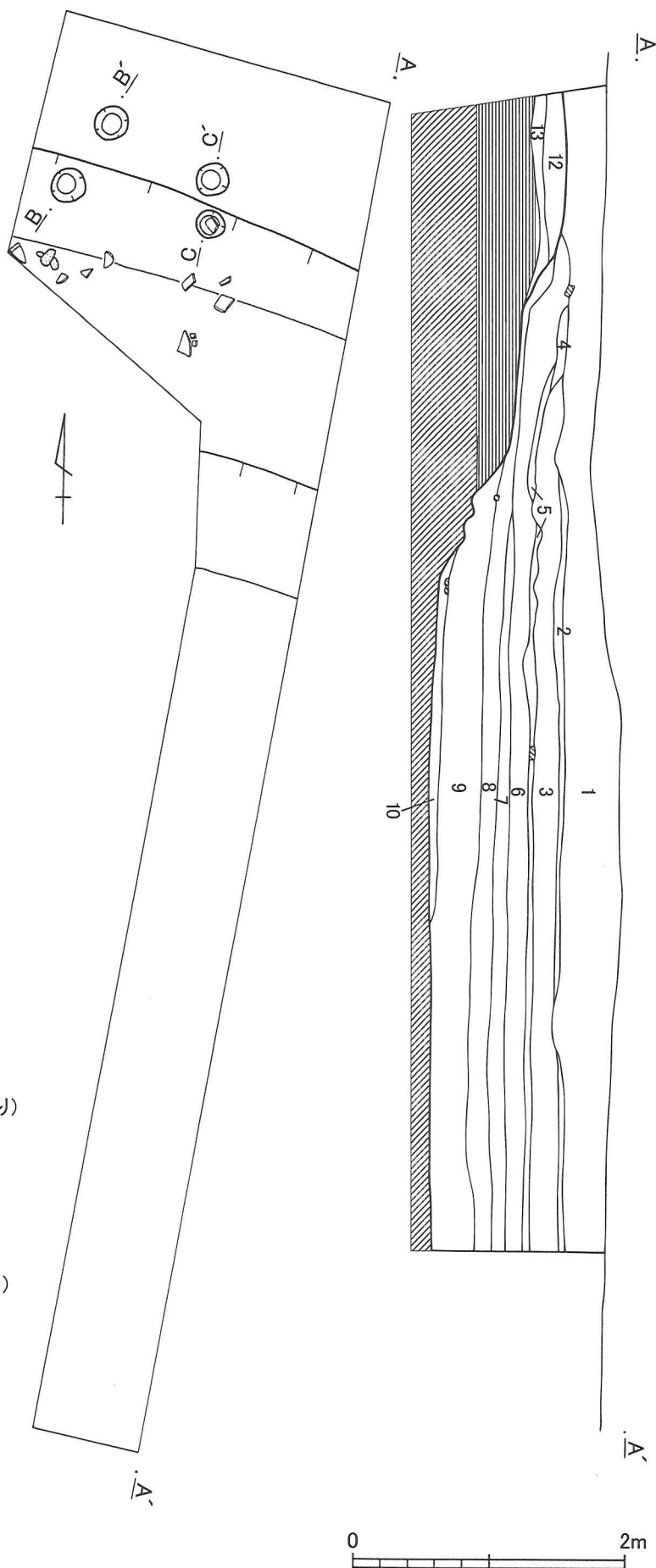
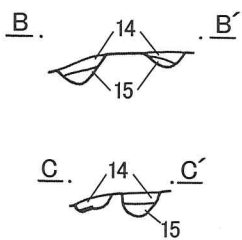
このトレンチは前方部外濠内側の立ち上がりを確認するために幅1m×長さ8.5mのトレンチをE-18杭付近に設定した。表土下0.7mのところ周濠底が確認できた。周濠底はローム層である。現状での中堤上端の標高は78.55m、外濠底面の標高は78.1mである。外濠外側の立ち上がりは、現代の水路に切られており不明であるが、現況から判断して約10mと推定される。5・6層は粘性土で3層と4層の間に酸化鉄を含む層(8層)が見られることから、この部分が水田の床土部分と判断される。遺物は埴輪片が少量出土した。

T-25 (第33図)

このトレンチは前方部外濠外側の立ち上がりを確認するために幅1m×長さ5mのトレンチをJ-21杭付近に設定した。表土下0.95mのところ周濠底が確認できた。周濠底は粘土層である。外堤と思われる部分には小砂利を敷いた状況が見られ、その標高は78.2m、外濠底面の標高は77.8mである。6層と7層は粘性土でその間にF A層(9層)が見られる。遺物は埴輪片が少量出土している。



第29図 T-21 平・断面図

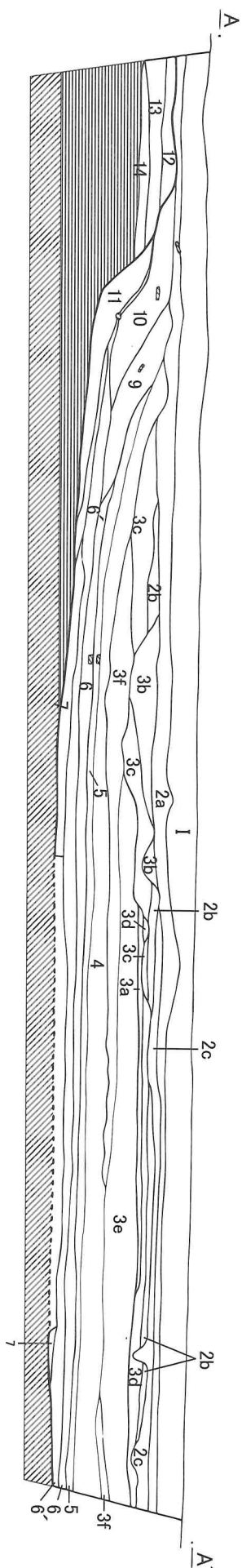
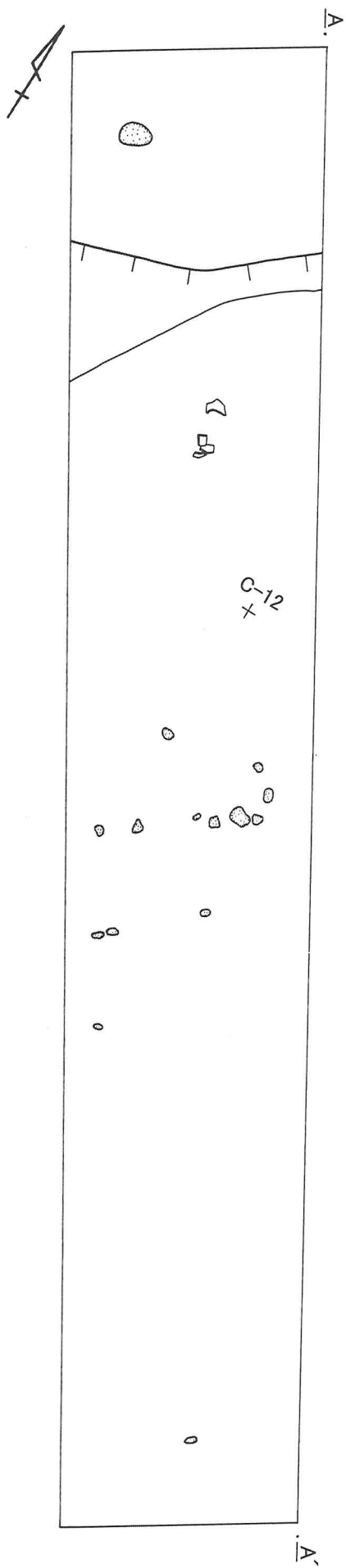


- 1 暗褐色土 (耕作土)
- 2 橙褐色土 (酸化鉄沈殿層)
- 3 灰黄褐色土 (砂質、LR 多、粘土混じり)
- 4 暗黄褐色土 (LR やや多)
- 5 褐色土 (浅間 B 混入)
- 6 暗褐色土 (粘質層)
- 7 灰色土 (粘土層)
- 8 灰褐色土 (ロームと粘土混じり層)
- 9 暗褐色土 (砂とロームと粘土混じり層)
- 10 灰色土 (砂と礫混じり層)
- 11 褐色土 (LR 少)
- 12 褐色土
- 13 漸移層
- 14 暗褐色土 (LR 少、IP 微)
- 15 暗黄褐色土 (LR やや多、LB 少)

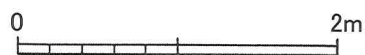
L=A=79.500m

B・C=78.900m

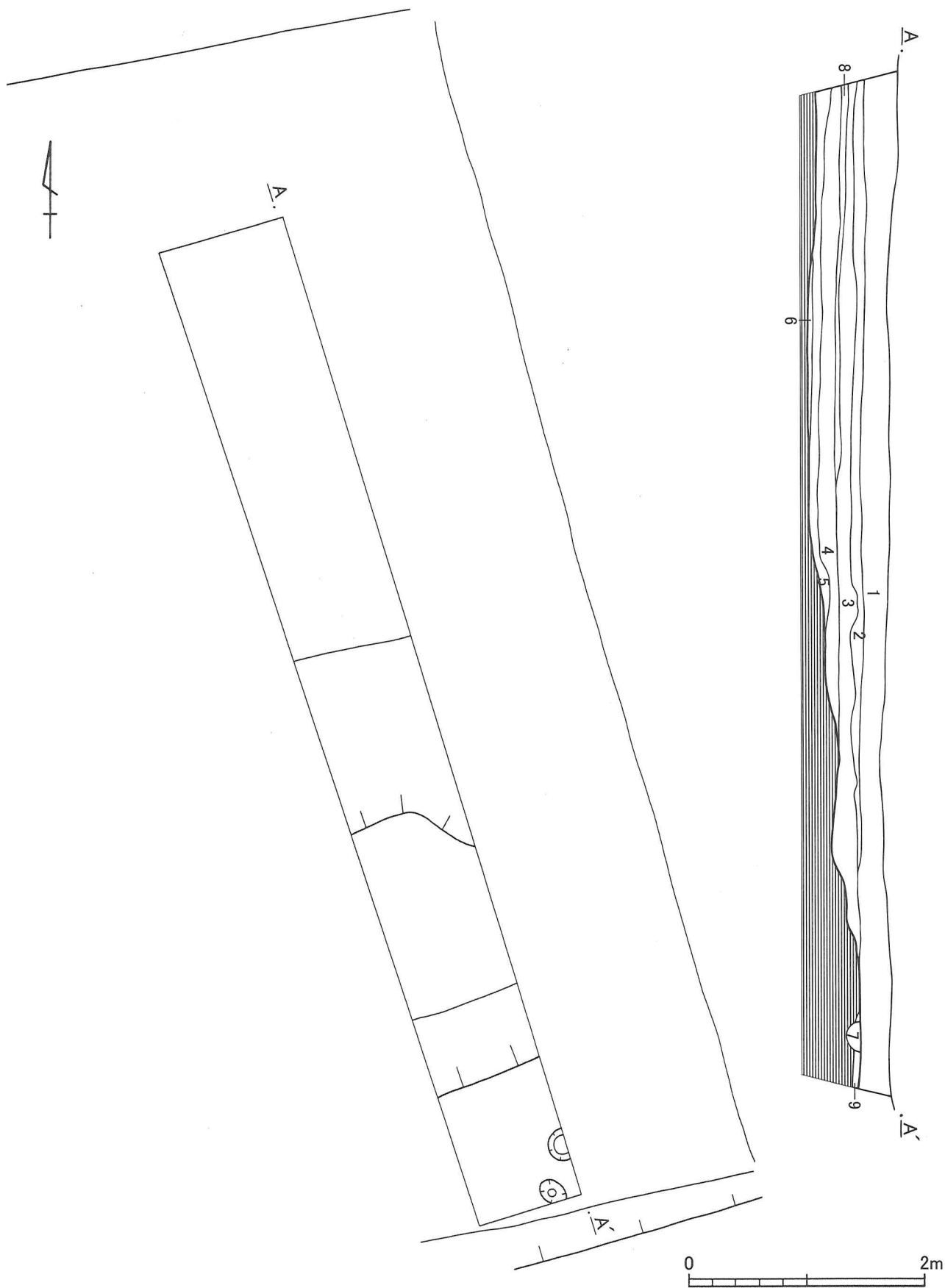
第30図 T-22 平・断面図



- 1 暗褐色土 (耕作土)
 - 2a 橙褐色土 (酸化鉄層)
 - 2b 橙灰色土 (2a より砂粒が多い)
 - 2c 暗橙褐色土 (酸化鉄を含む)
 - 3a 灰褐色土 (砂混じり粘土層)
 - 3b 暗灰色土 (砂層が層状に堆積)
 - 3c 灰色土 (砂層が層状に堆積)
 - 3d 灰褐色土 (砂層が層状に堆積)
 - 3e 暗灰色土 (砂層と粘土層が層状に堆積)
 - 3f 灰褐色土 (砂層が層状に堆積)
 - 4 暗灰褐色土 (粘土主体層、砂少)
 - 5 紫灰色土 (浅間B層)
 - 6 黒褐色土 (粘質層)
 - 6' 暗灰褐色土 (粘土層)
 - 7 灰色土 (粘土層、ローム少)
 - 8 灰褐色土 (FA含む)
 - 9 黒色土 (LR微)
 - 10 黒褐色土 (LR微、FA少)
 - 11 暗褐色土 (LRやや多)
 - 12 褐色土
 - 13 黒色土
 - 14 ローム漸移層
- L=79.100m



第31図 T-23 平・断面図

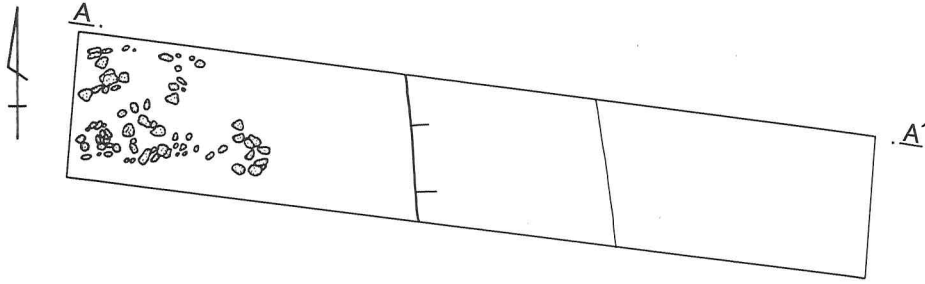


- | | | | |
|---------|--------------------------------|--------|------------|
| 1 暗褐色土 | (耕作土) | 6 黒褐色土 | (LR 微、粘質層) |
| 2 暗黄褐色土 | (LR 多、小 LB やや多、LB、硬くしまる、整地層か?) | 7 黒褐色土 | (LR 少) |
| 3 黒褐色土 | (LR 少、小砂利を含む) | 8 橙褐色土 | |
| 4 褐色土 | (LR やや多、小 LB 微、C) | 9 黒色地山 | |
| 5 暗褐色土 | (LR 少、砂質層) | | |

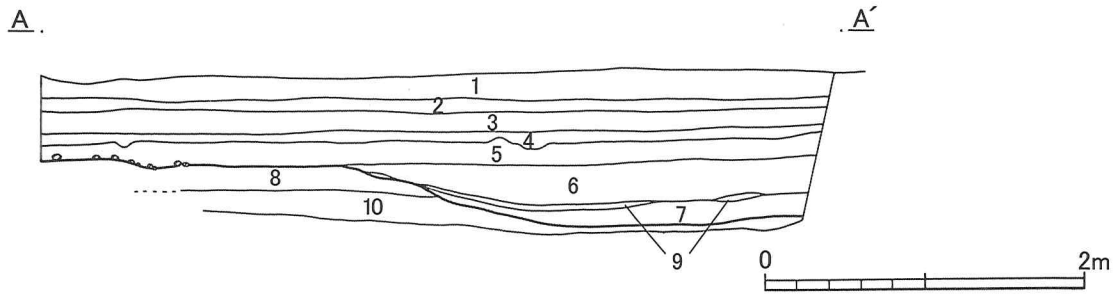
L=79.100m

第32図 T-24 平・断面図

T-25

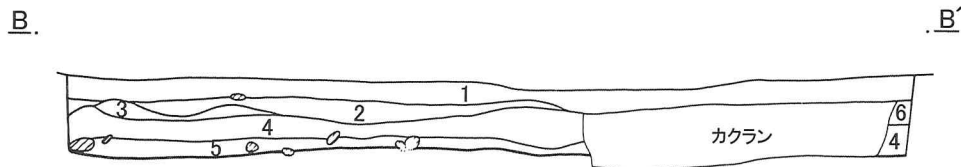
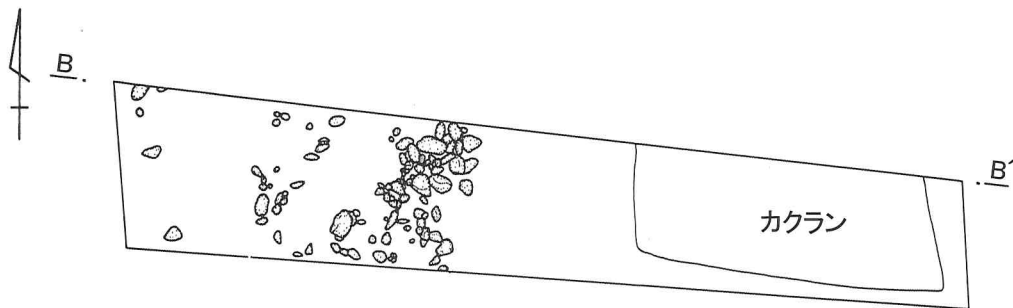


J-21
+



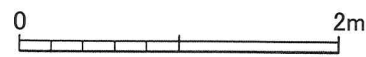
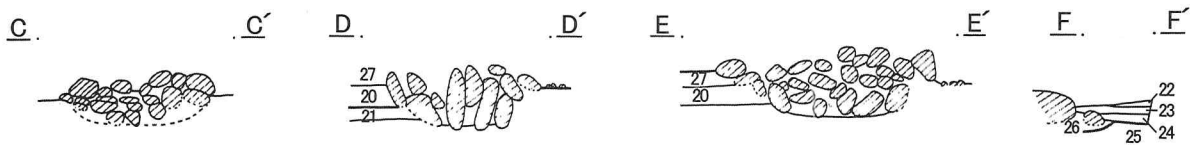
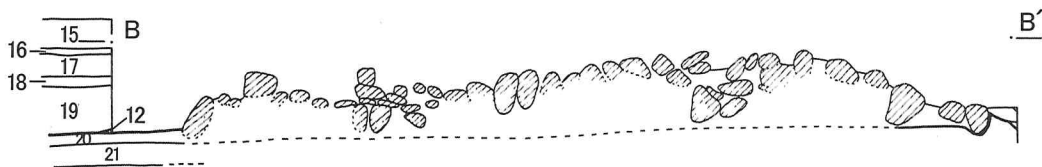
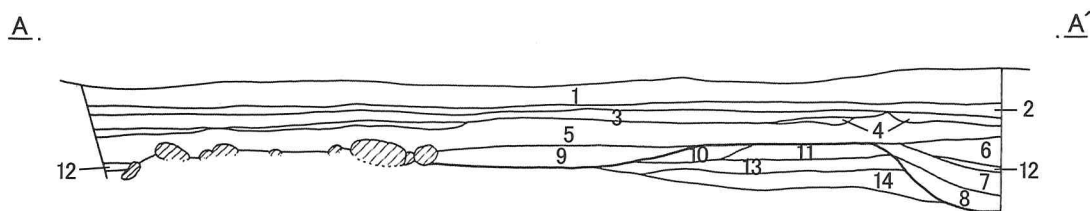
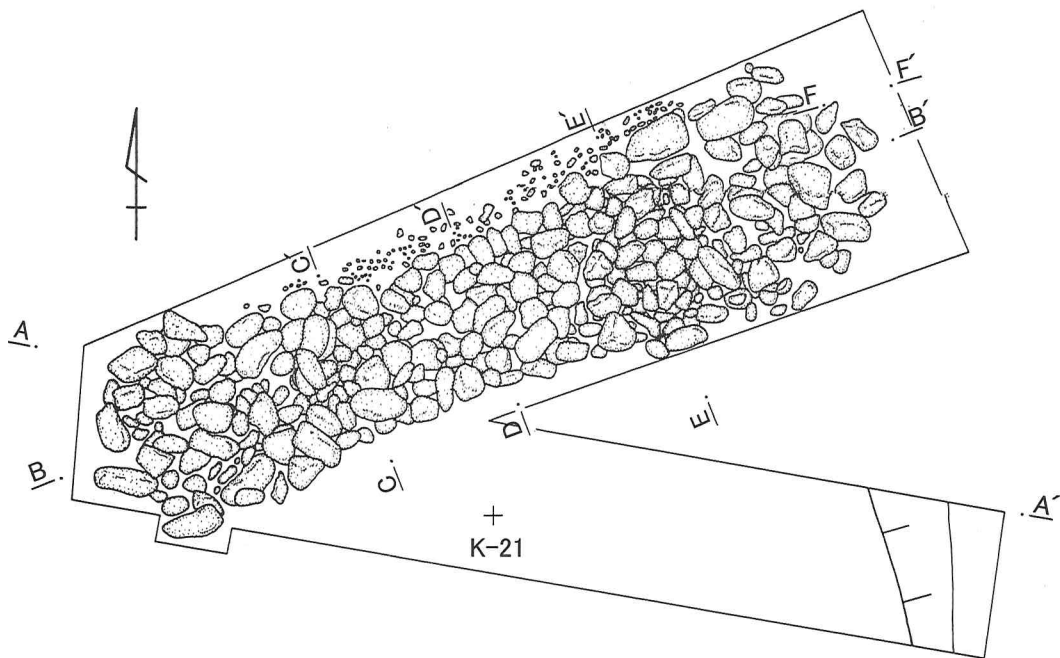
- | | |
|--------------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 (耕作土) | 7 褐色土 (LR少) |
| 2 橙褐色土 (酸化鉄層) | 8 暗褐色土 (LR微、粘質層、盛土) |
| 3 褐色土 (白色砂粒少、粘質層、硬くしまる) | 9 FA層 |
| 4 灰褐色土 (粘土層) | 10 黒色粘土層 (地山) |
| 5 黒褐色土 (白色砂粒少、粘質層、硬くしまる) | L=79.000m |
| 6 褐色土 (粘質層) | |

T-26



- | | |
|--------------|-----------------|
| 1 暗褐色土 (耕作土) | 5 黒褐色土 (LRやや多) |
| 2 灰色土 (粘質層) | 6 暗黄褐色土 (LRやや多) |
| 3 褐色土 | L=79.000m |
| 4 黒褐色土 (粘質層) | |

第33図 T-25・26 平・断面図



- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1 暗褐色土 (耕作土) | 16 床土 |
| 2 橙褐色土 (酸化鉄層) | 17 褐色土 |
| 3 褐色土 (白色砂粒少、粘質層、硬くしまる) | 18 灰色粘土層 |
| 4 灰褐色土 (粘土層) | 19 暗褐色土 |
| 5 黒褐色土 (白色砂粒少、粘質層、硬くしまる) | 20 黒色粘土層 |
| 6 褐色土 (粘質層) | 21 暗褐色粘土層 |
| 7 褐色土 (LR 少) | 22 FAを含む層 |
| 8 暗黄褐色土 (LR やや多、粘土ブロックやや多) | 23 褐色土 (粘質層) |
| 9 暗褐色土 (LR やや多、硬くしまる、盛土) | 24 黒色土 (LR 少、C を含む) |
| 10 黄褐色土 (LR 多、硬くしまる、盛土) | 25 暗褐色土 (LR、粘土粒を含む、地山) |
| 11 暗褐色土 (LR やや多、硬くしまる、盛土) | 26 暗褐色土 (LR 少、やや軟らかい) |
| 12 FA 層 | 27 黄褐色土 (LB) |
| 13 黒色粘土層 (地山) | |
| 14 褐色地山 | |
| 15 暗褐色土 (耕作土) | |
- L=A=79.000m
B ~ F=78.600m

第35図 T-28 平・断面図

T-26 (第33図)

このトレンチは前方部外濠外側の立ち上がりを確認するために幅1m×長さ5mのトレンチをL-21杭付近に設定した。このトレンチでは周濠が確認できなかったことから、周濠の掘り込みはもっと東側に位置すると想定される。なお、T-25と同様に小砂利や拳大の石を敷いた状況が確認できた。その標高は78.25mである。遺物は埴輪片が少量出土している。

T-27 (第34図)

このトレンチは糠塚古墳の墳丘及び周濠を確認するために幅1m×長さ22mのトレンチをA'-6杭付近に設置した。現状で円形にめぐる畔の内側にトレンチを設定したが、墳丘部分は完全に削平されているのか、盛土を確認することができなかった。トレンチ北側で東西方向の新旧2本の溝と土坑を確認することができたが、セクションの観察からは糠塚古墳よりも古い時期のものである。遺物中には弥生土器片などが含まれる。

T-28 (第35図)

このトレンチは前方部外濠外側の立ち上がりを確認するためにT-25とT-26の間に幅1m×長さ6mのトレンチを設定した。トレンチの掘り下げを行ったところ西側で河原石が纏まって出土したことから、その範囲を確認するために拡張して調査を行った。その結果、図に示すように長さ5.2m、幅1～1.4mの集石遺構が確認できた。この遺構はFA層(12層)下であることから古墳に伴う遺構と考えられる。黒色粘土層を掘り込んで造られており、外堤と一体的に整備された可能性がある。なお、標高は78.2～78.3mで、T-25とT-26の外堤部分の高さと一致する。表土下0.9mのところで周濠底が確認できた。周濠底は粘土層で、外濠底面の標高は77.9mである。6層と7層は粘性土でその間にFA層が見られる。遺物は埴輪片が少量出土している。

2. 遺物

(1) 埴輪

出土遺物は、墳丘及び周濠内から円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。以下各埴輪については観察表(第3表～第5表)にまとめるが、円筒埴輪の口縁部及び突帯の形状については、以下のように分類した。

(口縁部)

I類 口縁部が外側に屈曲しないもの。

II類 口縁部が外側に強く屈曲し、端部を面取りするもの。

(突帯)

A類 台形状を呈し、突出幅が1cm以上のもの。

B類 台形状を呈し、突出幅が1cm未満のもの。

C類 突帯の上稜と下稜が強く突出するもの。

D類 突帯の上稜のみが強く突出するもの。

E類 稜が不明瞭で丸みがあるもの。

(2) その他の出土遺物

埴輪以外に弥生土器、須恵器、かわらけ、石鏃、古銭が出土している(第54図)。

1～4はT-27から出土した弥生土器片である。1は胴部片で、撚糸文が施されている。2は胴部片で、上半に連弧文と直線文、下半に付加条2種の縄文が施され、直線文上に円形浮文が貼り付けられている。3は

口縁部片で、付加条1種の縄文が施され、貼瘤状の突起が貼り付けられている。4は胴部片で付加条1種の縄文が施される。

5はT-23から出土した須恵器甕片である。外面平行叩き、内面に同心円状の当具痕が残る。

6はT-21から出土した須恵器坏片である。口径12.9cmで、残存高3.4cm。ロクロ成形で、胎土に白色砂粒、白雲母を多く含む。

7はT-28上層から出土した非ロクロ系の丸底かわらけ片である。口径12.9cm、残存高2.3cm。口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ。

8はT-19から出土したロクロ成形のかわらけ片である。口径6.8cm、器高1.5cm、底径4.8cm。底部回転糸切り。

9はT-15から出土した内耳土器片である。胎土に金雲母を多く含む。

10はT-27から出土した石鏃である。長さ2.3cm、最大幅1.2cm、厚さ0.3cm。チャート質。

11はT-24から出土した寛永通宝である。

No.	器種	寸法 (cm)				口縁形態	突帯形態	透孔	調整の特徴	色調	胎土	焼成	調査年次	出土位置	備考	
		口径	器高	底径	突帯高											
1	朝顔形埴輪	62			1.2~1.5		A	方形	外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	やや良	I次	T-2平坦部		
2	円筒埴輪	31.2			1.2~1.4		I	A	円形	外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	赤褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	I次	T-2葎石上	
3	円筒埴輪			22	0.8		B		外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	I次	T-4		
4	円筒埴輪	28.5	53	23	1.0~1.3		II	D	半円	外面タテハケ一次調整、内面最上部ハケ、以下ナデ	褐色	砂粒やや多く含む	良好	I次	T-5	
5	円筒埴輪	35.2			1.0~1.2		II	A	半円	外面タテハケ一次調整、内面上部ハケ、以下ナデ	淡褐色	黒色粒、砂粒	良好	I次	T-5	外面に線刻あり
6	円筒埴輪	34			1.2		I	D	半円	外面粗いタテハケ一次調整、内面ハケ	赤褐色	砂粒多く含む	良好	I次	T-5	
7	円筒埴輪				0.8~1.2		D		外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	淡褐色	砂粒多く含む	良好	I次	T-5	外面に線刻あり	
8	円筒埴輪				0.8~1.2		D		外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	赤褐色	砂粒多く含む	良好	I次	T-5	外面に線刻あり	
9	円筒埴輪				0.8		B	半円	外面粗いタテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	赤褐色	砂粒多く含む	良好	I次	T-5		
10	円筒埴輪				0.8~1.0		B		外面粗いタテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒多く含む	良好	I次	T-5		
11	円筒埴輪			23.5	0.8~1.0		B		外面タテハケ一次調整、内面上部ハケ、下半ナデ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	I次	T-5	外面に銀杏葉線刻あり	
12	円筒埴輪				1.2		I	A		外面粗いタテハケ一次調整、口縁部内面ヨコハケ、以下はナナメハケ後ナデ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	I次	T-5	
13	円筒埴輪				1.2		II	A	半円	外面粗いタテハケ一次調整、内面ヨコハケ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	I次	T-2	
14	円筒埴輪	31	49.3	21	1.1~1.6		II	A	方形	外面粗いタテハケ一次調整、内面ナデ	橙褐色	砂粒・小石	良好	II次	T-8	
15	円筒埴輪	32.2			1.0~1.2		I	D		外面タテハケ一次調整、内面ヨコハケ	赤褐色	砂粒	良好	II次	T-8	
16	朝顔形埴輪				1.1~1.5		D	半円?	外面ナナメハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	II次	T-8		
17	円筒埴輪				0.8		E		外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	II次	T-8		
18	円筒埴輪			20.5	1.1~1.2		I	A		外面タテハケ一次調整、内面ナナメハケ	乳白色	砂粒を多く含む	良好	II次	T-8	
19	円筒埴輪	29			0.8~1.0		II	B	半円	外面粗いタテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	乳白色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	II次	T-8	外面に銀杏葉線刻あり。赤彩あり。
20	円筒埴輪			22	1.3		C		外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	褐色	砂粒を多く含む	良好	II次	T-9		
21	円筒埴輪			31.5			E		外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	II次	T-9		
22	朝顔形埴輪				1.0~1.5		C・D		外面タテハケ一次調整後肩部B種ヨコハケ、内面ナデ	淡褐色	砂粒を多く含む	良好	II次	T-9		
23	円筒埴輪				0.7		E		外面タテハケB種ヨコハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	II次	T-9		
24	朝顔形埴輪				1.0		A	半円?	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	II次	T-9		

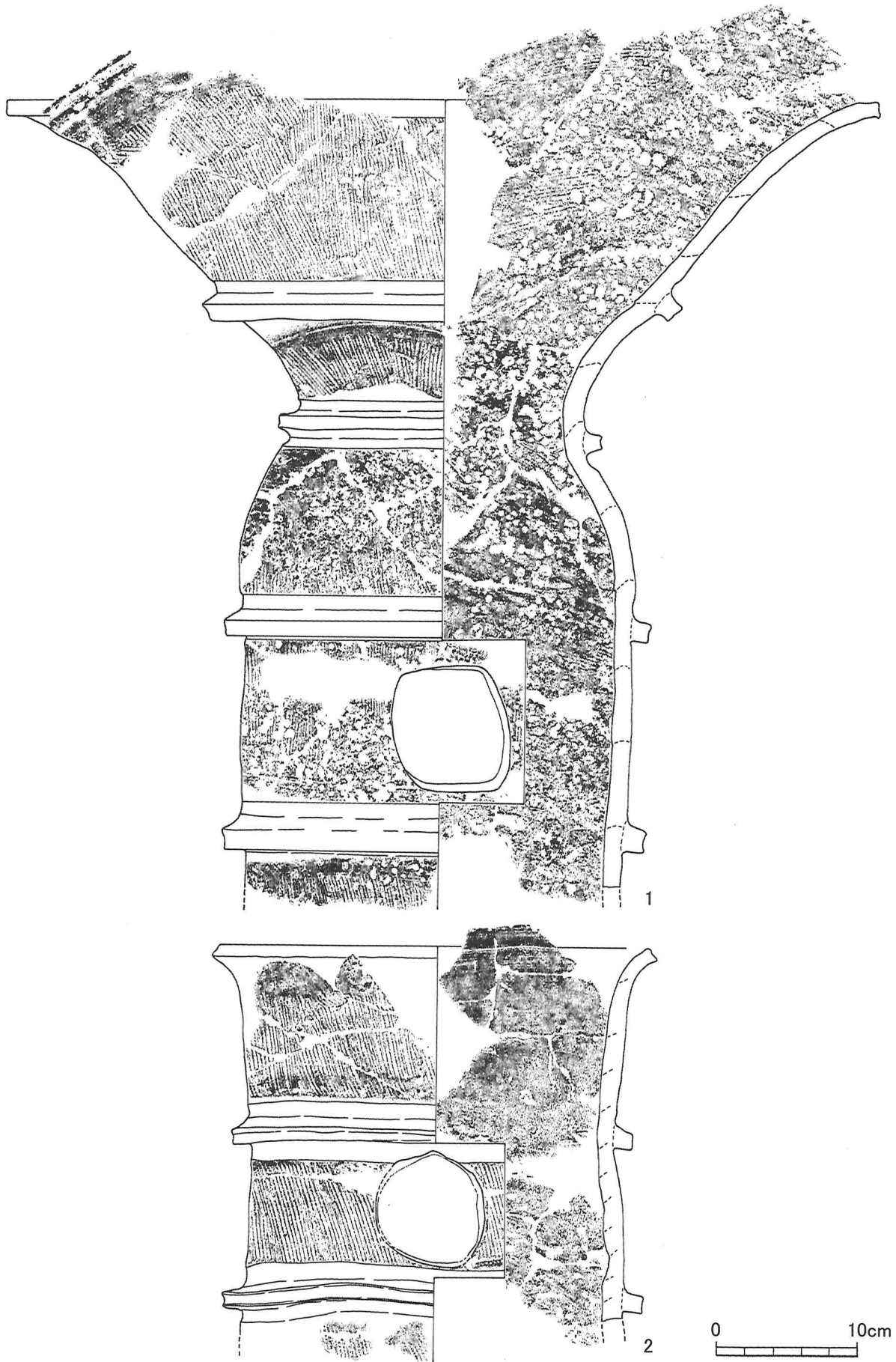
第3表 埴輪観察表(1)

No.	器種	寸法 (cm)				口縁形態	突帯形態	透孔	調整の特徴	色調	胎土	焼成	調査年次	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高										
25	円筒埴輪							外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9		
26	円筒埴輪				0.6		E	外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9		
27	円筒埴輪							外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9		
28	朝顔形埴輪	46			1.0		D	外面粗いたテハケ一次調整、内面ヨコハケ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部		
29	円筒埴輪	27.8	51	19	1.0~1.4	I	A	半円？ 外面タテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	外面に線刻あり	
30	朝顔形埴輪				1.0~1.2		C	半円？ 外面タテハケ一次調整後肩部B種ヨコハケ、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	赤彩あり。	
31	円筒埴輪	36			1.0	II	B	半円 外面粗いたテハケ一次調整、口縁部内面ヨコハケ、以下ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	外面に銀杏葉線刻あり。赤彩あり。	
32	円筒埴輪	37			1.2~1.5	I	A	円形 外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	赤彩あり。	
33	円筒埴輪			23	1.0~1.2		D	外面タテハケ一次調整、内面ハケ	淡褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部		
34	円筒埴輪			25	1.5		A	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-10平坦部		
35	円筒埴輪			23	0.8		B	円形 外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	淡褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-10平坦部		
36	円筒埴輪			23.5	1.0		B	外面粗いたテハケ一次調整、内面ハケ	乳白色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	赤彩あり。	
37	円筒埴輪			24.5	1.2		A	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-10平坦部		
38	円筒埴輪			23.5	0.8~1.0		C・D	円形？ 外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-10平坦部	赤彩あり。	
39	円筒埴輪	29			0.8~1.0		D	半円 外面タテハケ一次調整、内面ハケ	赤褐色	砂粒、小石、赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-11		
40	朝顔形埴輪				1.2~1.5		D	円形 外面タテハケ一次調整後肩部にB種ヨコハケ、内面ナデ	淡褐色	砂粒やや多く含む	良好	Ⅱ次	T-11		
41	朝顔形埴輪	52.2						外面ナメハケ、内面ヨコハケ	褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-11		
42	円筒埴輪	34			1.5~1.8	I	A	半円？ 外面タテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒やや多く含む	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
43	円筒埴輪				1.5		A	半円？ 外面タテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒やや多く含む	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
44	円筒埴輪			20.5	1.0~1.5		A	外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	淡褐色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
45	円筒埴輪	35			1.0~1.5		A	円形 外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
46	円筒埴輪			21.5				外面タテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	赤褐色	砂粒多く含む	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
47	円筒埴輪			22	1.0~1.2		D	半円 外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒多く含む	良好	Ⅲ次	T-19平坦部		
48	円筒埴輪			20.7	1.0		E	外面粗いたテハケ一次調整、内面ハケ後ナデ	淡褐色	砂粒多く含む	良好	Ⅲ次	T-20平坦部		
49	円筒埴輪				1.0~1.4		D	半円 外面タテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅰ次	T-2	外面に銀杏葉線刻あり	
50	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅰ次	T-4	外面に銀杏葉線刻あり	
51	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅰ次	T-4	外面に銀杏葉線刻あり	
52	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	乳白色	砂粒	良好	Ⅰ次	T-4	外面に銀杏葉線刻あり	
53	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	乳白色	砂粒	良好	Ⅰ次	T-4	外面に銀杏葉線刻あり	
54	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり	
55	円筒埴輪							外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	内面に線刻あり	
56	円筒埴輪							外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ナデ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に銀杏葉線刻あり	
57	円筒埴輪							外面粗いたテハケ一次調整、内面ナデ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり。	
58	円筒埴輪				0.8~0.9		D	外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり。	
59	円筒埴輪							外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり。	
60	円筒埴輪							外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に銀杏葉線刻あり	
61	円筒埴輪							外面タテハケ一次調整、内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり。	
62	円筒埴輪							外面タテハケ一次調整、内面ハケ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-5	外面に線刻あり。	
63	円筒埴輪				1.2		A	円形 外面タテハケ一次調整、内面ハケ	褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-8	外面に線刻あり。	
64	円筒埴輪				1.2		A	半円？ 外面タテハケ後B種ヨコハケ、内面ハケ後ナデ	乳白色	砂粒、赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-8	外面に線刻あり。赤彩あり。	

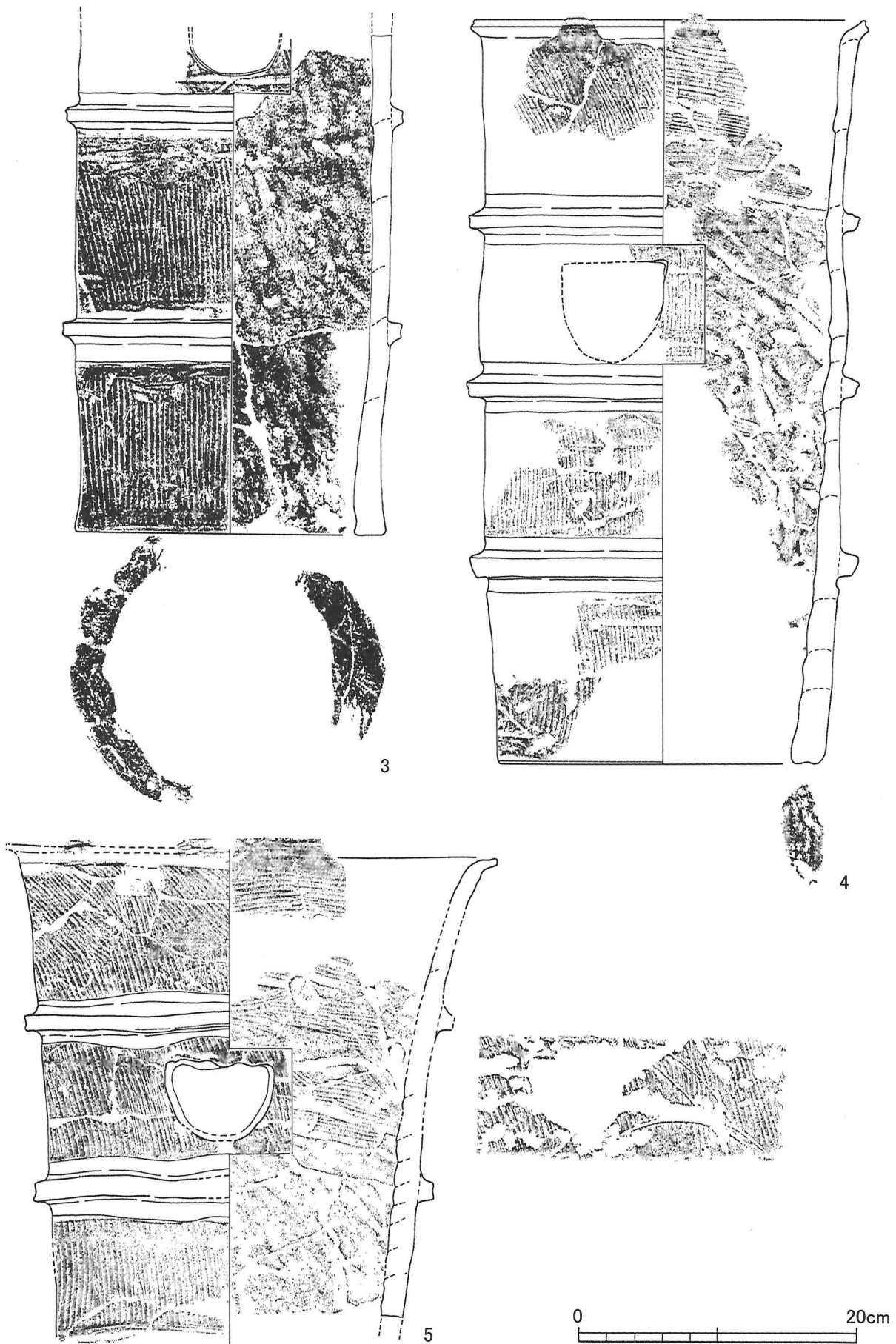
第4表 埴輪観察表(2)

No.	器種	寸法 (cm)				口縁 形態	突帯 形態	透孔	調整の特徴	色調	胎土	焼成	調査 年次	出土位置	備考
		口径	器高	底径	突帯高										
65	円筒埴輪				1.2		D	半円	外面タテハケ一次調整、 内面ハケ後ナデ	乳白色	砂粒・小石	良好	Ⅱ次	T-8	外面に線刻あり。 内外面に赤彩あり
66	円筒埴輪							半円	外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-8	外面に銀杏葉線刻あり
67	円筒埴輪							半円?	外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-9	外面に線刻あり。 赤彩あり
68	円筒埴輪								外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-9	外面に線刻あり。
69	円筒埴輪				1.0		B		外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	乳白色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9	外面に銀杏葉線刻あり
70	円筒埴輪								外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	乳白色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-9	内面に線刻あり
71	円筒埴輪				1.2		A		外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9	外面に銀杏葉線刻あり
72	円筒埴輪								外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9	外面に銀杏葉線刻あり
73	円筒埴輪							円形?	外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	赤褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-9	外面に線刻あり。
74	円筒埴輪					I			外面粗いたテハケ一次調整、 内面ヨコハケ	褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-9	内面に線刻あり
75	円筒埴輪							半円?	外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-10	外面に線刻あり。
76	円筒埴輪								外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	淡褐色	砂粒を多く含む	良好	Ⅱ次	T-11	外面に線刻あり。
77	円筒埴輪							半円?	外面粗いたテハケ一次調整、 内面ハケ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-10	外面に銀杏葉線刻あり。
78	円筒埴輪							半円	外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-11	外面に線刻あり。
79	円筒埴輪								外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	淡褐色	砂粒を含む	良好	Ⅱ次	T-15	外面に線刻あり。
80	円筒埴輪							半円?	外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	褐色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-15	外面に線刻あり。
81	円筒埴輪								外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	乳白色	砂粒やや多く含む	良好	Ⅱ次	T-15	外面に線刻あり。
82	朝顔形埴輪							半円?	外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	赤褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-15	外面に銀杏葉線刻あり
83	朝顔形埴輪								外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	乳白色	砂粒	良好	Ⅱ次	T-9	外面に線刻あり。
84	円筒埴輪				1.5		A	半円	外面タテハケ一次調整、 内面ハケ	淡褐色	砂粒・赤色スコリア粒	良好	Ⅱ次	T-16	外面に線刻あり。
85	円筒埴輪								外面粗いたテハケ一次調整、 内面ハケ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅲ次	T-20	外面に線刻あり。
86	円筒埴輪							半円?	外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	乳白色	砂粒	良好	Ⅲ次	T-20	外面に銀杏葉線刻あり
87	円筒埴輪								外面タテハケ一次調整、 内面ナデ	赤褐色	砂粒	良好	Ⅲ次	T-20	外面に線刻あり。
88	円筒埴輪				1.1		A		外面粗いたテハケ一次調整、 内面ナデ	淡褐色	砂粒	良好	Ⅲ次	T-22	外面に線刻あり。

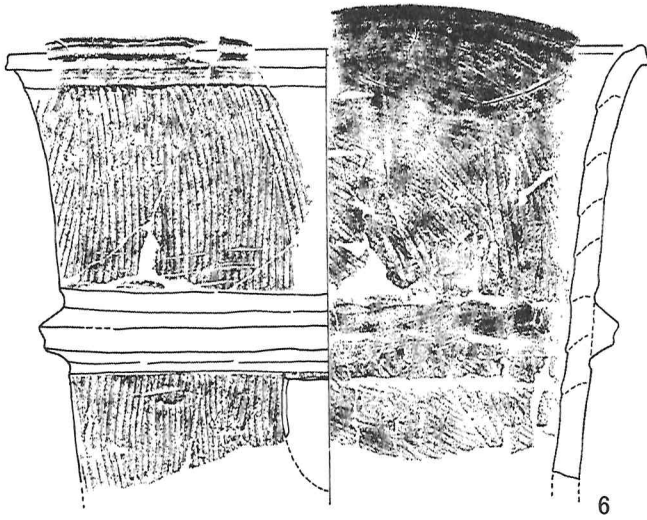
第5表 埴輪観察表(3)



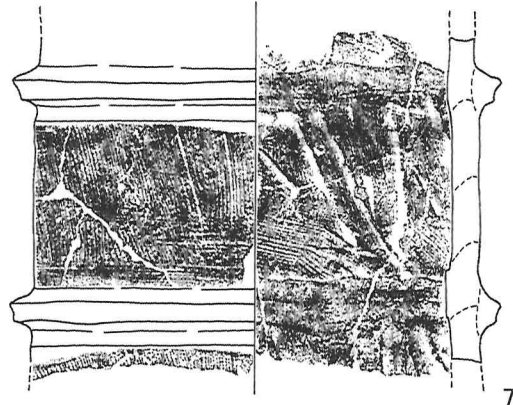
第36図 出土埴輪実測図(1)



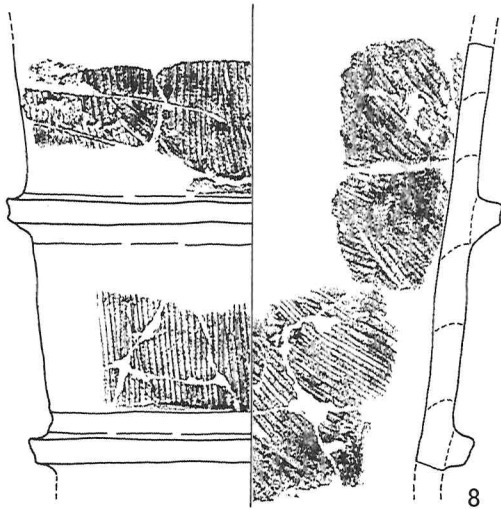
第37图 出土埴輪実測図(2)



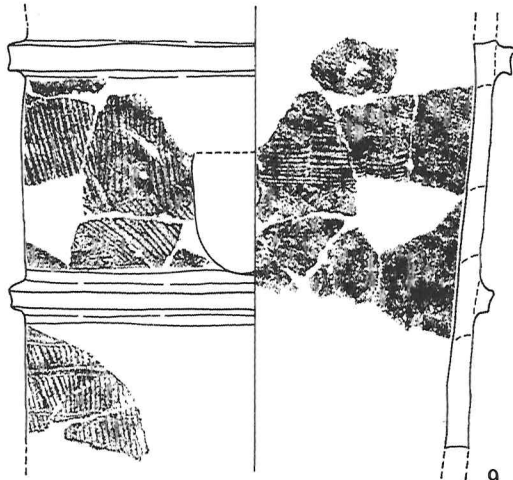
6



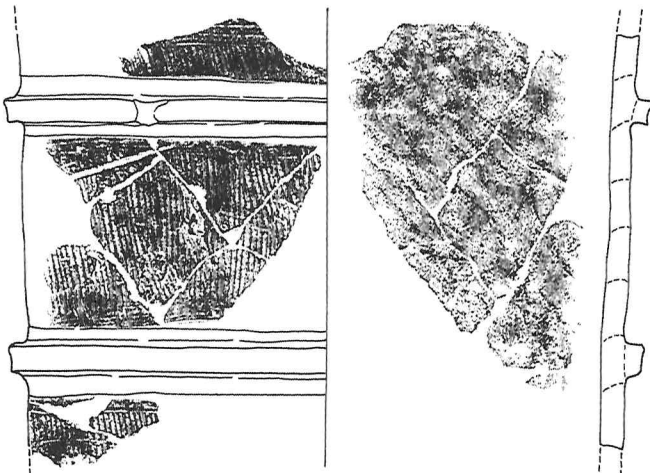
7



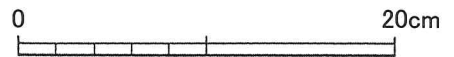
8



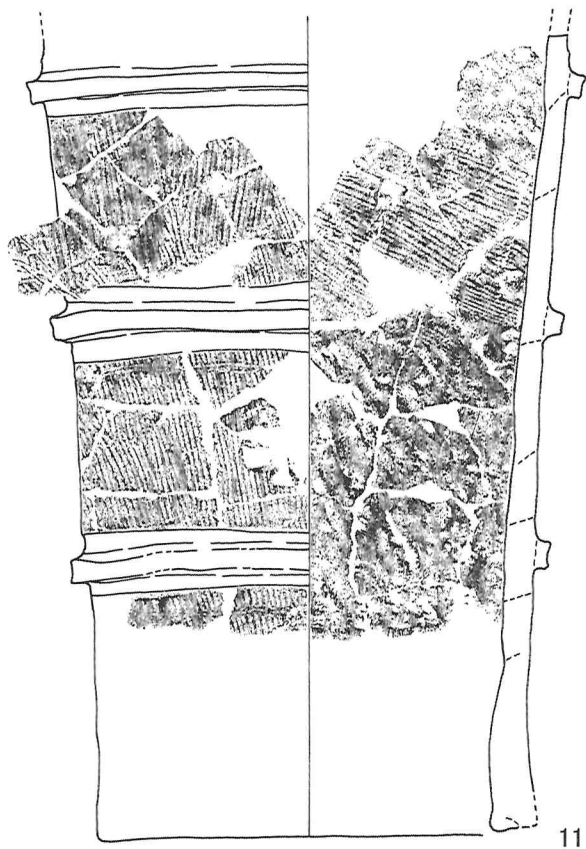
9



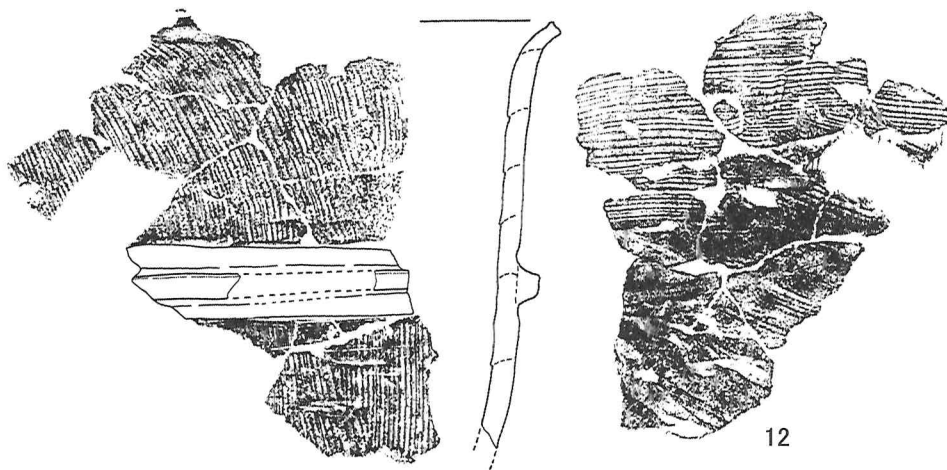
10



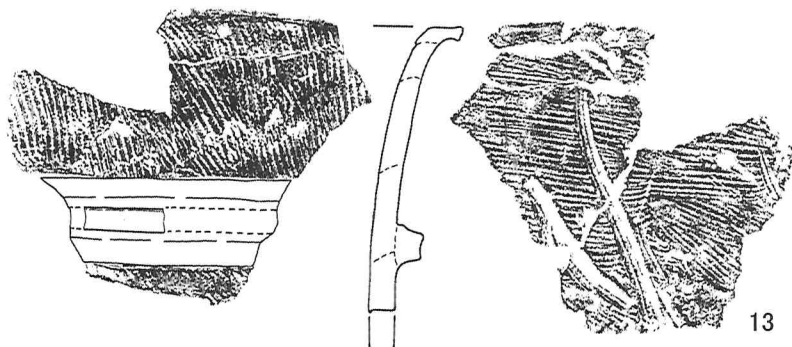
第38図 出土埴輪実測図(3)



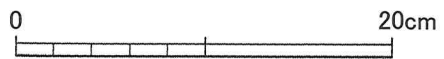
11



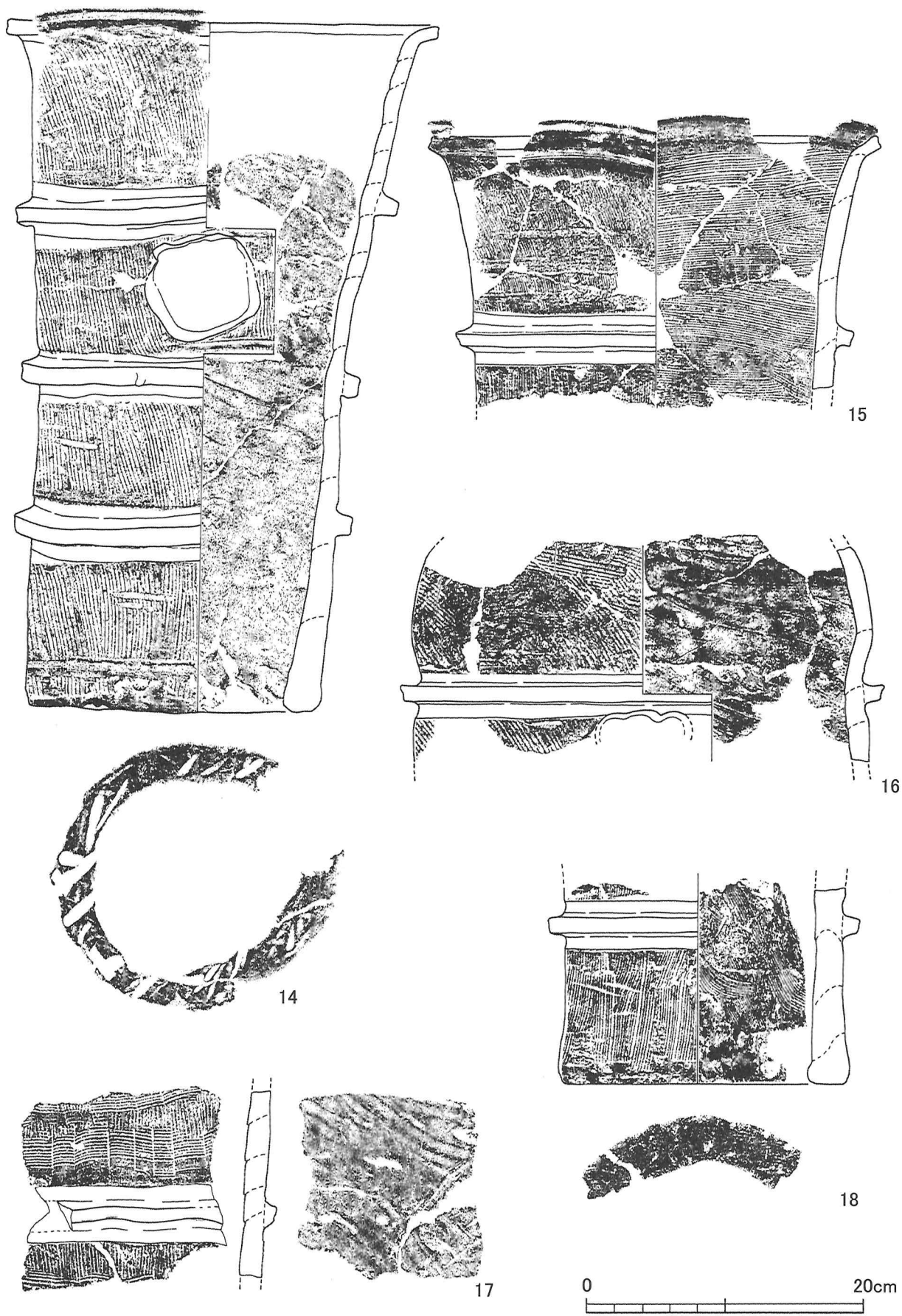
12



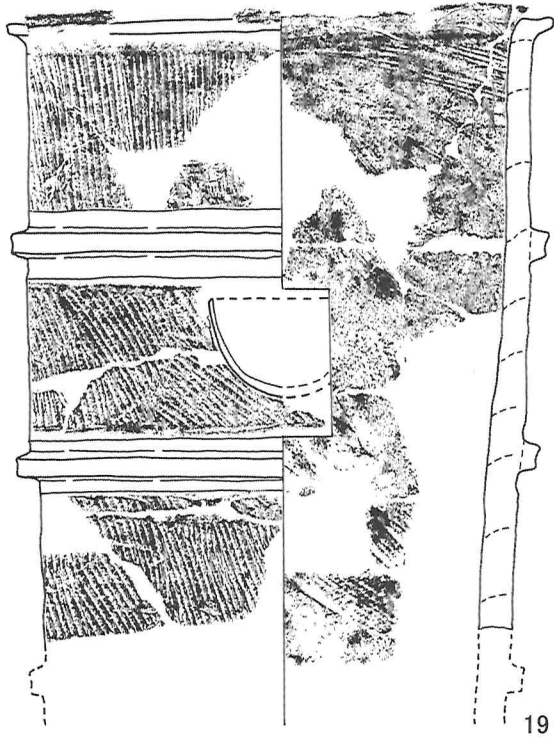
13



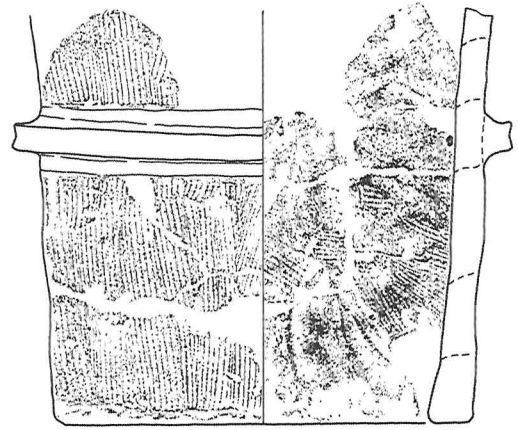
第39図 出土埴輪実測図(4)



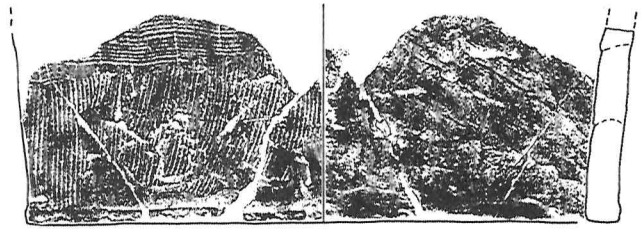
第40図 出土埴輪実測図 (5)



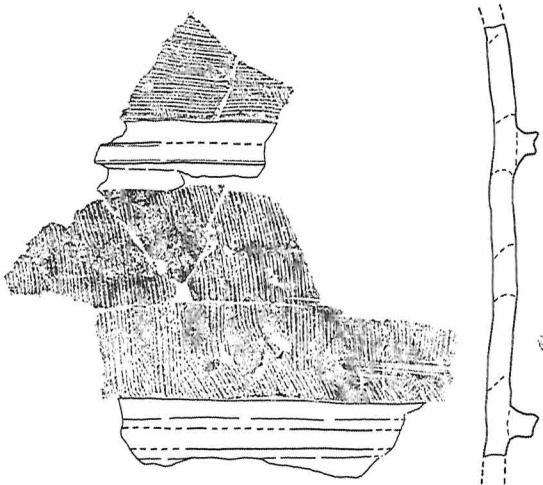
19



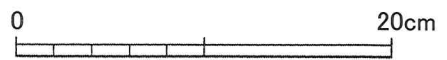
20



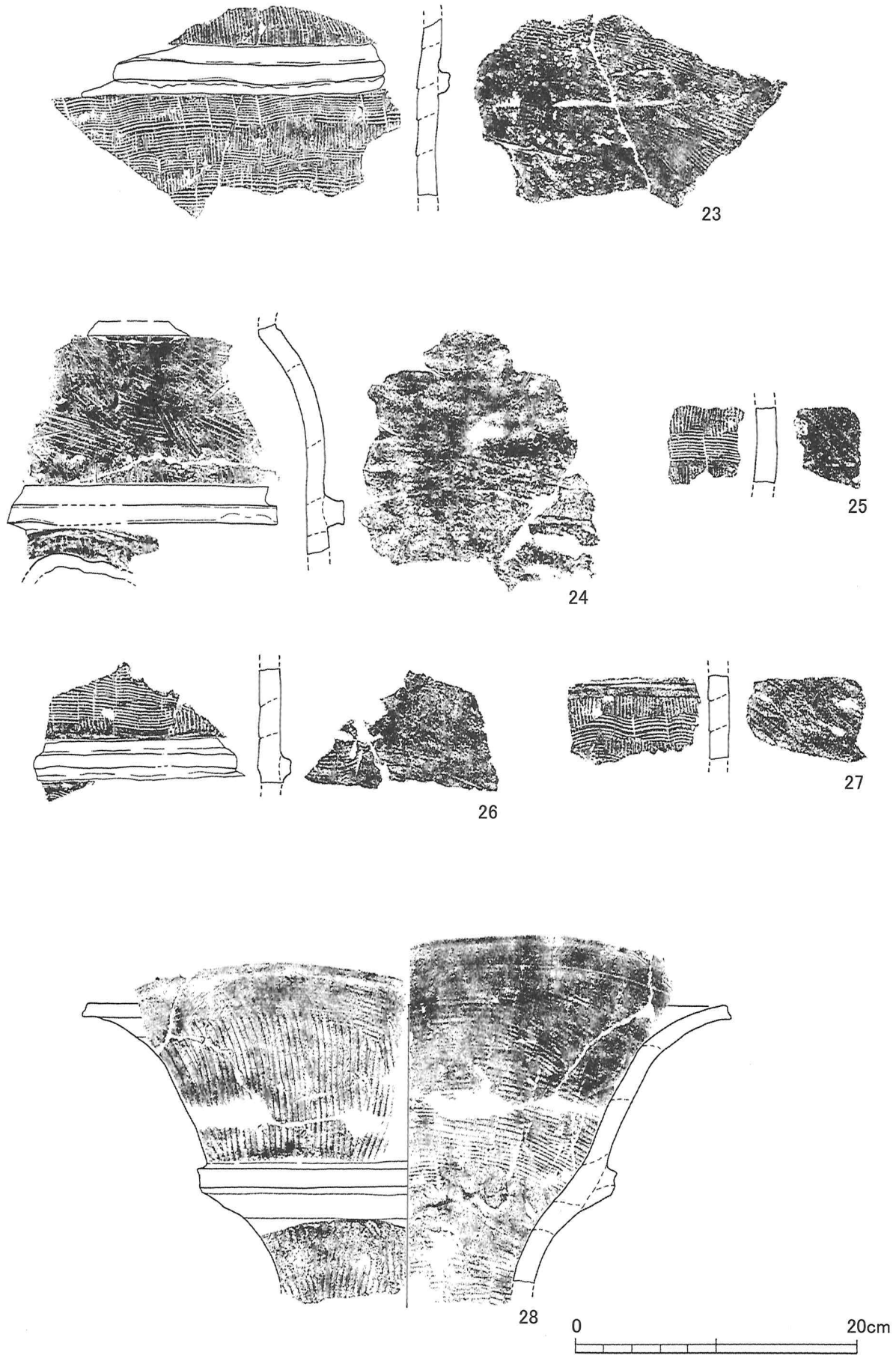
21



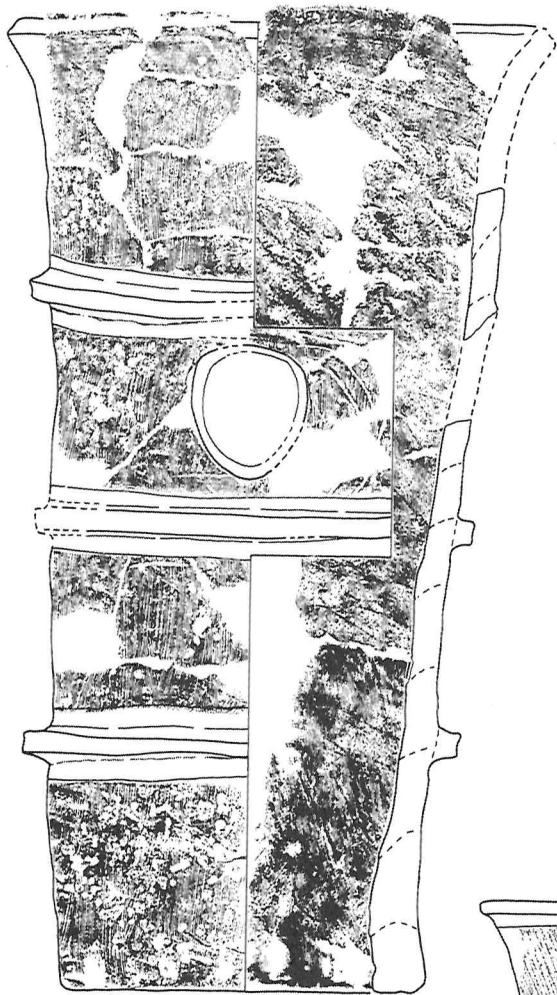
22



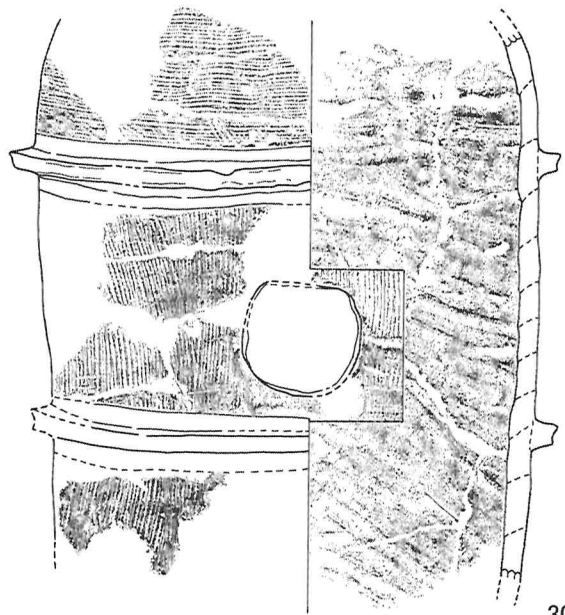
第41図 出土埴輪実測図(6)



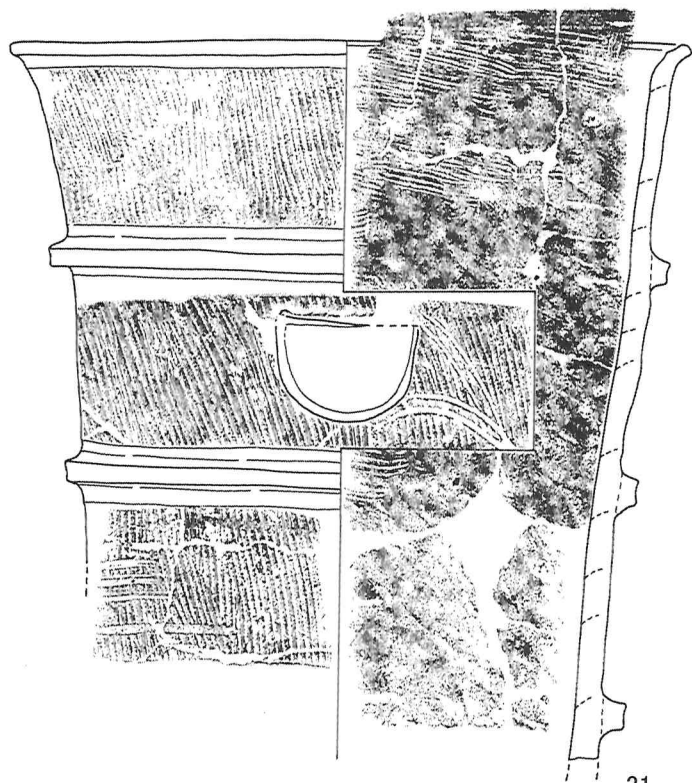
第42図 出土埴輪実測図（7）



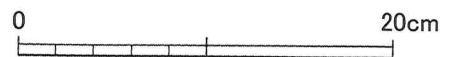
29



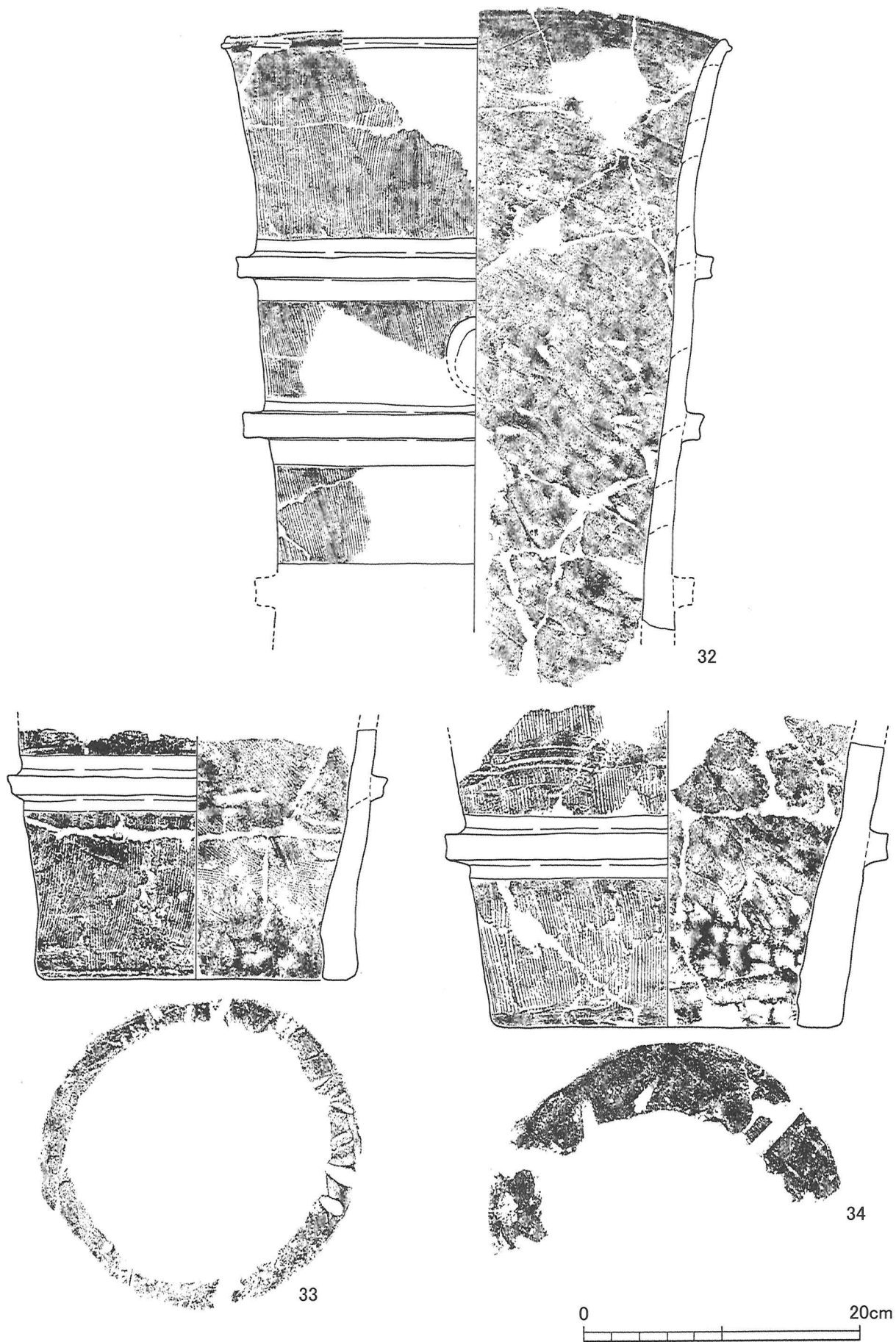
30



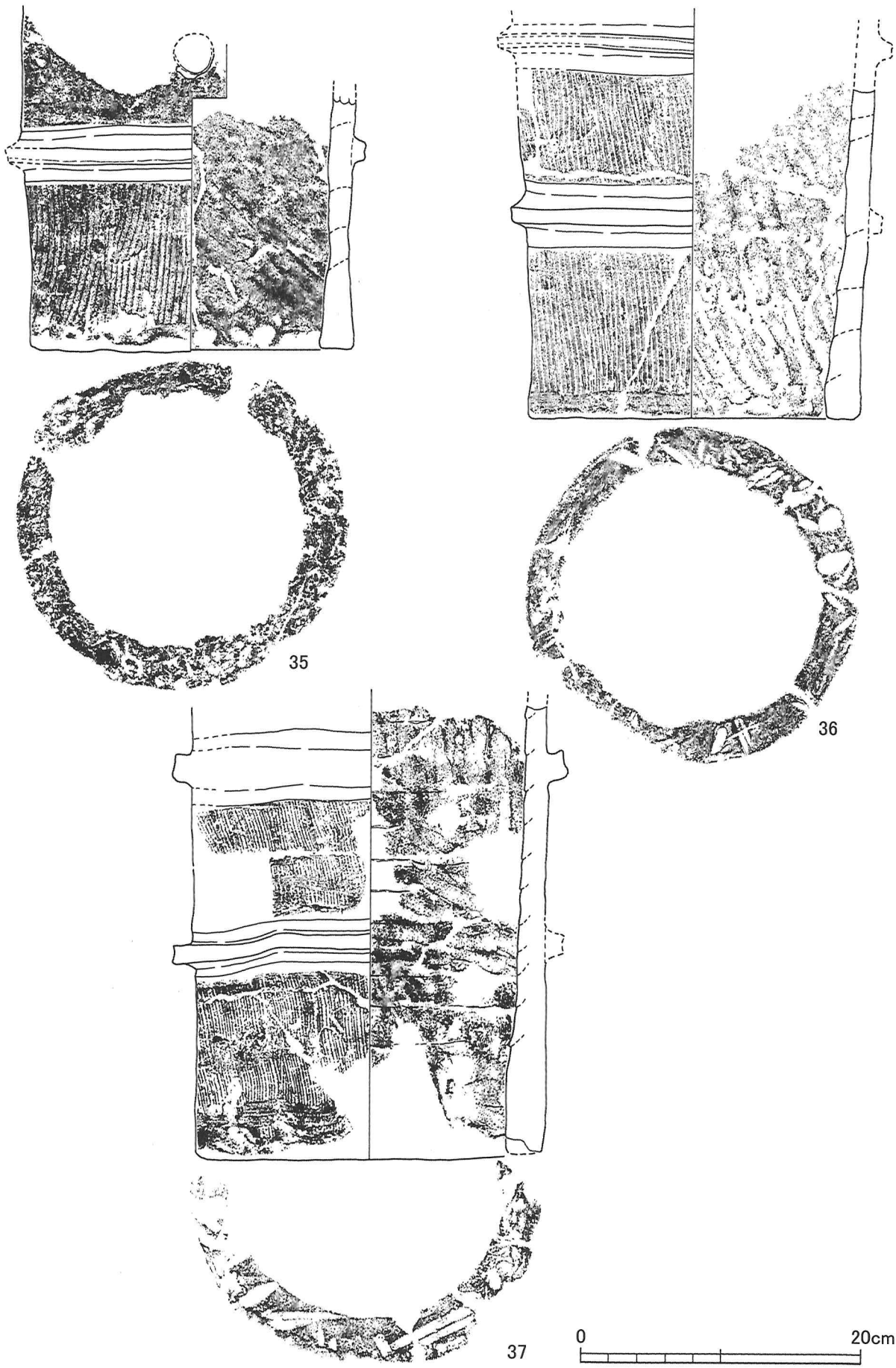
31



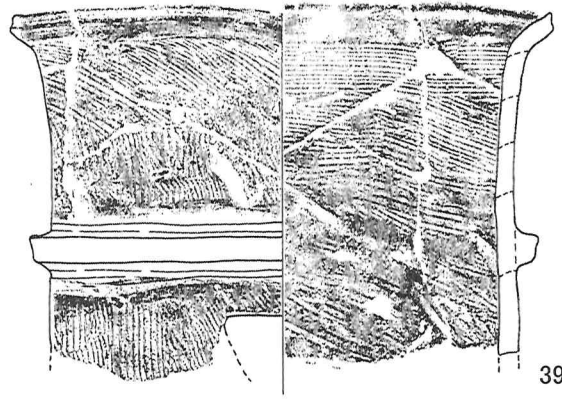
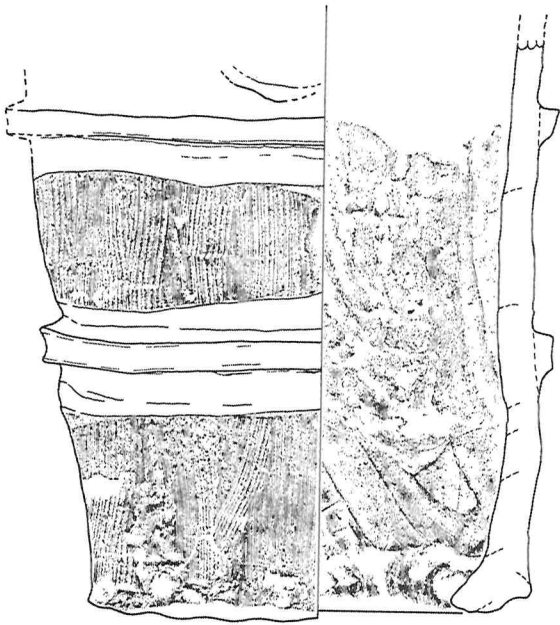
第43図 出土埴輪実測図(8)



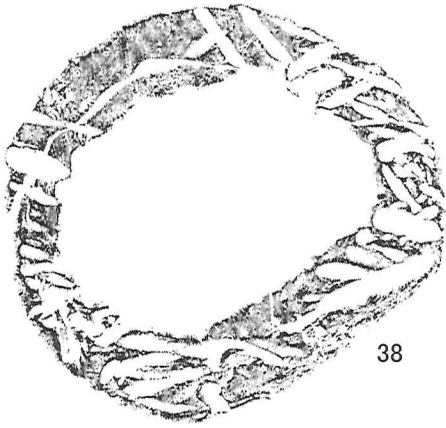
第44図 出土埴輪実測図(9)



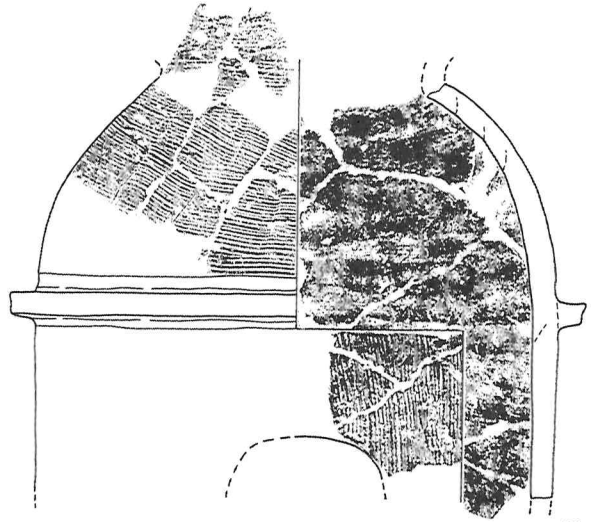
第45図 出土埴輪実測図 (10)



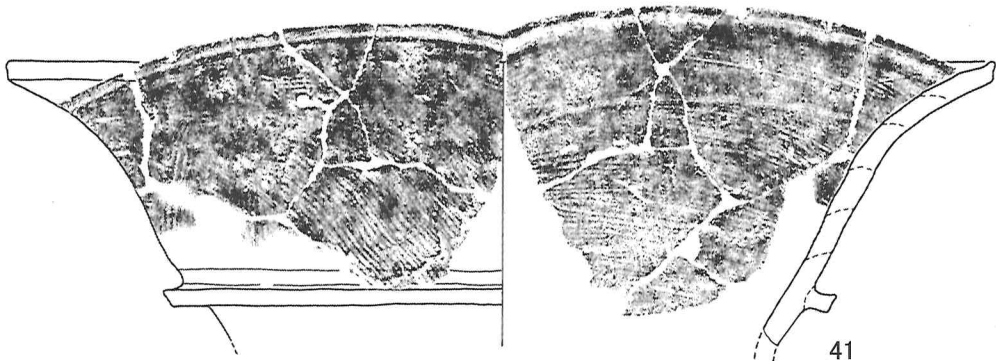
39



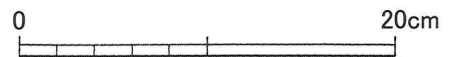
38



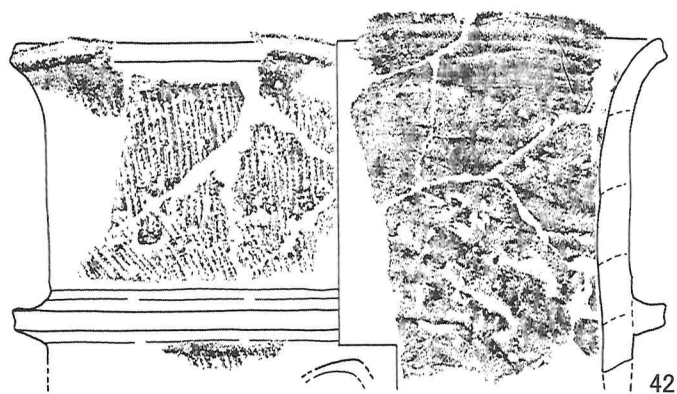
40



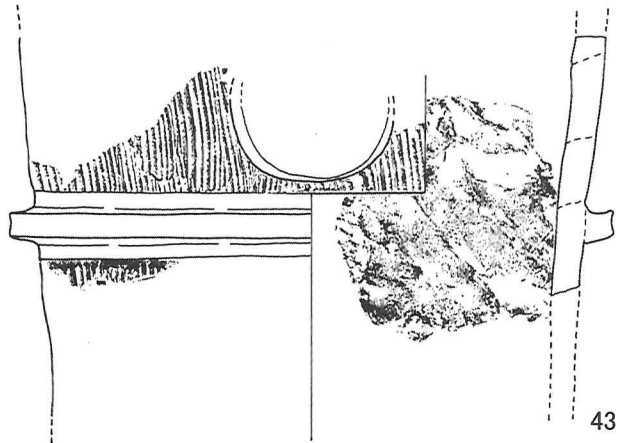
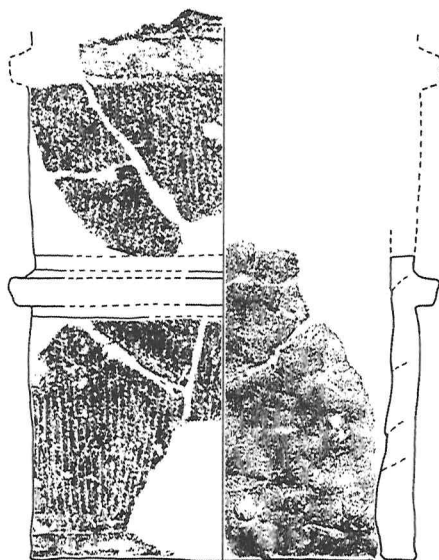
41



第46図 出土埴輪実測図 (11)



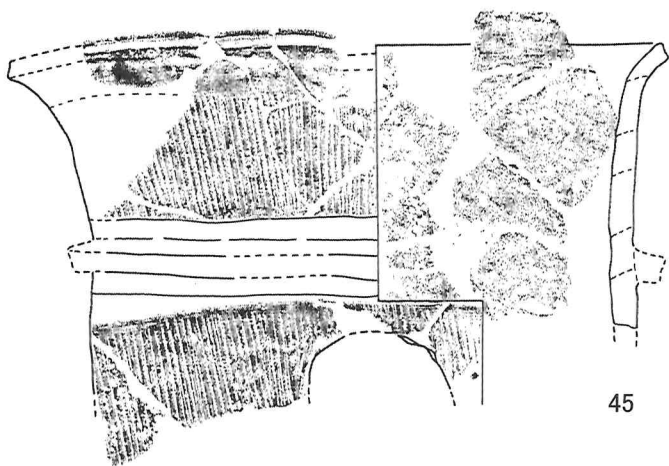
42



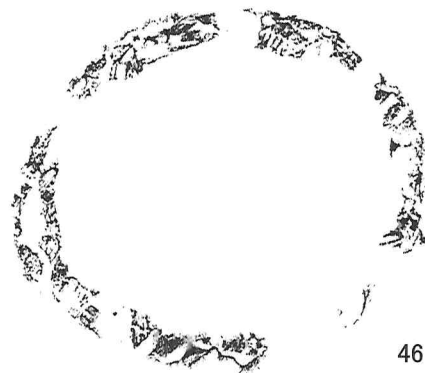
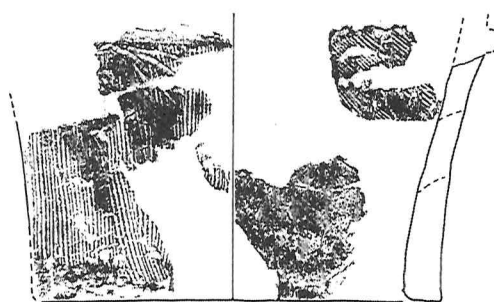
43



44



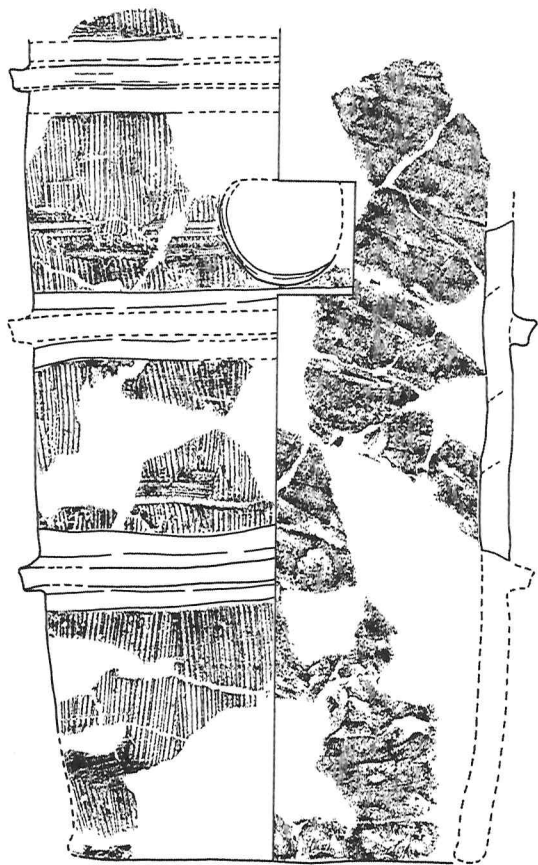
45



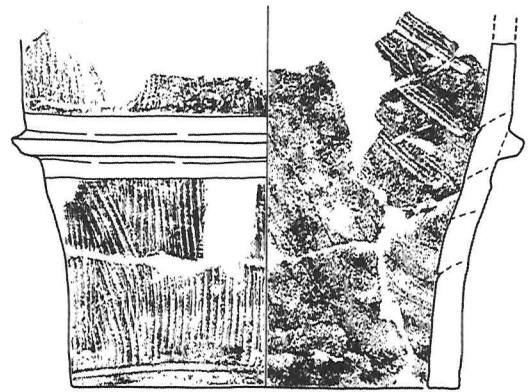
46

0 20cm

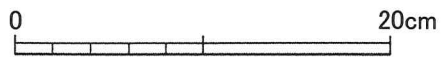
第47図 出土埴輪実測図 (12)



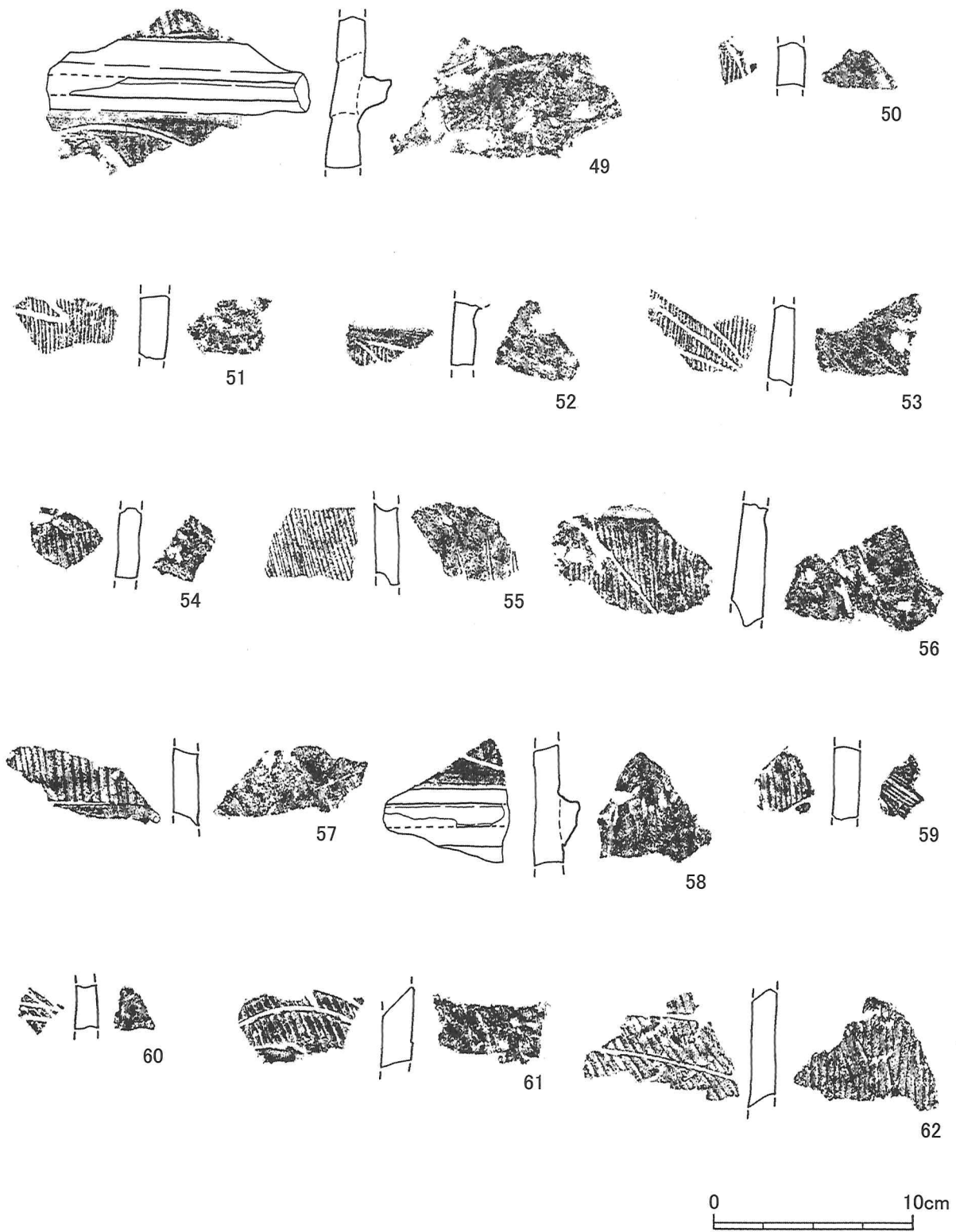
47



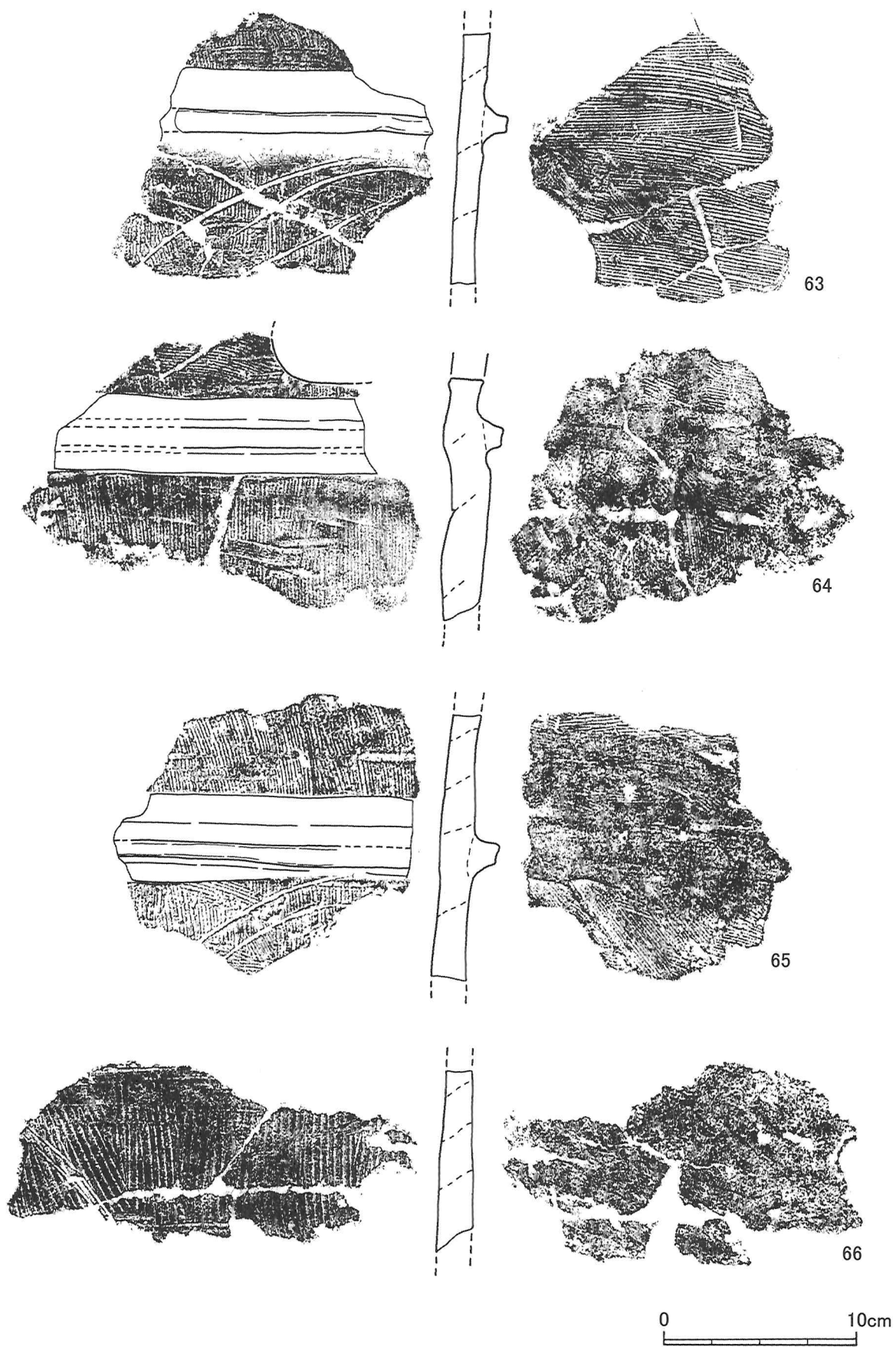
48



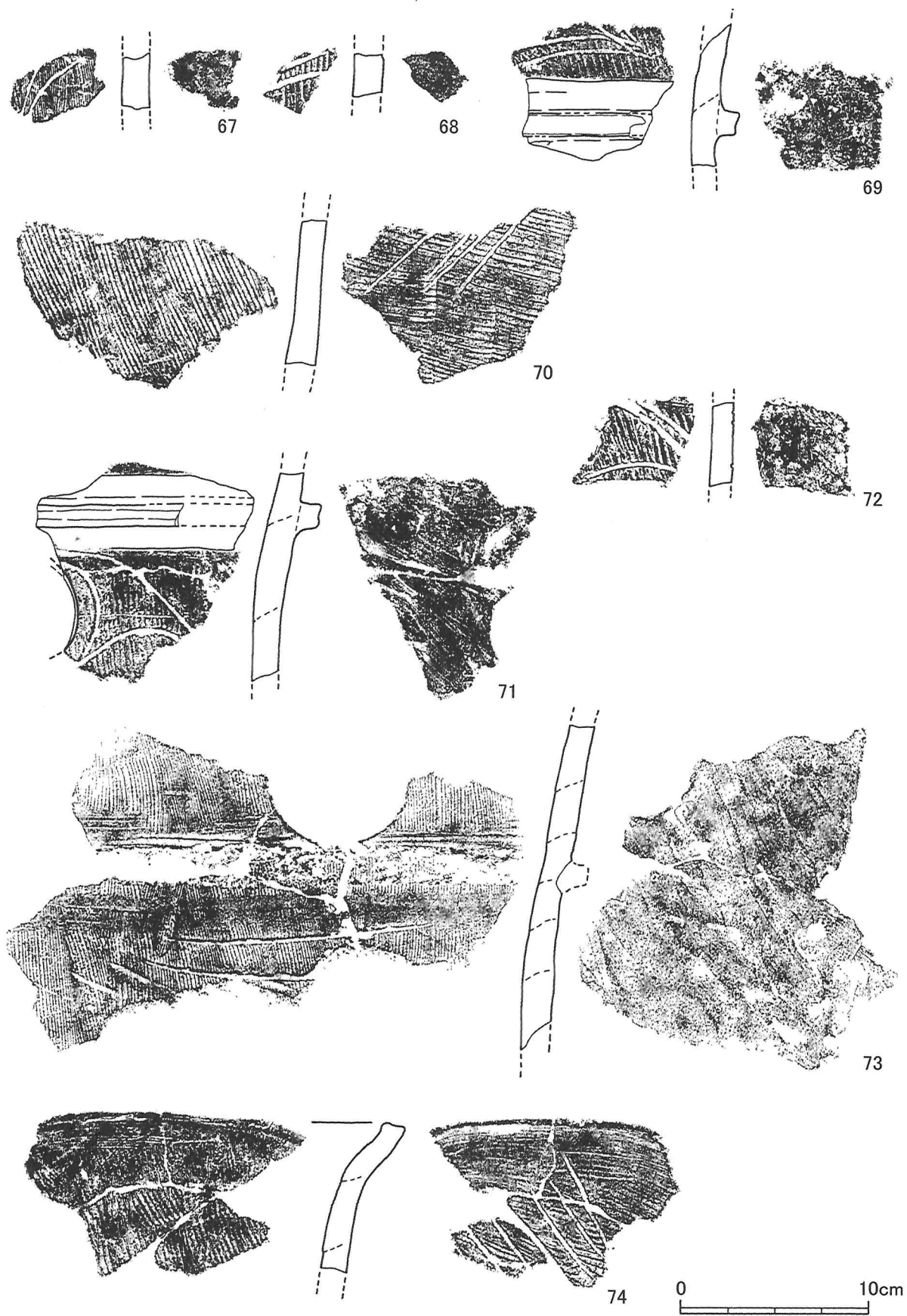
第48图 出土埴輪実測図 (13)



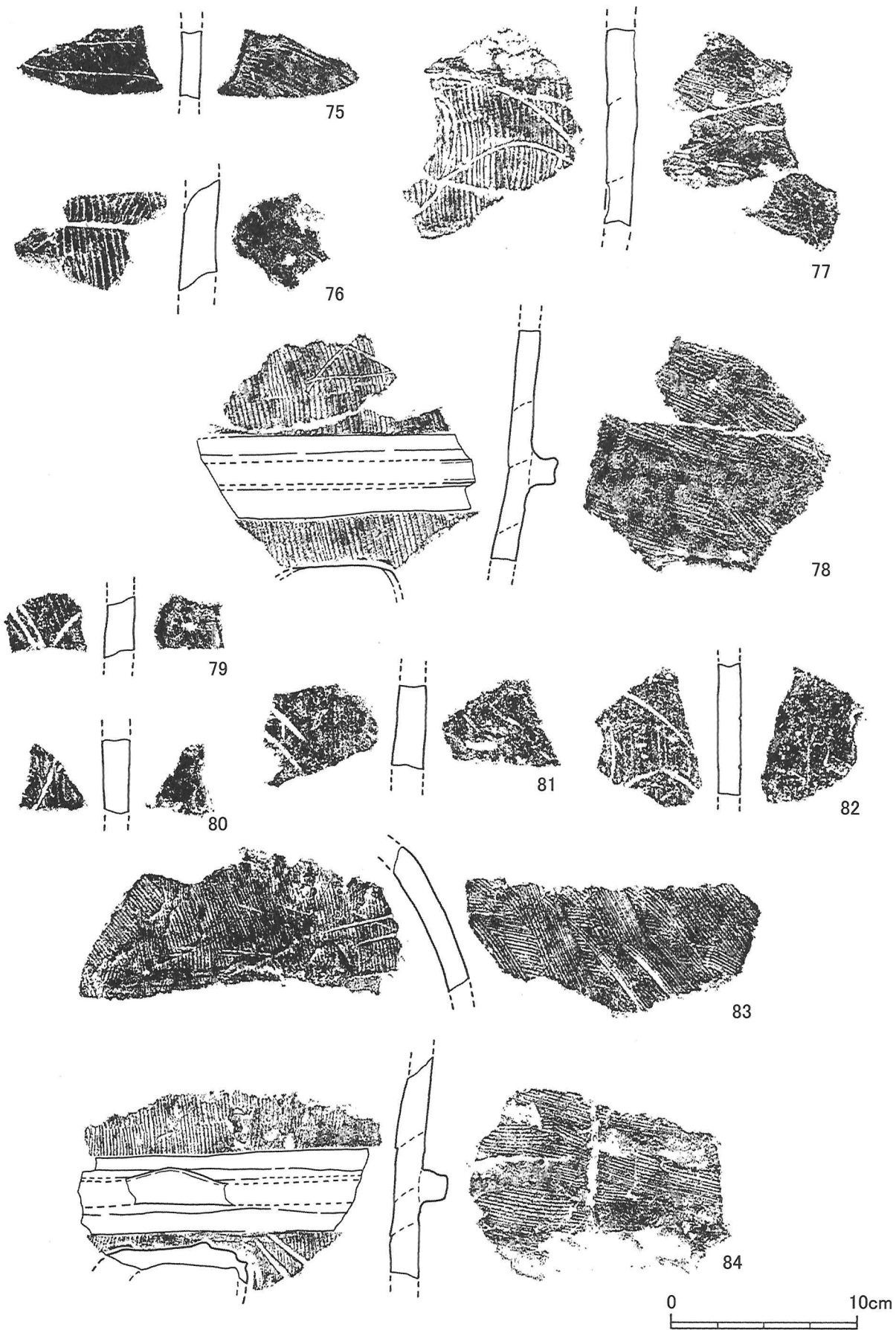
第49図 出土埴輪実測図 (14)



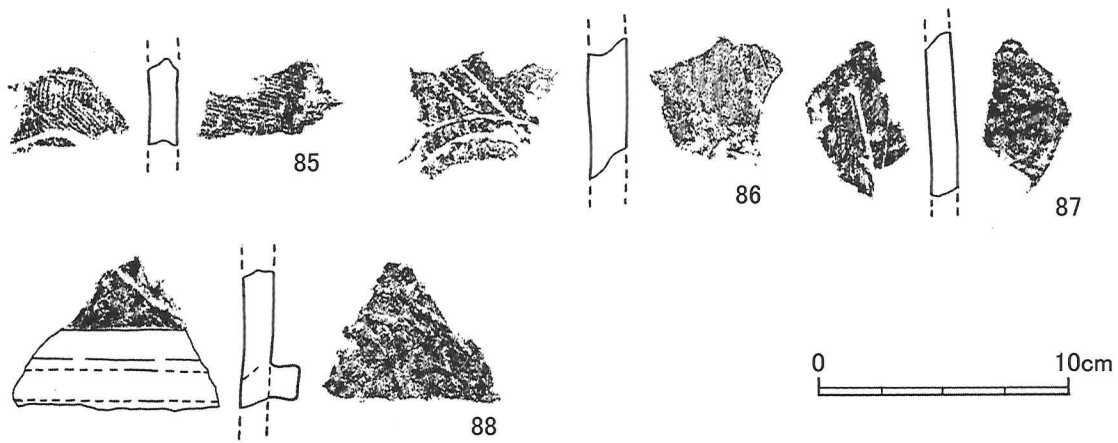
第50図 出土埴輪実測図 (15)



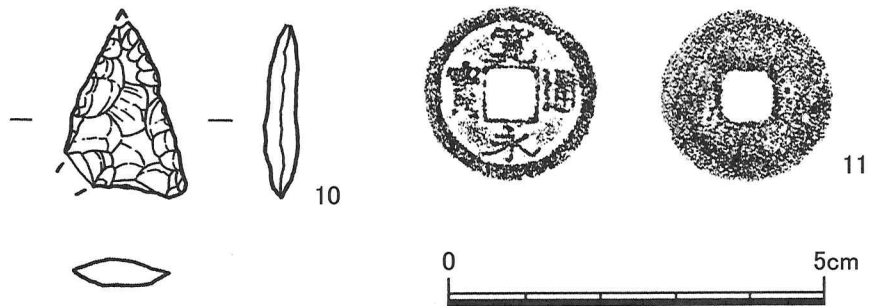
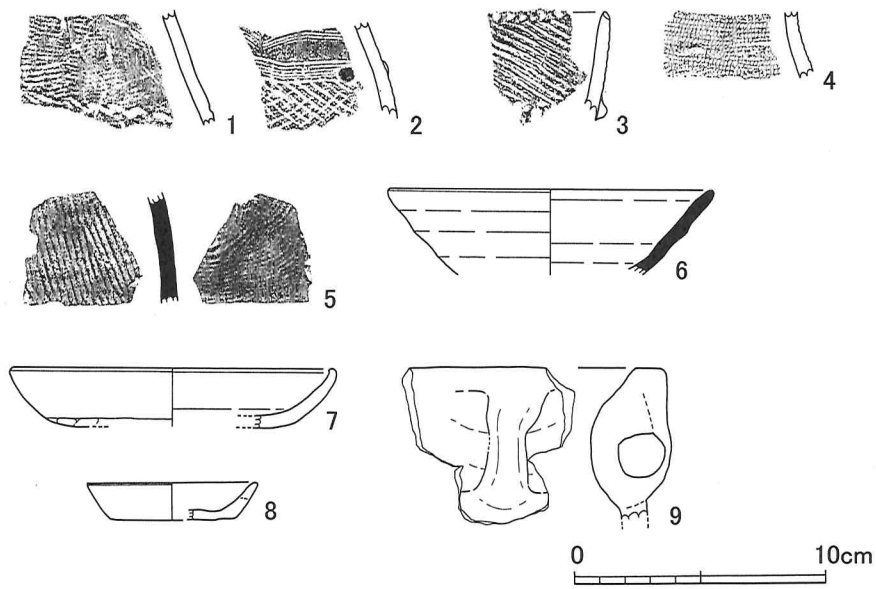
第51图 出土埴輪実測图 (16)



第52図 出土埴輪実測図 (17)



第53図 出土埴輪実測図 (18)



第54図 その他の出土遺物

Ⅲ お わ り に

(1) 墳丘について

調査の結果、墳丘は三段築成で各斜面に葺石をもつことが判明した。後円部第一段平坦面はT-19、T-20で確認され、その標高は79.4～79.5mである。この標高は測量調査により得られた前方部の北側造り出し部の標高とほぼ一致する。第一段平坦面の幅は約1.5mの幅であったと想定される。これは、T-12とT-21で第一段斜面の傾斜角が15度であることから、周濠立ち上がりの位置関係と角度から類推したものである。第二段平坦面は、後円部側ではT-1～T-3、T-19・T-20で確認され、標高は81～81.5mで、幅は2.5～3mである。第二段斜面の傾斜角は25～30度でその高さは1.5mである。一方、前方部の第二段平坦面はT-9とT-10で確認され、その標高は82～82.5mで、後円部第二段平坦面標高と1mの食い違いが見られる。これは、大阪府仲ツ山古墳や三重県御墓山古墳のように平坦面が後円部から前方部にかけて傾斜をもつ例と同じものと考えられる。

葺石は各斜面に葺かれ、T-1～T-3で見られるように基底部に大きめの河原石を横長に据え、縦方向に区画の石列を並べ、それを目安に河原石を貼っていく状況が確認できた。

基本的に平坦面には石を葺かないが、T-9、T-10、T-19、T-20で粘土や小砂利を敷いた状況が見られ、意図的に小砂利等を敷いている可能性も考えられる。

埴輪は、その平坦面の端部に樹立している状況が、T-10、T-19、T-20で確認できた。

T-10は前方部第二段平坦面端部で埴輪の基底部が樹立状態で見つかり、セクションの観察から、平坦面端部に埴輪を置き、ローム混じりの土で埴輪の周囲を盛土しおさえている状況が確認できた。また、T-19、T-20でも後円部第二段平坦面の端部より埴輪がまとまって出土していることから、埴輪の樹立位置は平坦面の端部であったと考えられる。尚、何れのトレンチでも掘り方は確認されず斜面際に置かれていたことを考えると、転落しやすい状態であったと想定され、他のトレンチで良好な樹立状態が確認できない要因と思われる。この他に、墳丘測量の結果、後円部墳頂周縁部で埴輪が散在している状況が確認でき、第二段平坦面と同様に墳頂部平坦面の周縁部にも埴輪が置かれていたと想定される。

(2) 周濠について

笹塚古墳の周濠は、二重に廻っていることが確認できた。内濠の規模はT-4とT-5間で33m、T-21とT-22間で34mと、非常に幅が広い。内濠底の標高は78.0m前後とほぼ一定しており、前方部西側中堤付近が粘土層の底面である以外は砂礫層の周濠底である。

外濠はT-7で9m、T-24で確認された外濠内側立ち上がりと現在の水路の状況から考えるとT-7同様9m程の濠幅が想定される。外濠底の標高はT-5とT-7で77.5m、T-24で78.1m、T-15とT-28で77.9m、T-25で77.8mと、前方部側は内濠とほぼ同じ高さで、後円部南側は50cmほど深く掘られている。

周濠底より10cmほど高い位置で榛名山を噴源とする榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)もしくは(Hr-FP)が確認された(注1)ほか、周濠中層付近で浅間山を噴源とするAs-B(浅間B軽石層)が確認できた。近隣の大型前方後円墳の火山灰の堆積状況については、太田天神山古墳の平成6年度外堀調査で、底面から約2cmの高さで榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)が、約10cmの高さでAs-B(浅間B軽石層)が確認されている(金澤1995)。また、高崎市保渡田八幡塚古墳の内堀基底面より5～20cmの高さで榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)が

確認されている。因みにA s -B（浅間B軽石層）は約40cmの高さで確認されている（若狭ほか2000）。太田天神山古墳は5世紀前半に位置付けられる古墳であることから考えると、榛名二ツ岳火山灰（Hr-FA）降下年代が6世紀初頭と考えても半世紀ほどの開きがあり、このような状況をみると、本墳も含めて大型古墳の周濠の埋まり方は、中小規模の古墳に比べて遅いのか、もしくはある一定期間は堀ざらい等の維持管理が行われていた可能性も考える必要があるかもしれない。

中堤の幅はT-5で確認され、上幅7m、下幅11.3m、上面の標高78.7mである。後円部側の中堤の標高はT-7・T-22・T-23で78.8m、前方部側のT-15・T-24で78.5mを測る。また、T-5では多量の円筒埴輪が出土し集中して埴輪が樹立されていた状況が想定されるが、その他のトレンチでは確認できず、埴輪は置かれていたと考えられるが、間隔を開けての配置であったものと思われる。

前方部外濠の外側のT-25・T-26・T-28では10～20cmの盛土と小石を敷いている状況が確認でき、外堤があったと思われる。この外堤部を含めた総長は210mを越え、県内最大級の兆域をもつ古墳であることが判明した。またT-28ではほぼ墳丘の主軸と併行する集石、遺構が確認できた。この遺構の性格を確認するために断ち割り調査等を行ったが埋葬状況は確認できず性格不明の遺構であるが、その平面形をみると舟形を意識した配列のようにも見える。

県内の大型前方後円墳を比較すると本墳は、墳丘規模では、県内4番目となるものの、総長を見ると県内最大級であり、前方後円墳、三段築成、葺石、埴輪、二重周濠の畿内的な様相をもつ県内では最初の古墳として注目される。

（3）埴輪について

埴輪は円筒埴輪と朝顔形埴輪が確認された。円筒埴輪は三条四段のもので、口縁部形態はⅠ類（口縁部が外側に屈曲しないもの）とⅡ類（口縁部が外側に強く屈曲し、端部を面取りするもの）の2種類があり、全体的なプロポーシオンも寸胴形のものと同様に口縁部側がやや開くタイプの2種類が見られる。突帯はA～E類の5種類がある。それぞれの比率はA類33%、B類18%、C類8%、D類31%、E類10%となり、A類とD類の割合が多く、突帯の突出度の大きいものが多い。透孔は三段目に穿たれ、方形が崩れたような隅丸方形のもののほか、円形、半円形が見られ、量的には半円形のものが多い。この透孔の脇に線刻が見られるものがあり、その多くは「銀杏葉線刻」と呼ばれるものである。米澤雅美氏の線刻の分類のb・d・e類が見られる（米澤2006）が、本墳では、この分類に無いものも見られた。小野本敦氏は「銀杏葉形線刻は畿内系の工人のみが用いた線刻」と位置付け、その後「半円形穿孔が普遍的に見られる上毛野の工人に影響があった」とし、「半円形穿孔+銀杏葉線刻」の埴輪の出現が畿内系工人の影響を受けた在地系工人の製作したものと指摘している（小野本2005）。

外面調整はタテハケ一次調整のものとB b種ヨコハケのものが見られる。尚、笹塚古墳のB b種ヨコハケはハケ工具原体の幅が狭くやや波打っているが、塚山古墳のものはハケ工具原体の幅が広くなり波打たないという違いが見られる。前者は一瀬和夫氏のB b-1種、後者はB b-2種（一瀬2009）と考えられ、B種ヨコハケの変遷過程からすると笹塚古墳のものがやや先行すると思われる。内面調整は、ハケ後ナデもしくはナデ調整のものが多い。

ここで、笹塚古墳の北西5kmに位置する塚山古墳群の埴輪と比較してみる。第7表は笹塚古墳と塚山古墳出土埴輪の寸法等を一覧にしたものである。ここで、特に各段の寸法について見てみると(注2)、塚山古墳の埴輪の1段目は13~14.5cm、2段目が11.5~14cm、3段目が11~12cm、口縁部が10~14.5cmである。表には示さなかったが、塚山西古墳の1段目は15cm、2段目が11.5~13cm、3段目が10~13cm、口縁部が13.5~16cm、塚山南古墳の1段目は15~17.5cm、2段目が9.5~11.5cm、3段目が8.5~11.5cm、口縁部が15.5~19.5cmとなる。塚山古墳群の変遷については、出土遺物や古墳の配置関係などから塚山古墳→塚山西古墳→塚山南古墳の順である。よって埴輪の変遷についても口縁部の伸長化が以前から指摘されているが、さらに付け加えるならば1段目についても伸長化の傾向が見られ、その分2段目、3段目の短縮化する様子が窺える。笹塚古墳出土の埴輪は1段目が11.2~14.5cm、2段目が11~14.5cm、3段目が12~13cm、口縁部が11.5~15cmと塚山古墳とほぼ同じ数値が見られる。

笹塚古墳と塚山古墳の埴輪を比較してみると、非常に似た様相が見られるが、微細なところで見ると、笹塚古墳特有の银杏葉線刻があること、内面指抑えが塚山古墳に比べ少ないこと、Bb種に違いがみられることなどが挙げられる。以前、笹塚古墳で表採された埴輪を検討された秋元陽光氏は、「特殊器台の系譜をもつ資料を伴い、また、埴輪自体の製作の上でも丁寧な笹塚古墳の埴輪は塚山古墳の埴輪に先行する」と指摘し、「川西編年Ⅲ期の新しい段階からⅣ期でも古い段階」に位置付けている(秋元1998)。

(4) 鶴舞塚古墳との関係

笹塚古墳に隣接して鶴舞塚古墳(直径53m)と糠塚古墳(直径約20m)が築かれている。

笹塚古墳と鶴舞塚古墳の関係は、笹塚古墳の二重周濠が鶴舞塚古墳の周濠により途切れている状況が確認できた。笹塚古墳の内濠底面の標高がほとんどのトレンチで78.0mであることからほぼ平坦に掘られていると推定されるのに対し、鶴舞塚古墳の周濠底の標高は77.3~77.5mと笹塚古墳より深く掘られている。また、鶴舞塚古墳の第一段平坦面と笹塚古墳の第一段平坦面の標高は79.0m前後とほぼ同じレベルである。

糠塚古墳は笹塚古墳の北東側に位置し、今回の調査による笹塚古墳の外濠ラインから推定すると、両古墳は隣接していると思われる。

このように古墳の周濠が共有される例は、岡山県赤磐市両宮山古墳(墳長194m・二重周濠)と和田茶臼山古墳(墳長85m・帆立貝形)や大阪府堺市石津丘古墳(墳長365m・二重周濠)と寺山南山古墳(一辺41.5m・方墳)、宮崎県西都原市女狭穂塚古墳(墳長176m・二重周濠)と西都原171号墳(一辺25m・方墳)、五色塚古墳(墳長194m・前方後円墳)と小壺古墳(直径67m・円墳)などがある。基本的には主墳に対し半分以下の規模の古墳で、主墳と同時期ないしはやや遅れて築造されている例が多いようである(宇垣2006)。なお、五色塚古墳と小壺古墳の関係については、同時に築造された可能性が指摘されている(丸山2012)。一方誉田御廟山古墳(墳長420m・前方後円墳)と二ツ塚古墳(墳長110m・前方後円墳)の関係は、二ツ塚古墳が先行し、誉田御廟山古墳の内濠と内堤が、この古墳を避けるように大きく歪み、外濠は同古墳手前で途切れる。外濠が途切れる状況は、笹塚古墳と鶴舞塚古墳と近似するが、両者の規模の差は大きく、一瀬和夫氏は、二ツ塚古墳は「在地系」で、「大王墓系列がその隙間をぬって築造」(一瀬2011)したとする考え方からすると、笹塚古墳と鶴舞塚古墳が一列とする関係とは違っている。

なお、覆土中の火山灰の関係で見ると、笹塚古墳と鶴舞塚古墳の両者とも周濠底から約10cmの位置で榛名二ツ岳火山灰が確認できた。両者の切り合い関係を直接確認できるトレンチを設定することはできなかったが、火山灰の入り方などを考えるとほぼ同時期に築造された可能性を指摘しておく。

(注1) 火山灰の分析をパリノ・サーヴェイ(株)に依頼して分析を行った結果、Hr-FPとの結果が出たが、周辺の東谷・中島地区の大規模発掘調査での同様の火山灰についてはHr-FAの分析結果が出ている。両者は同じ榛名二ツ岳噴下の火山灰であることから区別がつきにくいとの指摘がある。

(注2) 各段の寸法は、各突帯の中心を境とした。また、基底部を1段目とし、順にその上に2段目、3段目、口縁部と呼称する。

(参考文献)

秋元陽光・今平利幸1998「宇都宮市笹塚古墳出土の遺物」『峰考古』第13号宇都宮大学考古学研究会

一瀬和夫2009『古墳時代のシンボル 仁徳陵古墳』新泉社

一瀬和夫2011『巨大古墳の出現 仁徳朝の全盛』文英堂

宇垣匡雅2006『両宮山古墳』同成社

小野本敦2005「古墳時代中期における埴輪製作集団の地域間交流 ―線刻の検討―」『遡航』第23号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会

金澤誠1995「Ⅲ.天神山古墳外堀」『市内遺跡Ⅺ』太田市教育委員会

丸山潔2012「史跡五色塚古墳」『大型古墳からみた播磨』第12回播磨考古学研究集会実行委員会

米澤雅美2006「塚山古墳群の埴輪製作集団 ―塚山古墳・塚山西古墳の埴輪同工品分析―」埴輪研究会誌第10号 埴輪研究会

若狭徹ほか2000『保渡田八幡塚古墳』群馬町教育委員会

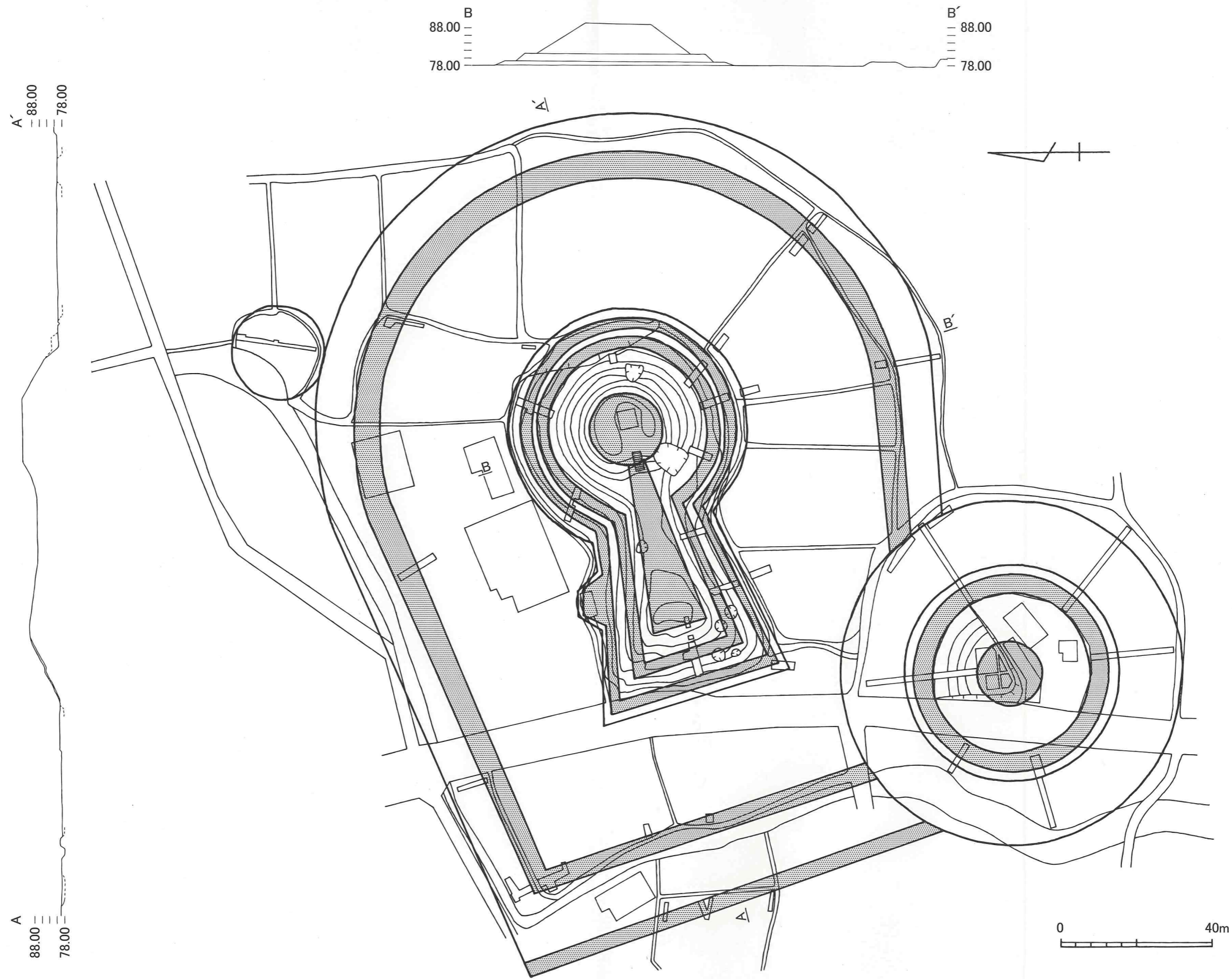
No.	古墳名	所在地	墳形	墳長(m)	形態	透孔	線刻タイプ
1	上田浅間塚古墳	壬生町	円墳		二条三段	円	A
2	笹塚古墳	宇都宮市	前方後円墳	105	三条四段	半円	A?~D
3	塚山古墳	宇都宮市	前方後円墳	98	三条四段	半円	A~D
4	塚山西古墳	宇都宮市	前方後円墳	63	三条四段	円	B
5	塚山南古墳	宇都宮市	前方後円墳	58	三条四段	円	B・F
6	塚山5号墳	宇都宮市	円墳	9	三条四段	半円	B
7	塚山5号埴輪棺	宇都宮市	埴輪棺		三条四段	半円	B・C
8	八龍塚古墳	上三川町	前方後円墳	40	二条三段		B・F
9	磯岡北古墳群1号埴輪棺	宇都宮市	埴輪棺		三条四段	半円	B
10	本村2号墳	宇都宮市	円墳	24	二条三段	円	B・D
					朝顔形	円	B
11	本村1号埴輪棺	宇都宮市	埴輪棺		二条三段	半円・円	B・D
12	本村2号埴輪棺	宇都宮市	埴輪棺		二条三段	半円	B・C
					朝顔形	円	B
13	本村3号埴輪棺	宇都宮市	埴輪棺		二条三段	半円・円	B・D
14	宮内2号墳	小山市	円墳	29	二条三段	半円・円	B
15	寺野東6号墳	小山市	円墳	20	二条三段	半円・円	B
16	菅田24号墳	足利市	円墳	7	二条三段	円	B

第6表 銀杏葉線刻埴輪出土古墳一覧表

古墳名	図番号	器高	口径	底径	1段	2段	3段	口縁	透孔	
笹塚古墳	36図	2	31.2				12.2	13.5	円形	
	37図	3		22	14.5	14.5				
		4	53	28.5	23	14	12.5	12	14.5	半円形
		5		35.2				12.5	12.6	半円形
		6		34					15	半円形
	38図	8					12.5			
		9						12.5		隅丸方形
		10					13			
		11			23.5	14	12.5	12.5		
	39図	14	49.3	31	21	13	11	13	13.5	隅丸方形
		15							14.5	
		18			20.5	11.2				
	40図	19		29				12	11.5	半円形
		20			22	15				
		38			23.5	13.5	12			
		39		29					11.5	
	41図	42		34					14.5	円形
		45		35					11.5	円形
		47			22	14.5	12.5	13		
	42図	48			20.7	13.6				
28図		1		18.6	14.5					
塚山古墳	28図	2		23.2	13	11.5				
		3		22	14					
		4		23.6	14.4					
		5		27				11.5	10	円形
		6					14			方形
		7			18					
		9					11.5	11.5	14.5	円形
	29図	10		28.8			12.5	12	12.5	半円形
		11					11.5			円形
		13	47.5	25.2	21.1	14	11.5	11	11.5	半円形
	30図	15			19.6					
		18						11		
		20						12		円形

※塚山古墳図番号は『峰考古』9号より

第7表 笹塚古墳と塚山古墳埴輪比較表

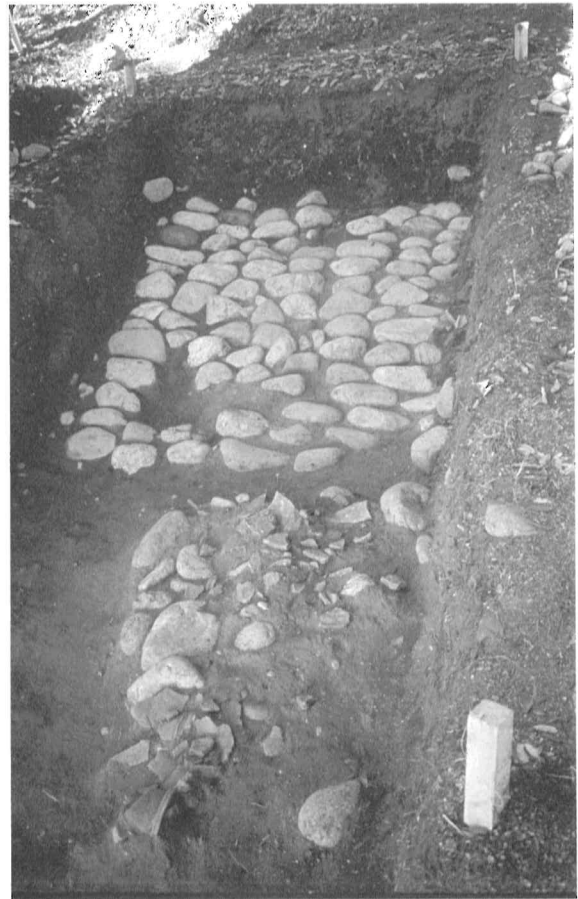


第55図 笹塚古墳 推定復元図

写真図版



① T - 1 葺石確認状況



② T - 2 葺石確認状況



③ T - 4 断面確認状況



① T - 5 断面確認状況



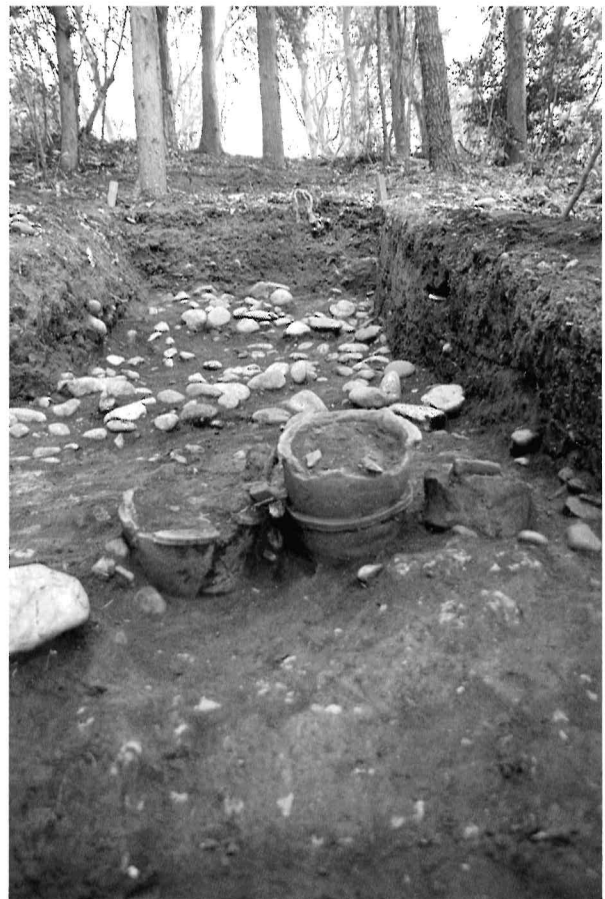
② T - 5 遺物出土状況



① T-8 埴輪出土状況



② T-9 葺石確認状況



③ T-10 埴輪確認状況



① T-11遺構確認状況



② T-13断面確認状況

PL5



① T-15外濠確認状況



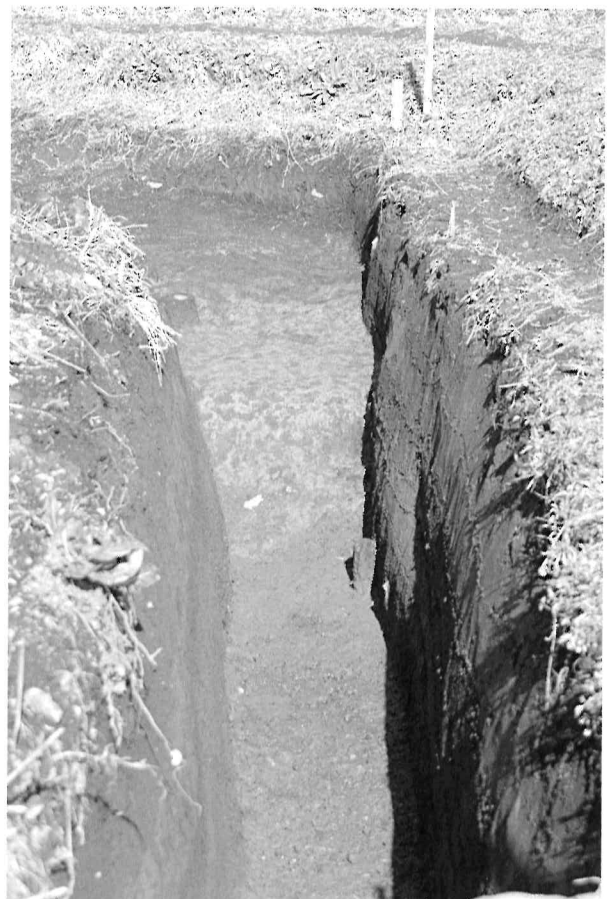
② T-19葦石確認状況



② T-19埴輪出土状況



① T-21内濠確認状況



① T-22内濠確認状況



1



3



2



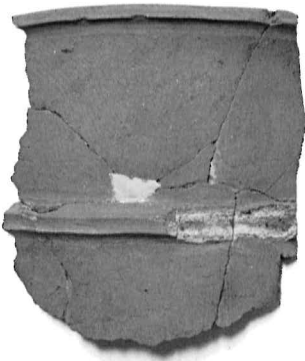
4



5



5 (線刻)



6



7



8



9



10



11



12



13



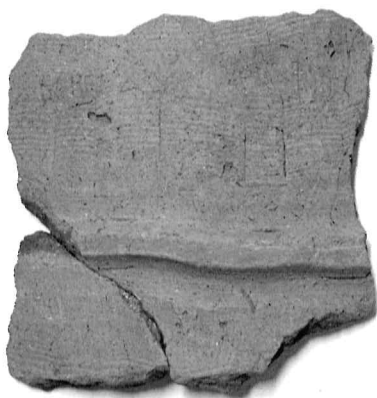
14



15



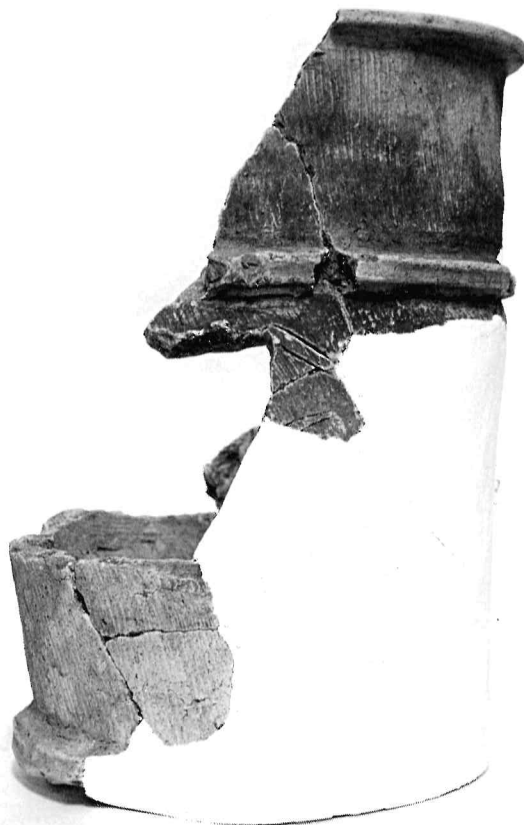
16



17



18



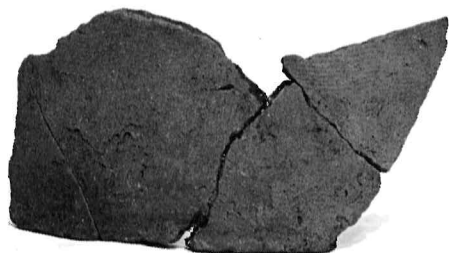
19



20



22



21



23



24



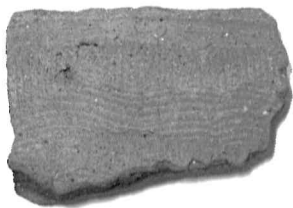
25



26



28



27



30



29



31



32



33



34



35



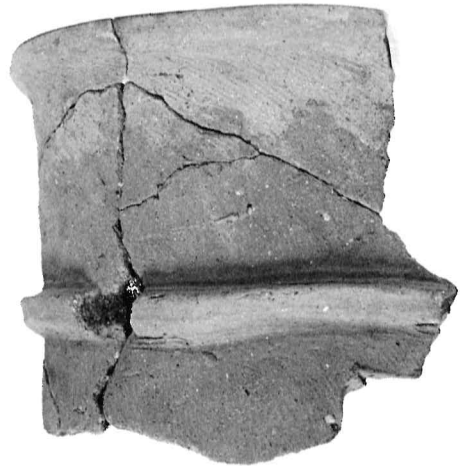
36



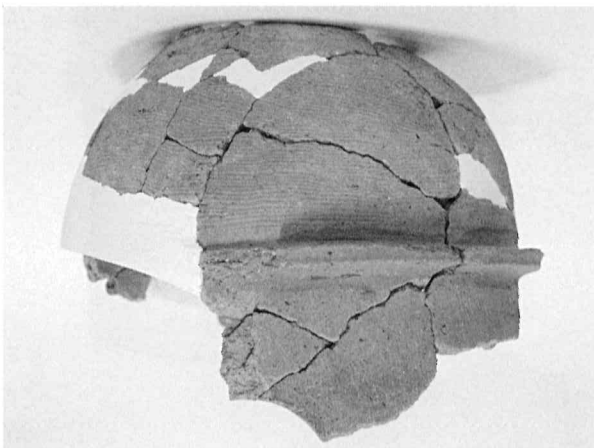
37



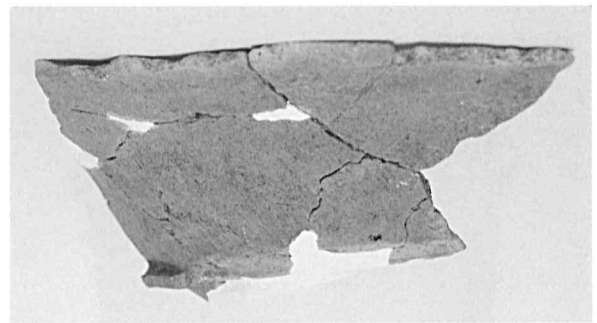
38



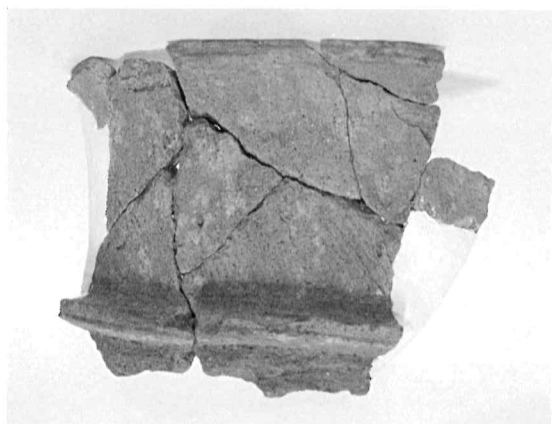
39



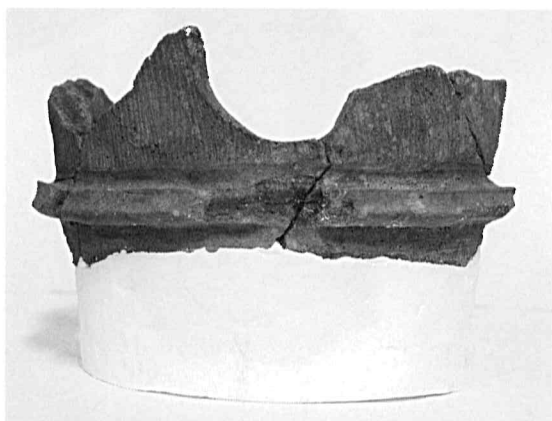
40



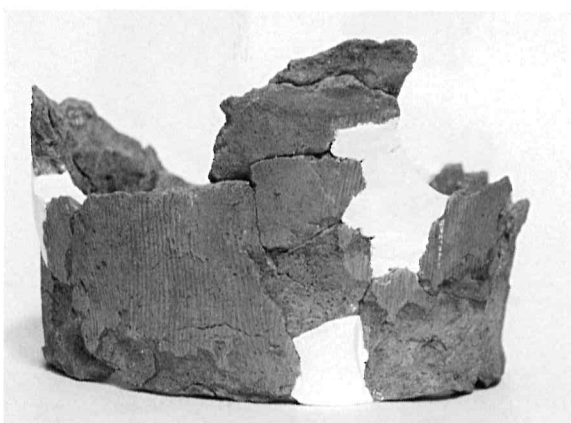
41



42



43

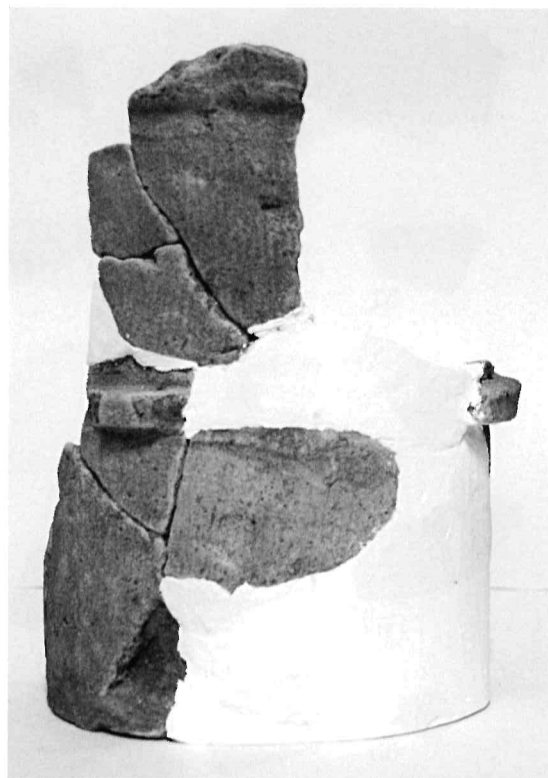


46

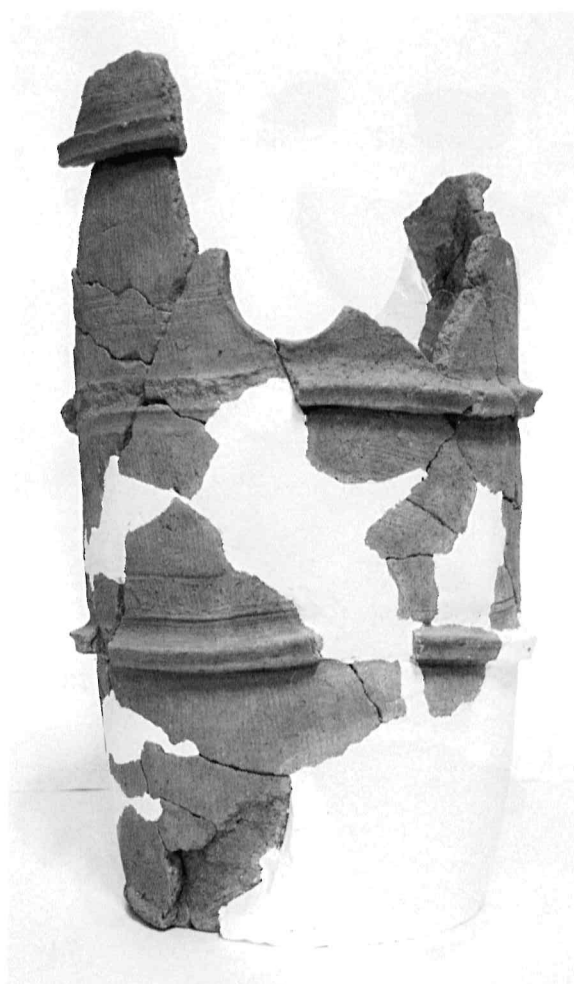


①埴輪42~48

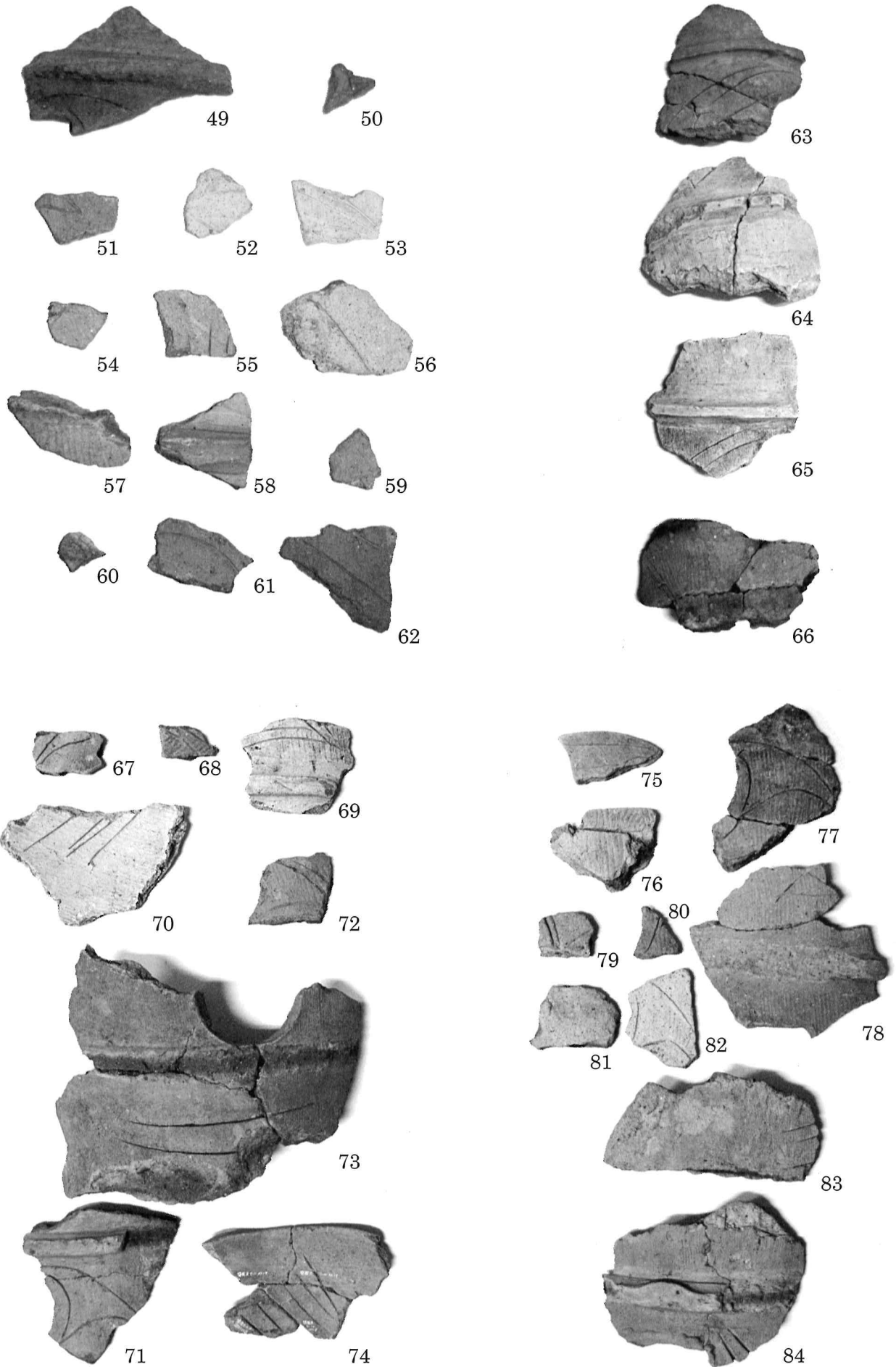
48



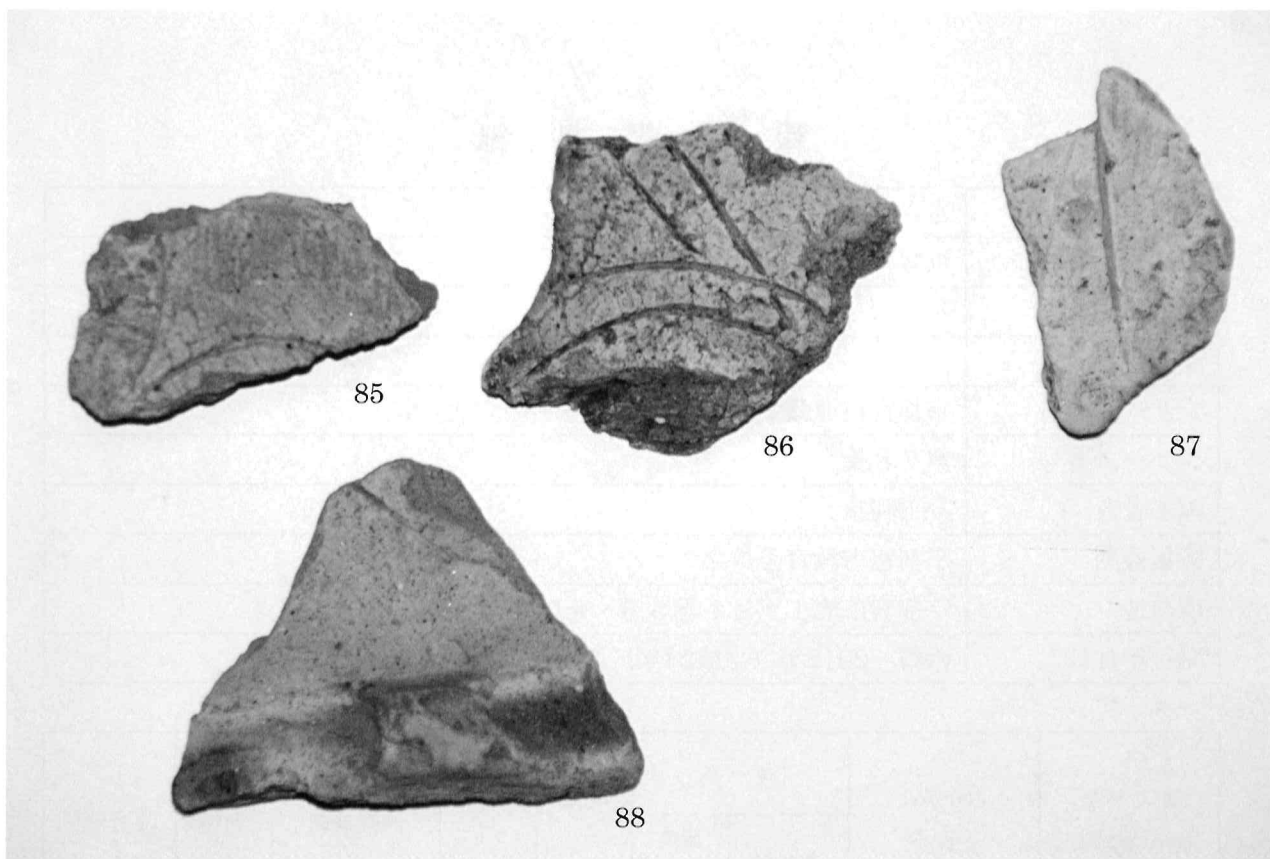
44



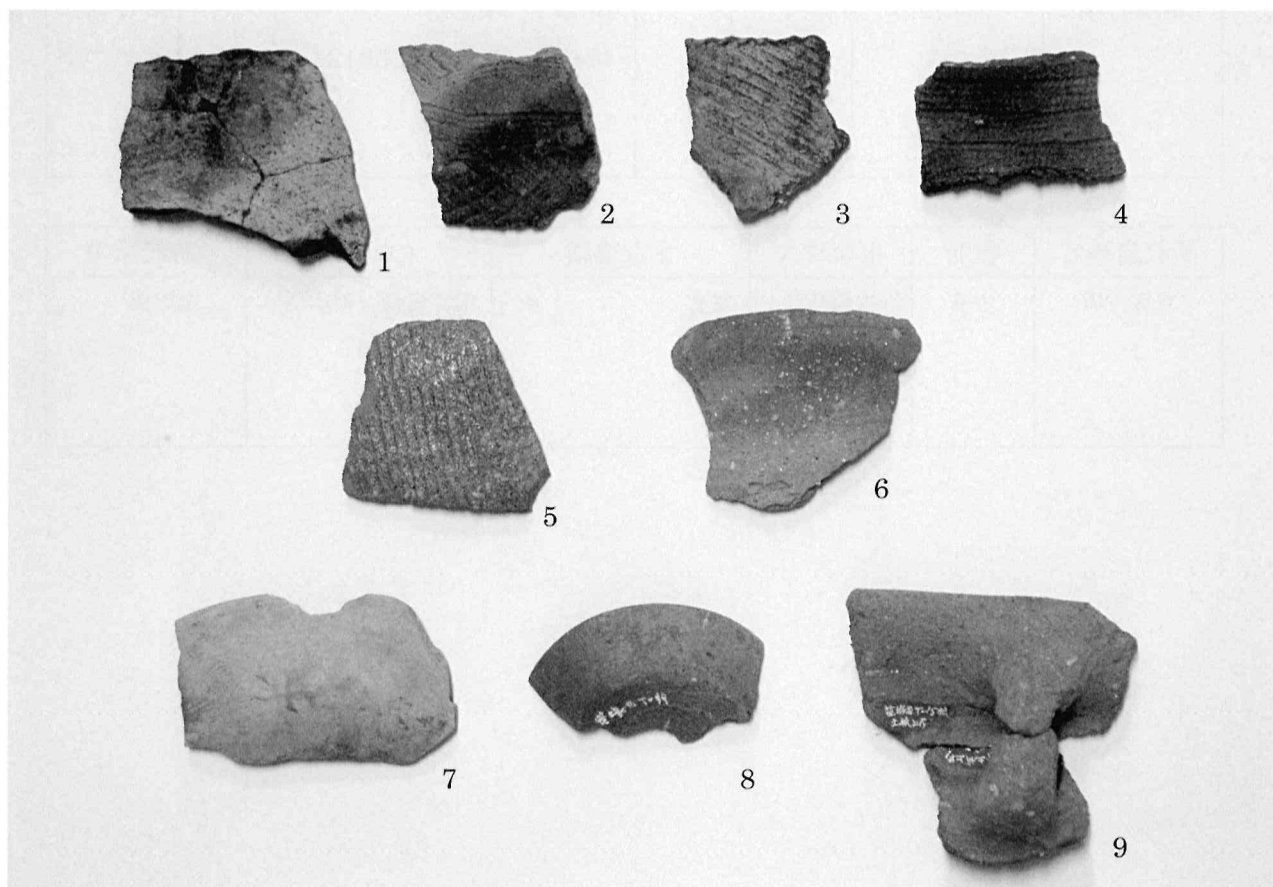
47



①埴輪49～84



①埴輪85～88



②その他の土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	ささづかこふん
書名	笹塚古墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第78集
編著者名	今平利幸
編集機関	宇都宮市教育委員会
所在地	宇都宮市旭1丁目1番5号 TEL028-632-2764
発行年月日	西暦 2012年(平成24年) 3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査 面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
ささづかこふん 笹塚古墳	うつのみやし 宇都宮市 とうやまち 東谷町	09201		36度 28分 48秒	139度 53分 55秒	20061101 ～ 20081228	300	遺跡の範囲確認のための調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
笹塚古墳	古墳	古墳時代	古墳 1基	円筒埴輪、朝顔型埴輪、土師器	二重周濠

宇都宮市埋蔵文化財調査報告 第78集

笹塚古墳

平成24年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会文化課

(宇都宮市旭1丁目1番5号)

TEL (028) 623-2764

印刷 下野印刷株式会社

(宇都宮市宝木町1-28-11)

TEL (028) 622-6953